

小田原市立小田原駅東口図書館
図書館ショートストーリー
作品集



ODAWARA EKI
HIGASHIGUCHI
LIBRARY

目次

『本になにかがはさまっている話(全六作品)』 伏見サマータイム	……	1	『謎解きは図書館の中で』 回遊魚	……	58
『図書館に開いた妖精の扉』 伴田伊吉	……	2	『石鱈』 保美田まや	……	64
『姉と貴女と』 ニボシ	……	5	『ミステリーへのいざない』 渡辺明子	……	68
『図書館の幻』 藤永深里	……	6	『ほどける場所で』 やもりん	……	70
『夜話の祭』 山野こだま	……	9	『いざないの和紙』 瑚灯	……	71
『名前の変わる物語』 ヨム	……	17	『梅ちゃんとヒコナちゃんの小田原大冒険』 きつどG3	……	75
『忘れ物』 森野くるみ	……	22	『小田原駅東口図書館爆音デー』 きつどG3	……	81
『図書館のハローワーク』 松本一裕	……	25	『ある家族の肖像』 比良岡美紀	……	87
『親を自由に選べる世界』 むーたん	……	30	『秘密の303』 鳴原あきら	……	95
『何でもやり直せる』 むーちゃん	……	37	『夏美が試した夏への扉』 櫻井由一	……	104
『全員を選ぶわ、私』 ムー子	……	37	『檜の葉の君』 迎ラミン	……	112
『即、思ってもないような素晴らしい人生になる』 ムーちゃん	……	38	『年下の君』 迎ラミン	……	120
『捨ててなかった』 むーちゃん	……	39	『解けない謎には林檎をおひとつ』 遠山彼方	……	128
『コトバを守る人』 ゆずき	……	42	『ミライアルオトメ』 遠山彼方	……	135
『図書館の戦士たち』 葵郁	……	43			
『ある夏、一枚の紙きれ。』 美咲雅桜	……	51			
	……	56			

本になにかがはさまっている話（全六作品）

伏見サマータイム

一、

あれ、本になにかはさまっている。

確認すると、小さな紙製の葉がでてきた。

表にも裏にも、文字が印刷されている。

いや、文字らしきものと言ったほうがいいのか。少なくとも、それは私が今までに見たことのない文字だったから。

誰かが間違えて入れたままにしているのだろうと思ひ、葉は抜き取った。

図書館で働いている他の司書にも見せたのだが、やはり誰にも文字に見覚えがなかった。

一人、大学時代に言語学を勉強していたという司書がいて、彼女だけは妙に興奮した顔をしていた。もしかすると、今までに発見されたことのない文字かもしれないと言っていた。

せがむ彼女の気迫に圧されて、私はその葉を預けた。

今でも彼女は、葉に記された文字に夢中になっている。最近、あれは異世界の文字ですと力説し始めていて、少し心配になっている。

二、

あれ、本になにかはさまっている。

抜き出してみると、それは黒い活字が連なった鎖だった。平仮名にカタカナ、それに漢字が、それぞれの文字のデコボコにうまくはまって、一つの鎖になっている。

抜き出したページには、ところどころ文字の抜けが目立つ。鎖になった文字が抜けているんだと、なんとなくわかった。

これは大変だと思つて、慌てて図書館の司書さんに報告した。

司書さんは文字の鎖を見ると、挟まっていたページに鎖を戻し、数回、軽く本を振った。

カランカラんと軽やかな音が聞こえた。

これで大丈夫ですよと言いながら、司書さんはさっきのページを開けた。

文字の鎖はなくなっていて、抜けていた部分には文字が戻っていた。

それ以来、本を軽く振ってみることがある。あの時のようにカラカラと軽やかな音が聞こえたことは、まだない。

三、

あれ、本になにかはさまっている。

司書の山野さんが変な声をあげた。

横を見ると、確かに本の中央辺りに妙なふくらみがあった。

返却された時にはなかったのになあといいながら、山野さんが本を開ける。

途端に、三匹の蝉がジジッと鳴きながら、本の中から飛び出してきた。

ウヘエと山野さんは叫んで、その場に尻もちをついてしまった。

蝉たちは、来館者のどよめきから逃れるように、換気用にかけてある図書館の窓から外へと出て行ってしまった。

二人で改めて確認すると、蝉たちが飛び出してきた本は、詩集だった。

膨らんでいたページには、夏に関する詩が掲載されていて、三文字分の空白があった。

今が夏で良かったねと、山野さんは茫然とした表情で呟いた。

開いた窓から、蝉の鳴き声が聞こえている。

四、

あれ、本になにかはさまっている。

図書館の郷土コーナーで見かけた一冊の本には、一枚の写真が挟まっていた。

一人の女性が、日本庭園を背景にして立っている。笑っているのだが、口角を異様にあげているものだから、なんだか不気味だ。

イヤなものを見てしまったなと思いつながら、写真を本に挟み直して図書館を出た。

そのことがあってから、買って来た本の中に、写真が挟まれていることが増えた。

新刊であろうと、古本市で買ったものであろうと、同じ確率で挟まれている。

見つけるのは、一年に五枚くらい。

写真は、見つけたそばから捨てている。

映っているのは、あの日、図書館の郷土コーナーで見つけた写真と同じ、女性の姿だ。

日本庭園を背景にして立っている構図も、口角を異様に上げている笑顔も全く同じだ。

妙なものに目をつけられていた自覚はあるのだが、どうすればいいのかわからない。

五、

あれ、本になにかはさまっている。

図書館が寄贈を受けた、明治時代の書籍を整理している時に、一冊の本が気になった。

『草花百珍』という、草花を使った料理を紹介する本だった。

そこに、何かが挟まっているのだ。

本を開いて驚いた。どのページにも、小さな草や花が生えている。挟まっているように見えたのは、これが原因だったのだ。

「芹」や「蘭」といった言葉の上から、その言葉通りの草花が生えているのである。

顔を近づけてみると、花の香りがする。

先輩の司書に見せると、そういうことはよくあるからねと穏やかに言われた。

ピツと抜けるからとアドバイスもされた。

その通りにやってみると、確かに簡単に抜けた。抜いた後の文字は、周りの文字よりもほんの少しだけ薄くなっているようだった。

前に一度、本から生えた雲を空に還したことがあったよと、横で先輩が教えてくれた。

六、

あれ、本になにかはさまっている。

出てきたのは、小さなメモだった。

「今日の夕食はカレーだよ」

丸っこい文字で書かれている。

小学生くらいの子が書いたような文字だ。

変なものと思いながら、メモを挟みなおした。

その後もしばらく図書館で調べ物をしてから、下宿しているアパートへと帰りはじめた。

途中、急にカレーが食べたくなった。

近くにカレーのチェーン店があったので、そこに入って食べた。

「今日の夕食はカレーだよ」と記されたメモについて思い出したのは、アパートに戻って一息ついていて時のことだった。

今でも時々、図書館の本の間にメモが挟まっていることがある。

例の丸っこい文字でその日の夕食のことが書かれていて、帰り道で急にそのメニューが食べたくなり、店に入って注文している。

だから、あれはきつと、予言なんだと思う。

図書館に開いた妖精の扉

伴田伊吉

あれ、本になにかはさまっている。開くと妖精がいた。妖精だろうか？ちよっとぼっちゃりして、羽が生えていて、自分を助けてくれたお礼がしたいと、ドングリの妖精だったけれど、自分は、丸いドングリだから、見た目で栗の妖精に間違えられるのが、嫌なんだと言う。

今日は幻覚が見える。栗の妖精だろうが、ドングリの妖精だろうが、妖精が、本場にいたなんて、いつもは声は聞こえても、姿は見えないからAI生成で声を誰かが操っているのかと、思っていたが、フワフワ浮いてるし、本物の妖精なのかな？今日選んだ本は真夏の夜の夢。じゃあじゃあ。あなたがクロトクリンなの？

と、尋ねるともちろんというように、ふんぞり返る。なにごととも、本と全くイメージが違うなんて失礼な。

妖精の祭りの夏至の日だから、今日は願いをひとつ聞いてあげる。恋を叶えたいか？お小遣いを増やして欲しいか。成績がよくなりたいたいか。スポーツで一番になりたいか。

妖精は得意げだ。なにに、妹がお守りあげたら階段から落ちて怪我をした？どこの階段かと聞くとお城の階段だと。

厄落としたな。そのお守りどこで買った。インターネットで、お母さんが、遠くの神さままでお参りに行けないから、お金もってなくて、クレジットカードで、買ってくれただと？

お守りは、お母さんに返しな。現金ならともかく、クレジットカードで、買ったから、神様が困ってるんだ。

自分のお小遣いで、近所の神様にしなさい。ご利益は地元の神様が、お前のことよく知ってるよ。お財布に入ってる、お前さんのお金で桜のお守りなら、お前さんでも買えるだろう。そうなさい。

神様だって地元か、親戚の縁があったり、旅行で、買えれば、それをずっと持つておきなさい。

あとは、郵送で現金書留で、送ってくれる、神社になさい。

と、妖精は、言ってる。どんぐりをくれた。これを持って帰って妹と二人で首飾りかキーホルダーにして、妹を大切にね。

お守りに今日あげてね。なんてつたつて妖精のお祭りだからね。気づくと妖精は居なくなっていた、本を借りて帰ろうとしたらカバンの中にドングリがあった。妖精かあ。家に帰ったら、真夏の夜の夢よんでみよう。そう思った。図書館の出来事でした。

姉と貴女と

ニボシ

あれ、本になにかはさまっている。

本の返却のためにたまたま訪れた図書館で、たまたま開いた一冊の小説。

そこには二つ折りにされた一枚の紙きれが挟まっていた。

「おっと」

手元が狂ってパラリと開かれ、中身が見えた。目に入った途端、私は驚いてしまう。

そこにはとある小説のタイトルが書かれていた。数か月前に亡くなった姉、夏樹のとそっくりな文字で。

改めて紙切れの文字をまじまじと見る。小説のタイトルは「遙かなる花束」。この「る」のねじ曲がったような特徴的な書き方は明らかに姉の書き方だ。あんなに大好きだった姉の字を私が見間違えるはずがない。あんな病気になるなれば、きっと今でも仲よし姉妹だったはずだ。

私は「遙かなる花束」を探す。今時の図書館はパソコンで位置を調べられるから楽だ。

プリントアウトされたレシートをもって棚へ向かう。

上から順に探して、見つける。

「遙かなる花束」をパラパラとめくると、またもや二つ折りになった紙切れが見つかった。しかし、そこには「この小説を読み切ってから開くべし」と書かれている。

こんな忠告、と思うかもしれない。でも私はそのルールを破る気にはなれなかった。

だからその日は「遙かなる花束」を借りて、帰路についた。

就寝前、さっそく私は「遙かなる花束」を開いた。

「遙かなる花束」はよくある恋愛小説だった。一人の女性が置かれた環境に苦しめられながらも必死に恋愛と向き合い、意中の男性と結ばれる話だ。

ふだん読書になれない私でも、すらすらと読むことができた。

「……？」

なぜこの本をわざわざ読むように姉はこんなメモを残したのか。

特に姉と関連があったとも思えない。

そもそも姉は私の前で読書していたことがあっただろうか。

……記憶の中の姉は元気で活発な女性だった。

バスケット部のエースで、女の子にもモテた。黒髪の長髪が似合う人だ。

さて、と。

私は思い直してお待ちかねのメモを開く。そこにはまた本のタイトルが。

今度は「冬と春」だった。

翌日、私は図書館を訪れ、また検索をする。

同じタイトルの本がいくつもあり、探すのにそこそこの時間がかかった。

メモを見つけたのは伝記のコナー。どうやら昔の学者が、植物の栽培に成功するまでを記したもののようだ。またもやメモには「読み切ってから中を見るように」と書かれている。

こうして、私の図書館での本探しは繰り返される。

「貼る。」

「温泉旅行ベストテン」

「泉の底から」

「ハルモニア」

読んでいる本にはいくつかの共通点がある。タイトルが似通っているものが多いことと、主人公が努力の果てに何か成し遂げるものが多い。これは何かのメッセージだろうか。

何冊かして、ようやく最後の一冊にたどり着く。のんきに「最後だよー!!」と書かれたメモが挟まれていた。

そこには一つの電話番号が書かれていた。

これは、いったい…？

ここにかけてもいいのだろうか。

もし、あの字が姉のものではなく、誰かのくだらないいたずらだったら？

私はとんだ大馬鹿者になる。

でも、姉の残した物があるなら、それでも知りたかった。

ええい、こうなったら公衆電話からだ。

部屋を飛び出し、一番近くの公園へ。あそこには確かあるはず。

数分走って、電話ボックスの形が見えてきた。

「はあ…はあ…」

ドアに寄りかかりながら、ガラリと開ける。

受話器を取り、お金を入れて、ダイヤルをプッシュする。

響くコーリングの音。

「…ハイ」

出たのはどこか気弱いような女性の声だ。何者だろうか。

「もしかして…夏樹ちゃんの妹さんですか？」

「私は春香、伊藤春香といいます」

それから私は姉が最後を過ごした病院に訪れた。

「お姉さんのことは大変だったわね」

と馴染みの看護師さんが挨拶してくれる。

「今日はどうしたの？」

「ちよつと、隣の人に会いに来たんです」

「隣の人というと、春香さんね。あの子はお姉さんとも仲が良かったのよ」

「面会はその子の励みにもなってくれるはずだから、きつと喜ぶわ」

「…はい」

ついたのは三階の病棟。難病の患者が多くいるフロアだ。

「Aの7号室…」

「Aの7号室…」

あった。
ドアを開け、声をかける。
「こんにちは〜」

中から慌てるような音。
しばらくして、

「…どうぞ！」の声。

しやるるとカーテンを開くとそこには少しやせ細った女性がいた。

「二回目の初めましてですね」

「わたしが伊藤春香です」

わたしは姉のメモと、これまで借りた本について洗いざらい話す。

「そっか、そうだったんだね」

優しく彼女は語り掛ける。

それから、春香さんから姉とのエピソードを聞いた。どうやら姉と春香さんは隣同士のベッドで、かなり仲が良かったようだ。

春香さんの誕生日にはこっそり病室を抜け出して姉がケーキを買ってきたこと。

ふたりで恋愛ドラマを見ては盛り上がったこと。
お医者さんのイケメンランキングを作ったこと。

お互いがお互い、支えあってきたという。

そして、最後に彼女は姉からお願いをされていた。

それが死ぬ前、少しでも気を紛らわすために読んでいた本たちに仕掛けたイタズラについてだった。

「家族のだれかが見つけて、元気の出る本を讀

んで、少しでも明るくなってくれたらって、夏樹ちゃんは言ってたよ」

「だからわたしも、協力することにしたんだ」

：自分のことしか考えていない私とは大違いだ。死に目には立ち会ったが、私は姉から目をそらしていた。弱っていく姉の姿を見たくなかった。そんな姉の心の支えになっていたのが、読書と、隣のベッドの春香さんだったのだ。

もっと私が姉に寄り添っていたならば、姉は読書に逃げる必要もなかったのではないだろうか。後悔が胸をグツと襲う。

「うっ…うっ…」

気が付けば涙がこぼれていた。

「ねえ、妹の泉ちゃん。お姉さんから頼まれたのは、あなたたち家族が少しでも明るくなることだよ」

「わたしもね、夏樹ちゃんが死んじゃった時、すごく泣いたんだ」

「でも、夏樹ちゃんと約束したの。絶対病気を治して、泉さんと友達になるって」

彼女は姉とは違い、回復の兆しが見え始めている。

「だからね。大丈夫だよ」

春香さんは黙って私を抱きしめてくれた。

しばらくして泣き止む二人。

「それにね」

私を抱きしめたまま、ぼつりと春香さんがつぶやく。

「ほら、わたしってば入院が長いから、あんま

り友達いないんだよね。夏樹ちゃんはそれがずつと心配だったと思うんだ。」

「だから、泉ちゃんと友達になってほしい、っていうのは、わたしためだとも思ってるんだ」
「ねえ、泉ちゃん。わたしのためにも、わたしと友達になって？」

私はぐっと顔をぬぐって、涙をごまかして、できなけれど、いつも通りの声色で
「わかりました。姉の思惑に乗ってあげます！」

こうして、私たちは友達となった。

数年後、図書館にて。

あれからすっかり二人とも、趣味が読書になってしまった。

これからも苦しいこと・つらいことがあるかもしれない。

でもね、前を向けば、良いことあるよね？

お姉ちゃん。

図書館の幻

藤永深里

あれ、本に何かはさまっている。

思ったときにはもう、それはひらひらと舞い落ちていた。

白い、何か。紙切れのようだ。何だろうかと屈んで手を伸ばした。けれどその前に、別の手がそれを拾いあげた。

「これは、僕のだよ」

私と同一年くらいの少年だった。わずかに掲げて見せたそれを上着のポケットにしまい、少し笑った。それから、ねえ、と誘うように言う。

「僕と、かくれんぼをしようよ」

ページをめくる音だけが微かに響く、午後の図書館だった。高窓から射す光には、既に夕暮れの色が混じっていたと思う。

熱心に本を探す父親から離れ、私は本棚の迷路をさまよっていた。まわりの本はすべて私には難しすぎたけど、本は大好きだったから、それに囲まれ自由に手にとれるいうだけで嬉しかったし安心できた。

けれど、その少年を見た途端、逃げ出したいような怖い気持ちに襲われたのだ。なぜなのかはわからなかった。見た目は、ごく普通の男の子でしかなかった。いや、むしろ、優しそうでさえあったかもしれない。

それなのに私は、身を竦ませていた。口元の強
ぼりを感じながら、やっとの思いで声を出した
ことも、よく覚えている。

「図書館で遊んだりしちやいけないのよ」

「大丈夫だよ。大きな声を出さなければ」

私の声が震えているのに気づくふうもなく彼
は言い、私の腕をとろうとした。後退さりた
のに動けずにいる私を見て、彼はまた微笑んだ。

「怖がることないよ。最初は僕が鬼だ」

もううまく声を出せなくなって、私はただ首
を振った。彼は構わず、私に背を向けた。両目
を手で覆う。

「さあ、行って。上手に隠れなよ」

すぐに、いち、に、と数え始めた。彼とかくれ
んぼなどする気のない私は、どうしていいかわ
からず、その場に立ち尽くしていた。

「菜緒」

ふいに名を呼ばれた。振り向くと、本棚の間
に父が立っていた。

「こんなところにいたのか。そろそろ帰るよ」

片手に本を抱えて父は言った。私はほっとし
て、父に駆け寄った。

「あの子が」

「え」

「かくれんぼをしようっていうの」

後ろを見て、父に示そうとした。が、そこに
少年の姿はなかった。

「かくれんぼ？ 友達に会ったのか」

「ううん、知らない子。いなくなっちゃった」

私は呆然として言う。父はあきれたように笑
った。

「知らない子とは遊ばない方がいいぞ。第一、
図書館で遊ぶのはよくないな」

「遊んじゃいけないって、私いったよ。でも、聞
いてくれなかったの。それで」

言いつのる私の頭を、父は軽くなでた。

「わかった、わかった。菜緒は悪くない。いいか
ら、もう帰ろう」

「でもあの子、僕が鬼だっていつてたの。私がだ
まって帰ったら、ずっと私のこと探すかもしれ
ない」

「けど、いなくなっただろ。きつと、お父さん
が来たから、おどろいて逃げたんだよ。こんな
ところで遊ぶなって、大人にしかられると思っ
たんじゃないのかな」

「でも」

「まあたしかに、帰ったのに気づかないで菜緒
を探し回ってたら、気の毒だよなあ」

父はつぶやき、困ったように天井を仰ぐ。や

がて私を見下ろし、ちよつと探してみるか、と言った。

他にどうしてみようもないので、私はうなづく。そして私たちは、少年が隠れそうな場所を順に見ていった。

といつても、そんな場はそれほどなかった。図書館の中は、迷路のようではあるが、完全に身を隠せる場所はない。

少年はどこにもいなかった。最後に父が、ここだとばかりに男子トイレをのぞいたが、やはり彼の姿はなかった。

「きつと、もう帰ったんだよ」

そう父は言った。

「これだけ探してもいないんだ。もしかしたら、最初から菜緒のことをからかうつもりだったのかもしれないぞ」

それでも父は念のためと言って、本を借りる手続きをした後で、少年のことを受付の人に話した。図書館の人は頷きながら話を聞き、私に少年の服装や身長などをたずねた。

私は答えられなかった。それらのことを全く覚えていないことに、そのとき初めて気づいた。記憶にあるのは、少年に会ったときの怖い気持ちと彼が言った言葉だけ。

図書館の人が、困惑ながらも、探してみます、と言う。父が、すみません、と頭を下げた。

結局、少年などどこにもいなかったと、一週間後に私たちは受付の人から聞いた。

やっぱり先に帰ったんだな、と父は笑っていたけれど、私にはそうは思えなかった。

「まだ図書館にいたりして。」

「そう思う？」

「秘密の場所に隠れているのかもしれないよ。」

「秘密の場所って」

「図書館には、たくさんあるのよ。」

「そう？ でも私、隠れなよっていわれても、全然場所思いつかなかった」

「今度、教えてあげるわ。」

菜緒、と廊下で声がした。

「なに喋ってるの。誰かいるの」

部屋の扉が開く。少し険しい顔をした母が立っていた。

「なんでももないの。本を読んでいただけ」

「いちいち声に出さないで、静かに読みなさい」

「うん、わかった」

「もうすぐ、ご飯よ」

「うん」

扉が閉まる。本はそばにあったけど開いてはいなかったから、母が嘘に気づいたろうとすぐ

に思い当った。

「叱られちゃった」

——気にすることないよ。

私は部屋を出て、居間に向かう。扉を開けようとしたとき、母の声が聞こえた。

「あの子、また一人で喋ってたのよ。本当におかしいんじゃないかしら。病院へ連れて行った方が——」

「ぬいぐるみにでも話しかけてたんだろ。子供にはよくあることだ」

「でも、この間の図書館のことだって。外でまでそんなこといい出して、幻覚でも見えてるんじゃないの」

「決めつけるなよ。本当に、知らない子がふざけただけかもしれないし。それだって、子供にはありそうなことだろ」

「だって、そんな子いなかったんでしょ。幻覚じゃないなら、あなたが本ばかり読ませるせいよ。変な空想癖のある子になっちゃったんだわ、きつと。幼稚園でも、友達が一人もいないのよ」

「やめろよ。声が大きいぞ」

私は廊下を戻り、わざと足音を立てて居間に近づいた。扉を開ける。けれどももう胸が一杯で、夕食は食べられそうになかった。

「菜緒」

父が振り返る。

「私、お腹いっぱいだからご飯いらない」

「またなの。おやつを食べすぎよ」

あきれたような母の声。

「うん。眠いから寝るね。おやすみなさい」

「おい、菜緒。ちよつとでも食べた方がいいぞ」

椅子から立ってこちらへ来る父に構わず、私は扉を離れた。部屋に戻り、布団に潜り込む。

「夕ご飯、なんだったんだろ」

——シチューじゃない？　おい、してたもの。

「お腹すいた」

——じゃあ、食べればよかったのに。馬鹿ね。

「だって、お母さん怖いんだもん」

——たしかに、菜緒のお母さんって怖いよね。

「そう思う？」

——思う思う。でも気にすることないわ。怖い人は、どこにでもいるじゃない。

そうだね、と私は頷き、二人で笑いあう。

慰めてくれる友達に名前はなかった。姿だつて、もちろん見えない。彼女が空想の友達だということとは、百も承知だった。

私はおかしくなんかなくない。病院へ行ったからといって、どうにかなるような状態ではないと

思う。本を読み、空想の世界に生きるのが、そんなにいけないことなのか。

——いけなくなんかないよ、全然。

「そうだよね」

——嫌なこと考えないで、もう寝たら。ますますお腹すいちゃうよ。

「うん。じゃあ寝るね。おやすみ」

——おやすみ。

目覚めた私は、頬が濡れていることに気づいた。眠りながら泣いていたらしい。珍しく昔の夢など見たせいだろうか。

そういえば、そんな子供時代もあったかもしれない。今となってはもうどれれも、本当にあったことなのかと他人事のように思うことばかりだ。

私は、あの頃とは違う。社会不適應者になるのではないかという母の予想を裏切り、不登校にもならず、どころか、成績もよい優秀な生徒として小・中・高校生活を過ごした。

浪人もせずに大学へ行き、卒業後すぐに就職し、今は働いて二年目だ。心配性の父と口うるさい母から離れたくて、一人暮らしをしている。

生活は順調だ。仕事にも職場の人間関係にも問題は無い。友人と呼べる相手はいないが、特に困ることもない。本と空想の世界に浸り、普通の友達を欲することもなく、常に白昼夢の中

で生きていた子供が、これほど現実に適應した大人になるとは。

正直、自分でも驚いている。

けれどおそらく、これが当たり前なのだろう。子供の世界と大人の世界は、まったく別物だ。

私は朝食を済ませ、家を出た。上司に頼まれた調べもののために図書館へ向かう。ネットで仕入れた情報でも十分なことだったが、紹介されていた専門書に少し目を通して見たかったのだ。

休日に仕事の用で外出とは、つまらない話かもしれない。けれど、どうせ他にすることもない。外がよく晴れているせい、午前中のせい、図書館にはほとんど人がいなかった。

ここへ来るのは久しぶりだった。どれくらいぶりだろうかと思いつつ、書架の間を進む。専門書の棚は奥の方だったはずだ。静かだ。一歩進むごとに、外の世界の音が遠ざかっていく気がする。

そういえば、このところ、仕事関係以外の本は全然読んでいなかったな、と思った。このところ、というか——いったいいつから読んでいなかったらう。もう思い出せないくらい前からかもしれない。図書館へ来ていない、どころの話ではないようだ。あんなに好きだったはずなのに、どうしてだろう。今までそのことを考えもしなかったのは、なぜだろうか。

目当ての場所へとたどり着き、私は立ちどま

った。本の背に目を走らせつつも、心は上の空だった。妙に落ち着かない。

おかしい。以前はこんなことはなかったはずだ。昔は図書館へ来れば落ち着いたし、ひどく安心できた。大好きな本に囲まれて――。

とにかく気を静めようと、適当に一冊を手にとった。開いた途端、何か紙切れのようなものが、ひらひらと本から落ちた。

何だろう。行方を目で追ったはずなのに、それは不意に見えなくなった。書架の下にでも入ったのだろうか。確かめようと身を屈めたところで、

「やっと思つけた」

誰かが、そう言うのが聞えた。

親しげな声だった。隣に、ふと人影が並ぶ。私は身を起こし、相手を見た。

「ずっと探してたんだぞ」

男の人だった。見知らぬ人だ。なのに彼は、私を見て微笑む。仲のよい人間だけに見せる、うちとけた笑みだった。

私は彼と反対側の隣を見た。そこにいる誰かに、彼が話しかけたのかもしれないと思つたのだ。

隣には誰もいなかった。男の人が、おかしそうに笑った。誰もいないよ、と言う。どうやら、私に話しかけているのは間違いないようだった。

「あの」

そう言つたものの、続く言葉は出てこない。まじまじと彼を見るが、やはり知らない人だ。

「上手に隠れたね、といたいところだけど、外に出るのは反則だよ」

彼が言う。意味がわからなかった。

「あの」

私はまた言つた。それ以外の言葉が出てこなかった。

見つけたってどういうことだろう。探してたって。

上手に隠れた？ どこかで聞いたことのある言葉だ。そういえば、さつき本から落ちた、あの紙切れのようなもの。あれにも覚えがあった。まさか――

「あなた、まさか、あのときの」

「何だ、忘れてたんだ。ひどいな」

言葉とは裏腹に、彼はまた柔らかく微笑んだ。

「こつちは一冊一冊探して大変だったよ。なにしろ、この本は多いからさ。ま、だからおもしろいんだけどね」

私は口を開けたまま、啞然として彼を見つめた。

やっぱりそうだ。あのときの少年。かくれんぼをしようとして私を誘つた、あの少年。それがこの人。でもまさか、そんな。

「ずっと探してたって」

言いかけて、私は口をつぐんだ。

きっとこれは、何かの冗談に違いない。そうだ。あのとき私を見かけて、顔を覚えていたとか。それで今度こそ、からかってやろうと思っているとか。

「ずいぶん前のことなのに、よく私だってわかりましたね」

私は冷たく言った。一度会っただけの人のつまらない冗談につきあう義理はない。

「見間違うわけない。君は僕らの世界の人だもの」

彼の言葉に、ますます訳がわからなくなつた。

「どんなにうまく外に馴染んだつもりでも、すぐにわかるよ」

何を言っているのだろう。私は眉をひそめた。

馴染んだつもり？ いったいどういうことだ。

「僕が怖くて逃げだしたの？ 外の世界を見ながらってのは聞いてたけどね。かくれんぼに見せかけて連れ戻そうなんて気はなかった。僕は単純に、君と遊んでみたかっただけなんだ。脅かしてしまったのなら謝るから、もう戻っておいで。友達もとつくに帰ってきてる」

「友達？」

「しばらく一緒にいたろ。マリだよ。もっとも君は、彼女の名前を忘れてたみたいだけ」

名前を知らない友達。

確かに昔、一緒にいた。空想の、見えない友達。

彼女のことを誰かに話したことはない。なのになぜ、彼はそれを知っているのか。

「君はよく泣いてたって、マリから聞いたよ。当たり前だ。自分の居場所じゃないところにいるんだもの。つらかったろ？」

言葉は優しい。けれど私は彼が怖かった。たしか、初めて会ったときも同じ思いに襲われた。この人はいつたい、何者なのだろう。

「あなた、誰なの」

私の声は震えていた。昔と同じに。

「まだ思い出せないかな」

彼は残念そうに笑う。

「僕は、ここの番人だよ。物語から抜け出した皆が、あまり羽目を外さないように見張ってる。怖い番人がいるよ、っていわれたことないかい」
——怖い人はどこにでもいるじゃない。

不意に声が甦る。あのとき、なぜか妙に納得した言葉。

だけど、それ以上は思い出せなかった。何ひとつ。

私は男の人から目をそらし、俯いた。

番人。物語から抜け出したものが、逃げ出さないように見張る。

ならば私の居場所は、この図書館の本のどれかということだ。つまり私は、物語の住人。

そんな馬鹿な。

私は顔を上げた。何も覚えてない。そう言うおとしてやめた。

そもそも、覚えているべきことがあるのかどうかも定かではないはずだ。いや、むしろ信じる方がどうかしている。自分が本の中の住人だなんて。

「からかうのはやめてください」

私は言った。彼がじつと私を見る。真っ直ぐな視線が妙に痛かった。

いたずらにひっかからず、つまらないと思っている——ようには見えない。私を哀れんでいるのだろうか。それとも心配しているの？

いずれにしても耐えられなかった。私は男の人に背を向け、駆け出した。図書館で走るなんて非常識だけど、構ってはいられない。今すぐここから逃げ出さなくては。でないと私は、きつとこの人に囚われてしまう。

「また行っちゃうの」

彼の声が追いかけてくる。離れているのに、まるで耳元でささやかれているようだ。無視して入口まで走る。受付のカウンターで職員が何か言っていた。静かにしろと注意したのかも知れないけど、それも無視する。二度とここへ来

るつもりはないから平気だった。

入口の自動ドアが開く直前に、声が響いた。

「必ず戻っておいでよ。ずっと待ってるから」

私は手で耳を塞ぎ、外に出た。眩しい陽の光に目を射られて立ち竦む。背後でガラスのドアが閉まった。

——ずっと待ってるから。

耳を塞いでも、言葉は木霊するように響いた。おそろおそろ振り返ったが、彼の姿はなかった。

追ってくる気はないようだ。助かった。あれはきっと、ストーカーか何かの類だったに違いない。私はそう思い込もうとした。

そう。きつとそうだ。ここへは二度と来ない方がいい。また待ち伏せているかもしれないもの。

心の一部は、それは違うと訴えていた。追う気がないのでない。彼は図書館から出られないのだ。番人なのだから。

せめぎ合いを抱えたまま、おぼつかない足どりで図書館を離れる。

私はいつたい誰なんだろう。本当の居場所が他にあるのだろうか。

五月にしては強すぎる光の中で、すべてのものが歪んでいく気がした。

夜話の祭

山野こだま

あらっ。何かはさまっている。パラパラとページをめくっていると、何かはさまっているの気がついた。もう一度ページをめくって開けてみる。それは一枚の葉っぱだった。何の葉っぱかしら、全体は茶色いが、葉先は赤く色づいている。ふと、一年前の今頃を思い出す。秋風が吹く公園で小学二年生の孫が

「落ち葉は風のお魚だね。」

と言った。びっくりして思わず

「すごい、あんた詩人だね。」

と私は唸った。この二、三ヶ月前のこと、一緒に水族館に出かけたのを思い出した。巨大な水槽の前で孫は、長いこと立ちつくしていた。その時の姿そのままに公園の高い木を見上げていた。落ち葉と水槽の魚が重なったのだろう、それにしても、とても幼い詩人に私は驚いてしまったのだった。

図書館に通いはじめたのは、この孫に読みかせる絵本を借りに来たのがきっかけだった。今から、七年前になる。その頃は、まだ図書館は城址公園の中の古い建て物だった。その後、孫は小学生になり、学校内の図書館で本を借りるようになり、古い図書館は新しい所へと引越した。

ただ、本に葉っぱはさまっているなんて、とカウンターの方をちらりと見る。カウンターの奥のお姉さんは、返却時の本を必ずパラパラと

めくって確認する。以前私は返却時に「これらはさまっていました。」

と小さな紙を手渡された。それには、豚ひき肉だのキャベツだのグリーンピースだのが金額とともに書かれていた。スーパーのレシートだった。読んでいる本を中断する時、ついテーブルの上にある何かを葉としてはさむことがある。カウンターのお姉さんは、そういうものを見落とさないのだ。『でも、落ち葉なんてロマンチックなまさに読書の秋ね、もしかしてお姉さんの粋な計らいなのかも。』思わずにつこりしてしまう。ここは、JRの駅に隣接する市立図書館だ。ビルの中のワンフロアにあるのでそれ程大きくはない。けれど市の中心にあり、我家から自転車、七、八分で来れるし、ついでに駅前のスーパーで食材の買物もすませてしまおうとも便利な所にある。城址公園内の古い図書館も趣があつて好きだ。この新しい図書館もとても好きだ。

借りた本は必ず返す、その時、また借りる。その繰り返しで、年間、結構な数の本を読んでいる。特に近頃は、電気代の節約もありテレビを消して本を読むことが多い。マイペースで読めるのがいい。テレビだとまるで音楽のように言葉が、サアーツと耳を通り過ぎてしまう。でも本は、元へ戻って繰り返し読むことができるのがいい。年のせい、カタカナの多い現代語がスピードを増して耳を通り過ぎることに、少々付いて行けなくなっている。このままテレビを倦厭していると、時代に取り残されてしま

うんだろうと思いつつも、だらだらとつけっぱなしのテレビを消して本を開く。本が持つもう一つの魅力は、読み進めると、頭の中に映像が見えてくることだ。先日読んだ本から古い旅館が見えてきた。煤けた柱、歩くときしむ階段、歪みのある手作りのガラス窓、開けると表通りには、オレンジ色のガス燈がやんわりともっている。そして私は、本の主人公の白い横顔をそっと見ていた。又、別の本では、大きなドームが見えた。ここはフイレンツェだろうか、とんでもない高い天井に一人の画家が絵筆を走らせている。その姿をドアの陰から見つめる人がいた。大きなベールで頭からすっぽり包みこんでいる。しかし、とび色のひとみは、彼への思いを隠せなかった。彼の名はレオナルド、そして女性是我。なんてね。

エレベーターに乗り、六階のボタンを押す。重力に逆らう空気を感じた後、しばらくしてドアが開くと、そこには本棚の世界が広がる。ここは、誰もが本に向き合う空間だ。自分一人になって、小説や絵本に向き合う。窓側に面するテーブル席には高校生の勉強する背中がある。彼女達は、たとえ友達と一緒に来ても、ずっと自分の世界に入って机に座る。それを見ると一人きりの私でもなんとなく平気でいられる。そう、ここはそれが当たり前の静かな空間なのだ。私は本を手を持って奥のガラスステラスへ行く。ドアを開けると、ナイスビューが飛び込んで来る。ここは、なんて贅沢な眺めなんだろう。どおおんと小田原城の天守閣が、正面間近に見

える。こんもりとした松林の上にそびえる白い天守閣はまさに威風堂々と美しい。その右下をシャープに走る東海道新幹線、箱根湯本へ乗り入れている小田急線とかわいい箱根登山鉄道、そして西へ延びる東海道線、なんて不思議な取り合せ、ジャパンモダンなビューだ。その上に広がっているのは天下の剣、箱根の山々である。

今日、私が手にしたのは「遠野物語」。一度くらいはどこかで耳にしたことがある、でも本を読むのは初めてだ。岩手県遠野市、この辺りに古くから伝わる民話を三百程も書かれていて。土地の人が語る言葉そのままに淡々と書き連ね、脚色したストーリーにはしていない。その中には、オシラ様の話も載っている。馬と娘が恋をする不思議で少し恐いお話だ。他にも、座敷童子や雪女もあるらしい。表紙をめくると、古い白黒写真が何枚か載っている。どれも雪深い遠野の風景や独特の曲がり屋と言われる家屋。人々が大事にしてきた家神様や素朴で少し不気味な土地神様のオシラ様、白黒モノトール写真がさらに恐さをかもし出している。山も雪も深い。冬は閉ざされた地域だった。ばあちゃんやんが語る昔話にいろいろの薪がパチツとはぜる。白い障子にばあちゃんの影がゆらりと揺れた。北風が唸り声をあげる。閉じた板戸のすき間から白い粉雪が吹き込み、土間にうっすら積もって夜が更けていく。

はさまっていた落ち葉を目の前にかざして大きく息をした。ほのかに秋のにおいがする。と急に大きなガラス窓がぐらりと揺れた。『えっ、

地震？』びつくりして辺りを見回すが周りの人は変りなく本を読んでいる。するともう一度、ぐらり、ガラス窓は揺れた。はっと気付くと、頭上に大きな木々がおおいかぶさるように広がっていた。ここはいつたいたいな。辺りをキョロキョロ見回して、どうやら山の中らしいことが分かった。えっ、何でこんな所にいるのかしら。木々の向こうにちらりと黄色い灯りが見えた。日が落ちて辺りはもう夜になりかけている。私は黄色い灯りの方へ歩き出した。近づくとそれはちようちんだと分かった。どうやら神社でお祭りがあるらしい。境内には大人も子供達もいて、にぎやかに出店も開いている。ただ、そこにいる人達は皆、なぜかお面をつけている。白狐だの狸だの。他にも、鹿、馬、キジ、ウサギ、何だか動物のお面ばかりだ。セーラームーンもガンダムもない。ぼんやりつつ立っている、ふいに後ろから肩を叩かれた。驚いて振り向くと、般若のお面が睨んでいる。思わずのけぞり、二、三歩後ずさる。険しい目を吊り上げ眉間にしわを寄せている。大きくひきつった口からは、鋭い牙が上下二本ずつ突き出ている。今にも喰いつきそうなそのお面に、ちようちんの灯りが、凸凹の細かい影を付け、いっそう恐ろしく見えた。

「あんだ、よそ者かね。」

「ええ、はい、あの：何だか突然ここに来てしまっ

まて：。」
どう説明していいのか困ってしまい、しどろもどろになった。神社の社の中から、シャンシャン

と巫女が舞う神楽鈴が聞こえて来た。

「いいよ。わかった。おいウサギ、この人と一緒にいてやれ、先ずはお面を選んでつけてな。」
すると、ウサギのお面の子が、ぴよんと跳ねこつちへやって来た。

「好きなを選んでいいんだよ。」

お面屋の前で言う。

「いらっしやい、どれでもどうぞ。」

お面屋さんのおじさんは、イノシシを着けている。

「これがいいよ。」

とウサギが指を差す、それはなんと、龍のお面だった。緑の顔に燃えるような赤い目、りっぱな角も二本はえている。

「これは、ちょっと恐いかな。」

「そっか、じゃ、こっちは？」

今度は、真白な雪女のお面を指差す。とてもきれいだけど、やっぱり表情がないのが却って恐い。

「んん、何ていうか：。」

「じゃあ、これだ。」

「これって山姥？」

ウサギは私とお面をチラリチラリと見て、

「お面の意味ないか。」

と言った。むっ、笑えない。

「これがかわいいぞ。」

それは、河童だった。きよとんとしているのがかわい。

「うん、これがいい。」

私もとても気に入った。着けてみると、すごく

軽い。和紙で作られている。今じゃ滅多にない高級品だ。着けるとしつくり馴染んで違和感がない。

「でも、お金持ってないの。」

「そう言う」と

「お金なら、俺が出してやるよ。」

近くにいた狐が、ふさふさのしつぽを振りながら、ぴよんぴよんと林の方へ駆けて行った。戻って来た時には、緑の葉っぱを何枚か手にしている。そして

「コンッ。」

とひと鳴きする。葉っぱはたちまち小判になった。

「はりやりやあ、まるでお伽噺だね。」

私が目をぱちくりしている、ウサギと狐はケタケタと笑った。

「行こう、もうすぐお神楽が始まる。」

ウサギに手を引っぱられて神社へ行くと、もう人が集まっていた。横笛が清く涼しい響きを聞かせる、ちようちんの火が消され、かがり火が二つ焚かれた。薪がパチパチとはぜて、火の粉が夜空に上がっていく。そして、白いお面の巫女が神楽鈴を持って舞った。さらに、小太鼓が打ち出し、鬼のお面の二人が出て来た。三味線も加わり、次第に激しく舞い上げる。そこへ馬と娘が現れた。二人は見つめ合いやさしく舞う。しかし二人の間に割って入って来た者がいた。娘の父親だった。怒りに満ちた激しい舞い息を飲んで見入ってしまう。ギラリと、どこからか刀を持ち出して来た。刀を振り回わし、社

の舞台がせまいくらいに飛び回る。怒りは頂点に達し、ギラギラした悪情を辺りに放つ。ついに、馬の首に刀を向けた。馬のお面が床にポタリと落ちた。私は、はっとして思わず一歩しりぞいた。これは、オシラ様の物語だ。ゾツとして背すじに冷たい汗が流れた。娘は馬にすがりついて泣きじゃくる。しばらくして娘は馬の首を抱いて宙に浮き上がり、社殿の奥へと消えた。左右から蚕のお面を着けた者がざざつと数人現われ、静かに舞い閉じた。あまりの迫力の舞台に心を持って行かれ、しばらく動けなかった。辺りが、ざわざわして、人が散り散りに去り、ようやく我に返った。

「とても上手に舞ったな。」

ウサギが言う。

「うん、あまりにも上手すぎて、今でも足ががくがくするよ。」

アハハハ……。とウサギは笑った。でも、うそではない本当にひびきが震えていた。

「おなかすいた。何か食べたい。」

ウサギは私を引っぱり出店を回った。まんじゅうを並べる店の前に立ち、

「これがいい。」

と、はずんだ声で言った。それは、朴の葉の上に並んだあんころもちだった。私とウサギ一つずつ買う。まさか馬糞では……と、思っただけ、恐る恐る口にすると、大丈夫、普通にお茶を飲んで、甘くておいしい。狸が竹筒にお茶を持って来てくれた。もしや、狸のおしっこじゃ……いや、おいしいほうじ茶だった。

「よそ者はそろそろ帰った方がいい。時の道がもうすぐ消えてしまう。」

「帰り道はこっちだ。」

ウサギに付いて行く。まだ帰りたくなくて

「また来れるといいな。」

と独り言のように呟いた。いつの間にか傍らにいた鹿が

「黙すると消える。語れば残る。」

と言った。

「そうなのね、誰かに話してみようっと。今日のこと。」

鳥居の下でウサギも鹿も立ち止まった。

「また来るね。バイバイ。」

私が手を振ると二人も小さく手を振った。

細い山道を一人でゆっくり下る。しばらくして振り返ってみたが、もう、鳥居も黄色い灯りもウサギの姿も見えず、しんとした暗い森ばかりが広がっていた。

「そろそろ閉館です。」

背中では女性の声があった。はっとすると目の前のガラス窓がぐらりと揺れた。小田原城の天守閣が暗い夜空に白くそびえ立ち、箱根の山々の稜線が黒く広がっていた。時計は九時五分前を指している。

「ありやま、もうこんな時間なのね。」

私は慌ててテラス席を立ち、バッグを持つ。バッグは数冊の本が入っていてずしりと重い。手元の「遠野物語」の本もそこに入れた。

ビルの外へ出ると賑やかな街がいつものようであった。帰り道を自転車で走りながら、今日

のことは孫に話そうと思った。

「落ち葉は旅をするんだ。ずっと高い木の上から見ていたからね、あそこの公園にも行ってみたい。遠い海にも行ってみたいって。」

「冒険の旅に出たくて風を待っていたんだよ。」

詩人の孫が言っていた。本にはさまっていた落ち葉は、私を不思議な旅に連れて行ってくれたのかも知れない。耳元をスワツと秋風が通りぬけた。

名前の変わる物語

ヨム

「いつも静かな図書館が、今日はちがった。……」

驚いた。たくさんの人が散り散りになって、本を読んでいる。時たま交流も起きているみたいだ。いつもはこんな事ないはずなのに……と思いつつ、ふと横を見るとポスターが貼ってあった。「交流会、なるほど……」

私としたことが、イベントが開かれる日に来てしまったのか。本は一人で読みたい派だからなるべくイベントは避けてきた。今回はうっかり見逃してしまっていたのだろう。まあ、良い。幸いにもこの図書館はとにかく広いのだ。探しければ人がいないスペースが必ず見つかるはずだ。

「ここだけか」

思った以上に人が集まっており、本当に端っこの、私も初めて来たようなスペースしか空いていなかった。けれど、これは新しい本と出会えるチャンスだ。早速本棚を漁り始める。適当な本を一つ、手に取りパラパラとページを捲る。「これは少し……」

私を手にとった本は薄く、短編かのように思えたが、いざページを開いてみると小さな文字がびっしりと並べられていた。いつもだったら気になって読むかもしれないが、今日は疲れているので一旦本を戻そうとした時、別の方向から伸びてきた手を邪魔してしまった。

「あ、ごめんなさい」

「いえいえ、こちらこそ」

ベタな恋愛展開も私が相手では始まらないだろう。ただ、せつかくこんな図書館の端っこで出会ったのだから、これだけで終わるのもなんだか味気ない。何か話してみることにした。

「イベント、ですかねえ」

「そうですねえ。あ、持ちますよ。それ」

持ちますよ。は、優しさから来た言葉だと分かっているけれど、話を一瞬で終わらせられたことに悲しみを感じる。自分があまりうまく話を展開できないのは知っているし、あまり広がらなさそうな話を振ってしまったとは思った。でも、流石にそうですねえで済ませられると少し傷つく。

そんなことを悶々と考えてしまっている内に、ふと右腕が少し軽いことに気づいた。さっきまで持っていた本がない。あの人の方を見ると、その両手に大事そうにあの本が握られていた。

「あ、本……」

「私、持つって言いましたよ？ 大丈夫です。次、行きましょう」

次って何、と尋ねる間もなく私の前をスタスタと歩いていく。せめて名前だけでもと思い、言葉を発してみる。

「あのっお名前、なんて言うんですか」

「名前？」

急に立ち止まり、振り返るのでぶつかりそうになった。少し上を向いて、顔を見上げる。その人は虚空を見つめていた。

「名前……。そうだ、あなたがつけてくださいま

せんか？ 何でも大丈夫なので」

驚いた。つまり、本当の名前は無いのか、私には教えられるということ……。会ったばかりだし、これから友達になる予定もない。そんな相手に易々と教えられないか、と納得して名前について考え始める。

「……ゆっくり考えてもらって良いので」と言い、また私を置いていこうとする。後をつけながらホハバさんなんてどうだろうと考えた。せつかくならその人の特徴に合った名前にしたい。その人は、足が速い、というより歩幅が大きい。だから、ホハバ。安直すぎて嫌かな、でもこれ以上の情報を知らないし……。と伝えるのを迷っている内に、ホハバさんが足を止める。またぶつかりそうになったことに少し腹が立って、半ば睨みつけるように顔を上げた。

「着きましたよ、ほら」

その人は私の目をじっと見つめながらそう言った。ホハバさんが横にサツと移動したそこには、何の変哲もない本棚があった。

「急ぐ必要はありません、私はここで待っていますから」

先ほどの表情とは違い、微笑みながらそこに立っているホハバさん。なんだか不気味に感じられたけれど、悪意はないのがはつきりと伝わってくる。きつと、笑うのが下手なのだ。視線を本棚の方へと戻す。何をすればいいのか聞いていないけれど、なんとなくわかる。本を選ぶんだ。いつものようにタイトルをサツと確認する。興味を惹くようなものがあればそれを手に

して、中身を確認……

「よし、それですね。じゃあ持ちますから」
する間もなく、本はホハバさんの腕へと吸い込まれていく。ちよつと待ってすら言えず、スタスタ歩いていくホハバさんを追うしかなかった。

「ホハバさん、はどうですか」

名前の案を伝えてみる。早歩きしながら歩くホハバさんが私の言葉に反応して足を止める様子はなかった。ただ、ぼそつとこう言った。

「ホハバ……。まあ、良いでしょう。あなたがそう思うのなら」

そうこうしている間に、また本棚の前に着く。ホハバさんはもう説明は必要ないだろうと言わんばかりの視線を私に向け、また横へサツと捌けた。私も特段反応することはなく、本を見繕い始める。それにしても、ホハバさんはもしかするとすごい人なのかもしれない。さつきからいくつもの本棚の間を移動したかわからないのに、その中でも私の好みの本がたくさんある本棚へと導いてくれていく気がする。そう思うと、少しホハバさんのことを知りたくなった。

「ねえホハバさん。あなたは……」

「おしやべりですか。良いですが、本は決まったのですか？」

「え？ いや、まだですけど」

「なら、先に決めちゃいましょう。歩いているときに話してください」

……うまく躲された気がする。あまり自分のことを話したくないのだろうか。だとしても、

もう少しゆっくりに歩いてくれないものか。おしやべりの返事を聞く間もなく次の本棚へと着いてしまうのに。悶々としながら一冊の本を手にする。またすぐにホハバさんの腕へと収納される。「さっ、次ですわね」

ホハバさんはさつきより若干ゆっくりに歩いき出した。

それからいくつもの本棚をホハバさんと巡った。ある時はホハバさんの趣味？なのか生物図鑑ばかりの本棚だったり、ある時は失敗したのか、私にはあまりピンとこない本が揃った本棚だったり、かと思えば全ての本が読みたくなったりする魅力的な本棚だったり。何度か話をしようとして試みたけれど、私の話ばかりでホハバさんのお話を聞くことは叶わなかった。それでも、巡っていくうちにホハバさんの顔が明るくなってきていく気がした。ある本棚の前、いつものように横に掛ける前にホハバさんはこう言った。「ここが最後の本棚です。貴重ですから、じっくり選んでくださいわね」

ホハバさんが横へ掛ける。これが最後。最後だから、次にどうなるかはわからない。けれど、私はそれを考えるより、目の前の本棚のことで頭がいっぱいだった。ホハバさんは「貴重」だと言った。どんな本があるのだろうか。ワクワクしながら本のタイトルを確認する。

「あれ？　これって……」

全て、読んだことのある本だった。それも、記憶も朧げな幼い頃に。とても懐かしい気持ちの

まま、ある一冊を手取る。

「……」

「ホハバさん……？」

ホハバさんは私の選んだ本をじいっと見つめるだけだった。取ろうとしない。ただ、ふ、と少し笑って私にこう言った。

「その本はあなたにあげますよ。どうか、大切に」

「あげるってどういう……」

「これまであなたが選んでくれた本は必ず読みます。たくさんなので、時間がかかっちゃいますが」

「え、いやだからここ図書館じゃ」

「では、良い読書ライフを」

気がつくとき、ホハバさんは居なくなってしまう。外はまだ明るく、交流会も続いている。図書館だ。本棚の裏からお兄さんが顔を出した。

「あれ？　お姉さん、この辺にいた人知らない？　交流会の参加者で、端っこに行くとか言ってたんだけど……」

あれは夢だったのかと思った。けれど、私の前にはあの本が存在している。カウンターで聞いてみたら、そんな本は図書館には所蔵していないと言われた。だから、家まで持って帰ってきた。ページを捲る。ふと、一人の登場人物に目を奪われた。名前はヨミイ。歩幅が大きくて、よく図書館の端っこにいる……。

「まさか……。いや、まさかね」

よく確認してみると長編だったその本を読むのに一ヶ月も費やしてしまった。あの交流会も

終わってしまった夏の終わりが近づいていた。

「私はいつでも、あなた方を待っています。図書館の端っこで」

ホハバはその両手にたくさんの本を抱えながら微笑んだ。今度はどんな物語に出会えるのかな。

忘れ物

森野くるみ

あれ、何だかちがう。いつもの静かな図書館が、今日はちがっていた。何だろう、空気がほよほよとして、どこか揺らめいて奇妙だ。ふと辺りを見回す。机に向かう高校生達が勉強する背中、本を読む人もいる。普段と変りない図書館の様子だ。けど何だかいつもとちがう。この感覚、ずっと前にどこかで感じたことがあったような気がする。あれはどこだったろう。少し考えてみたが思い出せない。まっついいか。気にせず本棚へ行き、並ぶ本の背表紙に目を向けた。気になる題名の本を一冊手に取り空いている席に座った。本を開いてゆっくり読み始める。五、六行読むと少し落ち着いて来た。ここはJR小田原駅に隣接するミナカ図書館。バイトがない日は、よくここへ来る。電車を降りて五分で来れる。その便利さが足を運ぶ理由だ。駅周辺のざわざわした空気がここへ来ると一瞬にして静かになるのもいいところだ。さっきの奇妙な空気の違和感はない。気のせいだったのだろうか。すぐにいつもと変らず本に集中しはじめた。一時間経った時だった。すわっと誰かが後ろを通り過ぎた。他にも利用する人は多勢いる。なので後ろの通路を歩き来る人もいてあたり前なのだが、でも何か違っていた。何気なくそっと振り向

いてみたが歩いて行く人はいない。近くの本棚の方へ入って行ったのだろうか。気になるが、また本に目を落とし読み出した。しばらくすると、また、すわっと後ろを誰かが通って行く。ん？思わず振り向く、誰もいない。やっぱり変だ。辺りに目を向け、そつと様子をさぐってみる。すると、さっきのほよほよとした空気が漂っていることに気がついた。んんっ、この感じ、確かに以前どこかで……。頭の中の思い出の引き出しを開けて考えてみた。そうか、あの頃だ。

僕はまだのん気な中学生で、もうすぐやって来る受験など気にもかけていなかった。さりとて部活動にも熱中できない中途半端な毎日を送っていた。授業が終わり、まっすぐ家に帰っても暇なので図書館へ寄り手当たり次第、本を読んでいた。その頃、図書館は、小田原城址公園の中にある古い建物だった。昭和の匂いのする古い佇まいは、いい雰囲気をかもしだして、僕は、いかにも勉強している錯覚をしてしまう。そのせいか集中して本を読むようになり、よく通っていた。一カ月程したある日、ほよほよとした不思議な空気に包まれた気がして顔を上げた。しかし図書館は、普段と変わらず静かで、本を読んでいる人も特に何てことのない風景だ。でも何かがおかしい。ところが、いくら辺りを見回しても何一ついつもと変りばえすることはなかった。その後、時々そんな感覚にあったが、本に夢中

で時間が経つのも忘れていたせいか、少し疲れたのかなと思いきりこんでいた。そして、それ以外の間にか慣れてしまった。でも、時にはおかしい事も起きた。風もないのにページの角がパリりとめくれる。何だ何だ？と思ったがそれだけですんでしまいその事もいつしか気にしなくなつた。ある日は、本棚の通路を背表紙を目で追いつつゆっくり歩いていった。ふと誰かが僕を見ているような気がした、本と棚の隙間から。思わず僕もせまい隙間から向こう側の通路を見たが誰もいなかった。ある時本を探して次の通路へ向かった、すると、あちらの棚の角を誰かがさつと走り去った。ほんの一瞬だった。すぐ後をその通路へ行ってみれば、やはり誰もいなかった。気のせいかも知れない、いや、きつと気のせいだ、ということにした。なぜなら、そんなことがあつても、気になつて本が読めないという事もなく、帰りに事故に遭う訳でもなかったから。要するに別に何事もなかったのだった。気にしない、そう言い聞かせることにした。

夏休みに入って間もない頃、入口でぼつたり同級生の女子に会った。

「おう、平田じゃん、お前よくここへ来るの。」
「夏休みになってから時々来るの。山下君は。」
「オレも。」

何となく合せた。クラスが別なので、あまり話したことはなかったが、なんとなく流れで隣りの席へ座った。少し気になったけど、わざ

とゆつくり落ち着いて本をめくる。平田は、英語の教科書を開いて勉強を始めた。へえ、まじめにやるんだ。と感心した。翌日、僕も英語と数学のプリントを持って行った。でも、入り口で彼女に会うことはなく、がっかりして図書館に入った。すると、昨日の席に彼女がいた。

「もう来てたんだ。」

「うん、少し前にね。」

ちよつと嬉しくなつて隣りの席に座る。今日も彼女は英語をやっていた。しばらくすると、机の上の辞書をめくつて何だかじたばたして落ち着きがない、気になつてチラリと彼女を見ると、

「あのさ、この単語、調べたいんだけど、載ってないの。」

と辞書をよこした。それを受け取り調べる。彼女の言うように、教科書の単語は載っていない。「んっ。」

変だ、そんなはずはない。ごく簡単な単語だ。僕はペーシをパラパラめくり、そして表紙を見た。

「なあ、平田。」

「ねっ、載ってないでしょ。」

「だってさあ、これって。」

クスクス笑ってしまった。

「何？どうしたの？」

「これ、ドイツ語の辞書だよ。」

「えっ、うそ。」

彼女はキョトンとした顔をした。

「ちちゃんと英語の辞書持って来いよ。」
ボタンと立ち上がった彼女は、辞書コーナーへすつとんで行った。そして戻って来ると、にっこり笑つて、

「英語の辞書あった。」

と言つた。その後、彼女はスムーズに勉強に打ち込んだようだったが、僕は、ずっと笑いをこらえなければいけなかった。図書館なのでケラケラ笑う訳にはいかない、静かにしなくちやいけない、笑いをこらえなければならぬとなると、いつまでもおかしさが続いてしまう。なかなかつらいものだった。そしてどうやら彼女のことが好きになつてしまった。毎日、約束したようにこの図書館に来て隣り合せて座り、勉強した。夏休の終りには、席が二つ空いていないこともあつて別々に離れて座ることもあつたが、それも悪くはなかった。互いにチラチラ目が合う、どちらかが手でドアを差して『休憩しない？』と合図をし、外へ出て少しおしゃべりしたりして、充分楽しかった。

二期が近づいたある日の帰り道で、僕は思いきつて話した。

「あのさ。」

「何。」

「ちよつと座つて話さない。」

「いいよ。」

植え込みの縁石に並んで腰かけた。改まるとうまく言えなくなる。言い出せずに黙つて地面を見ていると、

「何、どうしたの。」
と彼女は僕の顔を覗き込んだ。

「あのさあ。」

そう言っで一息吸う、そして思いきって言った。

「あの図書館さあ、お前、何か思わない？」

「何かって何？」

「何て言うかさあ、つまり、その：図書館に何かいるみたいだって、お前思わない？」

「へっ？何かいたの？何？」

「何かって：うまく説明できない。」

「何か見たの。」

「いや、何も見てない。だからうまく説明できないんだ。けど何かさ、時々変なんだ。時々だけどき。」

「どう変なの。」

「空気がちがう、ほよほよしたり：。」

「ほよほよ。」

目をパチクリさせる。

「うん、それとか：風もないのに本のページがパラパラっとめくれたり：。」

「パラパラ。」

「本棚の隙間から誰かがじつとこつちを見てたり：。」

「じつと。」

今まで感じたことを話した。しばらく間が空いて、
「図書館の幽霊？」

そう言っで彼女は両腕をさすった。

「私は、何も感じたことないけど：。」

「昔、あの辺りに寺子屋みたいなのがあったさ、

士族の子供達が集まって勉強してたってこと
ないかな。」

「その子達の霊がいるの？あそこに。」

「わかんないけど：。」

「何か悪い事があった？例えば：転んだり、
おさいふを失くしたり：とか。」

「いや、特に何も無いんだけど。」

「そうなんだ。」

僕達はしばらくの間、言葉がなくて黙ってしまっ
た。

「ってことはさ、あれじゃない？」

「あれ？」

「ほんの虫。」

「ほんの虫？」

僕はちよっとの間考え込んだ。そして彼女が
言っている虫が、本の虫かと気がついた。

「その本の虫って：たぶん違う虫だと思うけ
ど：。」

と言っで吹き出してしまった。

「本当の昆虫のことじゃなくてさ：。」

「何だ、そうなの？見えないくらいの小つちや
い虫で、すごくすばしっこく動き回る虫で、
古い本の紙とかかじって生きてるやつでさあ
：。」

「うん、そういうのもいるにはいるけど：。」

たまらず僕はケラケラ笑い転げてしまった。
彼女のこういうヘンテコトンチンカンがたまら
なく楽しい。

「じゃあ、やっぱり霊の仕業かも。」

と言って黙り込んだ。そして一つ息をして、「けど、何も悪い事が起きてないのなら、きつとあれかも。」

「あれって?。」

「座敷童子的な霊。」

「そっか、座敷童子かあ。」

「うん、いたずら好きなんだよ、祟るとかじゃなくてき、ちよっかい出したいだけなのかも。」

「そっか、図書館童子かあ。」

僕は納得した。そういうのがいそうな雰囲気がある図書館だった。思いきって話してすつきりした。

そして夏休みはあつという間に終わったが、彼女とはその後も、冬休みや春休みになると図書館で並んで勉強した。そして各々の高校へ進学した。それから五年後、古い図書館はできたばかりのこのビルに引越したのだった。

今日のこの空気の違和感は、あの時とそっくり同じだった。なつかしいほよほよ感の奇妙な空気。何だかあの頃がよみがえってきた。忘れ物を思い出した気分だ。ふいに誰かの声がした。それは耳にはなく直接頭の中に響いてきた。

『もつと別の話をしたらよかったのに。』

「誰? 図書館童子? お前もここへ引越してたの?」

辺りをキョロキョロ見回したけど姿は見えない。本のページの角がパラリとめくれた。子供の声だった。

「別の話?」

『そう、別の話しだよ。ね、そうでしょ、じゃあ、忘れ物取りに行かなきゃね。』

そうなんだ、あれからずっとどこかすみの方へ置いて、忘れたふりをしていてる自分がいる。何だか図書館童子に心を見すかされているようにのが笑いをしてしまった。

ポン、といきなり後ろから肩を叩かれた。驚いて振り返る。

「元氣?」

そこに立っていたのは平田だった。あの頃と少しも変らない笑顔だ。

「おう、平田。」

突然の再会にびっくりしてつい大きな声で立ち上がった。

「しっ。」

くちびるに人差し指をあてる。そっか、ここは図書館だ。僕はたまらず、ドアを指差した。バッグも本もそのまま置きっぱで、彼女の手を引いて外に出た。

「久しぶり、何、お前、よくここに来るの。」

「んん、最近ね。でも二週間に一度とか。」

そうやって人差し指を立てた。とたんに抱えていた本をボタボタと落とした。ヘンテコトンチンカンな、相変らずのようだ。思わずクスリと笑ってしまう、しゃがんで一緒に本を拾う。

ほよほよした空気が、ふっとくすぐったいようなふわっとした空気に変わったように思えた。

図書館のハローワーク

松本一裕

「あれ、本になにかはさまっている」と気がついていた。

図書館のリサイクル・コーナーでふと目にとまった本を書棚から取り出してページをめくったらポストイットがはさまっていた。と言うより、ページのどまん中に貼りつけてあった。長方形の小さな黄色い紙片に細かな文字で黒々となにか書きつけてある。

「ア・フレンド・イン・ニード

イズ

ア・フレンド・イン・デイド」

日本語じゃない、どうも英語っぽい。英語のつもりで読んでみると、ピンときた。つい最近勉強した文法の参考書の例文にあったやつだ。まさかのときの友は真の友、だったわけ。なんだ、名言の押し売りかよ、とちよつと興味が失せた。

でもよく見ると紙片のすみっこに、極細の字でこんどは赤々と、メールアドレスが記されている。「まさかのときは連絡しろということか。まったく大きなお世話だ」と思い、千明は床に落ちていたゴミをひろう感覚で、紙片をはがしてズボンの右ポケットにねじ込んだ。それから、書棚から取り出した本の目次にいそいで目を移し

た。これは当たり前だ、これで行ける、と千明は直観して、思わず微笑んだ。

夏休みもあと一週間しか残っていない。千明はパニック状態だった。夏休みの課題が手つかずのままなのだ。「研究テーマを自ら設定し、8000字で論じよ」これが課題だ。高校生になつたばかりなのに、これはキツすぎる、せっかくの夏休みなのに、とずっと心の負担になっていた。二年生になれば本格的に大学受験を考へなくてはならない、おもいつきり遊べるのはこの夏休みだけなのだ。ふてくされていたら、あつというまに夏季休暇の終わりがついそこに迫っていた。

ふてくされながらも千明は心のどこかで課題のテーマを考えていたらしい。いよいよ腹をくくって課題と向き合ったとき、ぱつと浮かんだのが、米。つまりほぼ毎日口にしてるご飯についての疑問だった。なぜ日本人は米を食べるのか、という問いだった。いつからか分からないけれど、いつのまにかそのことが気になっていたらしい。

残りほぼ一週間だ。あわてて近くの市立図書館に駆けつけ、米に関する本を探した。キーワードで検索して当たりをつけて、幾冊か実際に手に取って目次を眺めてみたが、どうもピンとこない。

もうあきらめるか、と自動販売機で缶コーヒを買ってラウンジでひと息ついていた。その

ときふと、壁際に本棚があるのに気がついた。リサイクル・コーナーで、「自由にお持ち帰り下さい」と張り紙がしてある。へえー、と思つて眺めたら、『イモと日本人』という奇妙なタイトルがふと目にとまった。まさに奇跡の出会いであつた。

タイトルを目にしたとたん、ひらめいた。べつに米でなくてもよかつたのだ、と。いそいで目次を眺めてみて、確信した。日本人が食べていたのは米だけではなかつた、イモを食べてもいたのだ。イネの文化に対抗するように、異質な文化が存在したというところらしい。ラウンジの椅子に座つて少し拾い読みしているうちに、そのようなことが次第に明らかになつてきたのであつた。

一週間は無我夢中のままにすぎた。持ち帰つた本を読み切つて、山芋や里芋を食べる人たちのことを考えつづけた。なぜ米なのかという問いに替わつて、なぜイモなのかという問いが千明の頭と心を占めた。その問いが熱を持って渦巻く中で、課題研究レポートはあつというまに仕上がった。

二学期が始まつて数週間後、提出したレポートが返つてきた。丁寧に読んでくれたクラス担任の大絶賛のコメントが記されていた。とても嬉しかった。どこか遊びきれなかつた悔しさが残る夏休みだったけど、これでなにか大切なものを取り戻せた気がした。

その翌日は祭日で学校は休み。千明は二階の自室でヘッドホンをつけて、最近沼にはまり始めたメタル・バンドを大音響で聴いていた。

ふと肩を叩かれた気がして、振り向くと母親が立っている。しきりに両手を頭上で上下させているので、ヘッドホンを外した。

「さっきから呼んでいるのよ。まったく返事もしないんだから。でもまあいいか。階段の昇り降りには、ダイエツト効果あるからね」と、こちらは文句を言われるのかと一瞬構えたが、母親は勝手に自分で納得している。「ナイス対応、あなたのそういうところが好きです」思わずお世辞を言いそうになつたけど、千明は心の中だけにとどめておいた。

「あんたの夏用のズボン、洗濯前にポケットをチェックしたら、こんな紙つ切れが出てきたけど、捨てちゃつていいのかしら。大切なものだけといけないからね」

なんだよ、そんなのどうでもいいのに、ちょうど間奏のギター・ソロで盛り上がるころなのに、とつい口に出かかった。あぶなかつた。千明は気持ちを押して、「ありがとう」としおらしく、紙切れを受け取つた。

「エキササイズ、エキササイズ」と連呼しながら明るく階段を降りていく母親にあきれながら、しわくちやの紙切れをゴミ箱に捨てようとして、ハツとした。あの黄色のポストイットだった。「本にはさんであつた紙片だ。あの本のおか

げで、ぼくの夏は救われた。即ゴミ箱行きは仁義にもとる」とつぶやき、千明はしわになったのをのぼした。そして今は机の上の本箱に立て掛けてある本を取り出し、紙片をもとに戻そうとした。

それにしても、ポストイットの名言、ドンピシヤだったな、と千明は本を手にして思った。まさかのときに現れてくれたのが、まさにこの本だった。

千明は後に引けない気がしてきた。左手に握られた紙片の隅のメールアドレスがなにかをうったえるように迫ってくる。ウイキペディアで調べてみたが、著者はとつくに亡くなっている。千明は決意して、この本との出会いの感謝のメッセージをそのメールアドレスに送った。

翌日メールに返事が届いた。返信タイトルに「兄の…図書館ハローワークによるこそ」と記されている。

あの本が役に立ててよかった、そして図書館ハローワークの存在を認知してもらってこちらこそ感謝である、ついては何かのご縁だから、君にもこの運動に参加していただきたい、いかがだろうか。

おおよそ以上のようなことが書かれていて、差出人は「図書館ハローワーク発起人」となっている。いつたいどういうことだ。そもそも図書館ハローワークってなんだよ、と千明がとまどっている、すぐにまたメールが届いた。

「追伸。どうだろう、詳しく説明したいので、是非会っていただきたい。いつも午後三時には図書館のラウンジにいるので、都合のいい時に声を掛けてもらいたい。全頭白髪の老人が左端のテーブルで本を読んでいたら、それが私です」

「それが私です」って、なに様のつもりだよ。どこか押しつけがましいのが、ちよつとカチンときた。亡くなったおじいちゃんのもの言いを思い出してしまった。でも「図書館ハローワーク」が気になる。千明は一晩考えたが、結局、つる好奇心に逆らえず、「発起人」に会うことにした。

会うといっても不安だ、まず人物を確認する必要がある。千明は翌日、学校帰りに、図書館に立ち寄ってラウンジをのぞいてみた。

左端のテーブルにたしかに白髪の老人がいた。赤シャツに黒ズボン、白髪とマツチしてかなり目立っている。でも、居住まいを正して本を読んでいる姿には、まともな感じのオーラがただよっている。千明は入り口近くでしばらく観察してから、そのままラウンジを出た。そして図書館の隅の本棚に囲まれた椅子に腰をおろして、「どうしようか」と考えた。かなり迷ったが、ここで退散はありえない、とラウンジに戻った。

「すみません」と声をかけた。

「やあ、千明くんか」老人はこちらが名のる前に、

本を読んでいた顔をそのままこちらに向けた。

「あの…」と言ひよどんでいると、「会いにきてくれてありがとう。ここでは話ができないからまず外に出よう」老人は席を立ててきつさと図書館の出口に向かった。

老人は意外に速い足どり、あつというまに近くのコーヒーショップに入っていた。カウタ―でやつと追いつくと、老人はすでにアイスコーヒーを二個トレイにのせて、奥の席を指していた。千明は老人の一方的な態度に圧倒され、うながされるままに老人の向かいに座った。

「実は、きみのことはもうすでに知っていたんだ。リサイクル・コーナーであの本を手にする姿をいつもの席から見ていたんだよ」と老人は突然切り出した。「本を手にくれるだけで嬉しかったのだが、私のメッセ―ジに反応してくれて、心から感謝だ。そして、メールをくれたのは、きみが最初だ。おめでとう」

「なにがおめでどうだ！」千明は、心の中で一方的な話に抵抗した。

「申しおくれたが、私は川瀬です。世間には、図書館ハローワーク発起人ということ知られている。といっても、知っているのは今のところ、きみ一人だけなのだ」

え、どうゆうこと、と思ったが、「で、その図書館ハローワークというのは、なんですか？」とここは冷静に、千明はアイスコーヒーをひと

口すすりながら反応した。

「ちょっと長くなるが、こういうことだ」老人は少し身をのりだし、話し始めた。「図書館へは、たまに散歩途中の休息がてらに、ラウンジでぼんやりと外の景色を眺めるのに立ち寄るぐらいだったんだ。それが、一年ほど前のことだったな。外の景色に飽きたので、ふと思いつて、館内の本棚のあいだをうろつきながら、並んでいる本を眺めていたんだ。すると、声というわけじゃないのだけど、なにかしきりに私にうったえかけているのに、気づいたんだ。なんだろう、とじつと本棚を見つめたら、一冊の本に目が吸いよせられた」老人はそのときの状況を反芻するかのようになり、椅子に背をもたせて天井を見つめ、間をおいた。

「本の背表紙がこちらにせまってくる。そこでタイトルを確かめたら、なんだか興味が湧いてきて、目次を眺めながら、ラウンジに持参して少し読んだよ。そのまま借りずにその本を元の棚に戻したのだが、例のうったえる感じは消えてしまっていた。ただ：」と老人は言いよんだ。

「ただ、不思議なんだが、それ以後、おなじことばかり返し起こったのだよ。不気味だったな。なんだろうと思つて、一週間ほど毎日、図書館中をうろつきまわってみたよ。するとあちこちで感じるんだな。例のうったえるような感じだ。歩きまわるのに疲れてラウンジで休んじたら、リサイクル棚からおなじよううった

えが伝わってきた。ついに自分の頭がおかしくなったのかな、と心配になったよ。私ももうかなりのじじいだから、ボケの妄想でも始まったのかなとも考えたさ」老人はひと呼吸おいて、アイスコーヒーを飲んだ。

「ほんとに不思議な現象ですわね、なんなのですかね」と千明は、頭とかボケとかには触れずに、言葉をはさんだ。

老人が語ったところによると、そのうち、本を手にとるだけで、読まなくても、本からのうったえが消えることに気づいたそう。それからまた一週間ほど、老人はラウンジのリサイクル・コーナーも含め、図書館のすみずみまで歩きまわって、うったえを発している本を見つけては、ことごとく手にとり本棚に戻して、一冊一冊に落ち着きを回復させてやったそう。

「これはどういうことだ、とちよつと真剣に考えたよ。だって、自分がおかしくなったなんて、認めたくないからね。それで結局こう納得した。つまりだな、まともな本ならどれもなにかの役に立ちたいと思っっているということだ」

「本に意志なんてあるのかな？」と、つい疑問が声に出してしまった。

「たしかにね。でも、分かるやつには分かるし、分からないやつには分からない」

「なにかみもふたもない話ですわね」千明は正直な感想をのべた。

「こちらにそれを感じ取る準備があるかないかなんだ。きみがメールで伝えてくれた、例の本との出会いを思い出してもらいたい。あのとききみは本を探すのを諦めて、ラウンジでぼんやりリサイクルの本を眺めただけかもしれない。でもどこかで求めていたから、あの本のタイトルが目にとまった。つまり、きみは、だれかのなにかの役に立ちたいという本のうったえに反応した、そういうことじゃないかい。無意識でもいい、こちらになんらかの求める気持ちがあれば、本の意志がこちらに伝わる、そういうことじゃないかな」

たしかにそうとは言えるけど…でも理屈っぽいな、と思いつながら、「で、結局、図書館ハロークというのなんですか？」と、千明は気になって点に話をもどした。

老人があらためて身をのりだし、語ってくれたのは、このようなことであった。

図書館の本のうったえは、なにかの形で世の中の役に立ちたくて、ハロークに日参した自分の経験に重なる。だれか自分を採用してくれる人がいないか期待したが、七十歳をこえたじじいでは、だれも手をあげてくれなかった。結局、毎日散歩の生活に戻ったが、自分が世の役に立ちたいという気持ちは変わってはいなかった。そのタイミングでの、本たちのうったえとの出会いであった。自分はずからハロークに出向いたが、本たちは他人に運ばれて図書館にたどり着いた。ただ、どちらも世のだれかの

役に立ちたいという思いはおなじだ。だから自分にとって、図書館は、それにラウンジのリサイクル・コーナーも、本のハローワーク現場と思えた。

「私には本たちの気持ちがよくわかった。だから、ほぼ毎日、図書館をうろついて、うったえかけてくる本を手にとって本棚にもどしている。うったえがおさまった本を見つめていると、私もなにか役目をはたした気がして嬉しくなるんだ。でも、困ったことになったんだ：」

面倒なのはいやだな、と思いつながら千明が耳を傾けた老人の話は、次のようなことだった。本を手にとってあげれば、そのうったえはひとまずおさまる。だけど、しばらく時期をおくと、またおなじ本からうったえが伝わってくる。それが結構な重労働になってきた。楽しく充実も味わえるのだが、体力的にきつい。なので、だれか一緒に本たちのうったえに反応してくれる仲間がいればいいのだが、と思った。

仲間が必要なのは、その理由だけではない。自分にうったえが伝わってくると言っても、ほぼおなじ本に限られている。もし別の人ならば、別の本のうったえに反応できるかもしれない、と気づいた。本たちのうったえの存在を知ってしまった以上、自分に伝わらないからといって、それを無視することはできない。無視されることの悲しみを少しは味わったことのある自分としては、それは有りえない。

ある程度自分とおなじ本のうったえを感じと

れて、別の本たちのうったえにも反応できる仲間がほしい。そのような仲間がいれば、自分の仕事も楽になり、自分には反応できない本たちをも救うことになる。そこで、図書館内の本だと失礼になるので、自分にとってこれとは思えるリサイクルの本を見つけては、例の紙っ切れをばさんでおいた。それが「図書館ハローワーク」の誕生だった。

「どうだろう、図書館ハローワークの仲間になつてもらえないだろうか」説明を終えた老人は、身をのりだして千明にうったえてきた。

即答はさげたいと思つたのだが、老人の勢いと真剣さに負けて、千明は「図書館ハローワーク」に加わることを約束してしまった。自分になにかの役に立つことができ、という興奮めいたものが、心の奥でとおししてくれてもいた。

それから千明は、学校帰りには必ず図書館に立ち寄った。老人と手分けして図書館中を歩きまわり、本たちのうったえに答える日々が続いた。

あれ以来、老人とはほぼ毎日のように顔を合わせている。ただ、老人はむだな話は一切せず、その日の段取りだけを伝えるだけだし、作業が終われば、「今日もありがとね」の一言だけで、解散となる。最初に出会ったときのあの饒舌がウソのように思えた。でも千明は楽しかった。放課後に図書館に寄り、老人と一緒に小一時間本棚のあいだを歩きまわって、本たちとの出会いを重ねる、この日々のリズムが心地よかつ

た。そしてなによりも、本たちのうったえに反応できる自分自身が嬉しかった。これまで無縁と信じていた本からのうったえに応えている自分が、誇らしくもあつた。

あつという間に秋がすぎ、木枯らしが顔につめたく吹きつける季節になった。千明はその日も図書館に立ち寄った。ただ、いつものようにラウンジに老人の姿が見あたらない。しばらく待ったけど老人が現れない。しかたなく、一人でいつものように図書館の本棚のあいだをめぐる。老人の不在を不思議に思いながら帰宅すると、PCに本人からメールが届いていた。最初のメール以来のことだ。

メールには、その日に行けなかったことのお詫びと、急に具合が悪くなり救急車を呼んだこと、そして今後どうなるか分からないので、図書館ハローワークはしばらく休みにすることなどが書かれていた。事態がはつきりしたら、また連絡するとのことであつた。

老人のことが心配で心に余裕がなかったし、一人ではやる気も起こらなかつたので、千明は老人の指示に従い、図書館の活動はひとまず休止とした。しかし、老人からはその後まったく連絡がない。メールしても返事がないし、老人の自宅も知らないし、入院先も分からない。まったくお手上げ状態で、千明は待つほかなかつた。

ついに新年に入ってしまったある日、老人の

アドレスからのメールが届いた。「川瀬の娘です」という紹介のあと、老人が昨年末急に亡くなったと書かれていた。老人は亡くなる前に、「図書館ハローワークの仲間になつてもらつて心から感謝している」、「短い付き合いだったけど、私にとつてきみは真の友人であつた」と千明に伝えてもらいたい、そのように娘さんに依頼していたそうだ。

悲しかった。千明は、すべての始まりであつたあの紙つ切れを取り出して眺めた。翌日、夕暮れどきの図書館に千明の姿があつた。もくもくと本棚のあいだをめぐりながら、みんなに老人の死を伝えていた。

親を自由に選べる世界

むーたん

いつも静かな図書館が、今日はちがった。

図書館に入るなり

「ここは親を選べる部屋です。」
と放送された。

今までの人生を振り返って

どんな親を選びたいですか？

ここに自由に書き出して下さい。

外見は好きなアイドルを貼り付けても、OK
です。

少し質問しましょう。

あなたの友達に自慢できる親を選びましたか？

俳優さんなら誰に似てますか？

どの国ですか？

宇宙の星ですか？

机が天井にある星でも良いですよ。

笑顔であなたを抱きしめてくれますか？

仲良しの両親が、

あなたを歓迎してくれますか？

貴方が一番可愛いと言ってくれますか？

どんなスタイルの両親ですか？

両親の実家はあなたを受け入れてくれますか？
あなたが虐められてたらあなたを庇う親ですか？
貴方に可愛い服、素敵な服を買ってくれますか？
あなたの恋愛を喜んでくれますか？
ここでは自由に親を選べます。
さあ、続きを書いて楽しんで下さい。

何でもやり直せる

むーちゃん

いつも静かな図書館が、今日はちがった。

今日の図書館は

あの時こうしとけば良かったをやり直せる部屋
になっていた。

皆さんは何を思い浮かべますか？

例えば

待ち伏せしてくれた好きな人にびっくりして無
視しちゃって、

結局付き合う事はなかった事を後悔してるなら
どういふ行動をしたかったですか？

えっ!! 待っててくれたの嬉しい!!

と満面の笑みで好きな人に近寄りますか？

相手も満面の笑みですか？

その後付き合う事になり、

毎年お祭りやイベントに行く時は

家までお迎え、または迎えに行きますか？

迎えに来た時、行った時は

相手の家族が温かく迎えてくれますか？

好きな人が中学から高校に成長した姿であな

たの家に現れた時、

あなたの家族はその人に

「大きくなつたなあ、」「かっこよくなつたなあ、」と声をかけてますか？

高校が別々になつても

通学のアナタが電車のホームにいと、

貴方を見える場所にその好きな人がいて、

互いに目を合わせてから
通学してますか？

互いに社会人になつて

互いを助け合う存在になり、

周りから祝福され一緒に生きている現在になつた。

この部屋は後悔を自由にやり直せて、
望む世界にワープする部屋です。

全員を選ぶわ、私

ムー子

いつも静かな図書館が、今日はちがった。

学校帰りに図書館に来るなり

私はいつも座る場所へ行こうとすると、

憧れの男の子達が笑顔で立っていて

「待ってたよ。君に選ばれる為に生きている。

今日は誰を選んでくれるかな？

できれば僕を選んで欲しいけど。」

と全員が一齐に言った。

今まで憧れの男の子に選ばれる為に

雑誌を読んだり、セミナーに出ていたが、

私が選ぶ立場？!

というか、ここは図書館だったはず：

ねっ、早く！誰を選ぶの？

と全員の男の子から言われた。

えー!!みんな憧れの人だもん、

選べない。

全員って言ったらどうなるかな？

言ってみようか!

と心の中で決めた。

「あのお：えつとお：」

僕？

僕かな？

俺？

男の子達は目を光らせて待っている。

私：全員を選ぶ!

やったあ!!と男の子達全員が喜んで

誰かが選ばれる方が嫌だと言う。

俺ら全員で君のそばにいる。

それぞれが得意な事で君を守るから。

周りを見渡すと
私達以外は静かに勉強していて
私達には他の人は気付いてないようだった。
不思議だけど、まあいっか。
今日は勉強はそこそこにして
私を待ってた男の子達と共に
図書館を出た。

即、思ってもないような素晴らしい人生になる

ムーちゃん

あれ、本になにかはさまっている。
中学2年生のちーちゃんは学校がつまらない。
小学校の頃より太ってしまうし、
好きな男の子に告白しても振られてしまい、
地域のお祭りにカップルで出かけるのがトレン
ドなのに、それが叶わないだけでなく、
好きな男の子が同じクラスの女子と付き合いは
じめ、二人のラブラブを見せつけられる事にも
なった。

さらには、
ちよつとお洒落をすれば目立つクラスの子達に
睨まれる。
目立つ子達と同じ服を着れない不自由さだけ
でなく、
お洒落や服にお金をかけてくれない家庭。
だから制服があつて良かった。
家で着る服は母親のお古の一枚のスカート。

それも毎日同じスカートで、
上は制服のブラウスを家でも着ていた。
お金はあつたが、お金を使えるのは父親だけ。
高いお酒、ゴルフ用品だらけの玄関、ゴルフで
着る高級服。

小学校までは楽しかった学校。
運動会大好き、と言っても楽しかった事ばかり
じゃない。

小学校の遠足のバスの隣の子をキープする為に
いつもちーちゃんの邪魔ばかりする貴子と行動
を共にしてた。

貴子はちーちゃんよりも勉強も運動も劣り、
さらにちーちゃんよりもモテない。
ちーちゃんが嫉妬してるから、とにかくちーち
やんがやりたい事を邪魔する。

塾の時間を知っていなが、
わざと帰り道に長話をする。

それを遮ろうとするちーちゃんに、
「だって話終わってないもん」と話を終えず、
「今日は塾行けないね！」と言い放った貴子に
対して、

「遅れて行けるし」としか言えないちーちゃん。
違う日も

おばあちゃんが待ってる事を知った貴子は、ま
た長話をする。
他にもちーちゃんに嫉妬する同級生もいた。
でもそれをひっくり返すくらい、
ちーちゃんを心の奥を理解してくれる人が多
かった小学校。

そして今、つまらない中学校に行くのは、家よりもまだ安全だから。ちーちゃんは部員仲間と上手いかなかった部活を、中学二年生の夏に辞めた。部活を辞めてからのちーちゃんの放課後の行き先は図書室。嫌いな学校も家よりはマシで、図書室なら嫌いな同級生も来ない。特に読みたい本もないけど、本棚に並ぶ本を手にとってページをパラパラとしていた。その時、本に何かはさまっていた：メモだった。

「このメモを見た人は！即、思ってもないような素晴らしい人生になる」。と書いてあった。思ってもないような：好きな男の子と付き合えるのかな？少し微笑むちーちゃん。でもすぐに、そんな事ないよね！と思う。メモをそのまま本の中に戻し、一人で下校した。中学校から家まで徒歩二十分。秋らしい優しい夕暮れを感じながら歩いていると、見覚えのある男の子が立っていた。

隣の中学校の高木君だった。

実はちーちゃんは高木君と小学校の同級生で、一緒にプールに行った事があった。それは高木君から誘った事だった。

でもちーちゃんは彼を意識した事はなかった。

二人は中学校が別になり顔を合わす事がなかったが、

高木君は隣の中学校で格好良いと評判の男子になっていった。

ほんとだ！高木君、本当に素敵な男の子になっている、やばっ!!とちーちゃんは思っていた。

でも、中学生特有の照れから話しかけられずうつぶいって通り過ぎた。

すると高木君が、待って！とちーちゃんを呼び止めた。

ちーちゃんは照れから笑顔になれない。でも心では、高木君が待っててくれた事が嬉しくて仕方がない。

でも、何？と冷たく高木君に言った。

ちーちゃん、俺さ、

ずーっとちーちゃんの事が忘れられなくて、どーして良いのか分からなくて、でも俺の本棚にメモがあつたんだよ。

今、告白しなきゃダメだ！って。

だから突然ごめん、びっくりだよな！でも、好きなんだよ。

卒業してから忘れた事なんかなかった。
ちーちゃん、俺と付き合って欲しい。
ちーちゃんがあいつを好きな事は知ってるよ。

「えっ!!なんで?!」
驚くちーちゃん。

高木君は怖ず臆せず
ちーちゃんを好きだから、
ちーちゃんの好きな人を探ってた。
でもそんな事をして意味がない。
ちーちゃんが誰を好きでも俺にはどーでも良いんだ。

俺には誰も真似できない愛し方がある。
それをちーちゃんが受け入れてくれるか
くないのか、それだけ。
いきなり来たからさ、答えは一週間後に欲しい。
また帰り道待ってる。

と言って、高木君は去ろうとしたが、
ちーちゃんは
高木君、一週間もつたいない。

今日から付き合おうよ。
家まで送って。と言った。

高木君は喜んで三メートルくらい飛び上がった
ように見えた。

高木君とちーちゃんが一緒に帰り始めたら、
下校のいつもの道に露天商が並んでいて、カッ
プルからトレンドの
お祭りの日になっていた。

制服だったちーちゃんは浴衣を着ていて、

高木君も男浴衣を着ていた。

そして二人で歩行者天国を歩いていると、互いの
中学校の友達に冷やかされて、
一瞬でちーちゃんの夢が叶った。

そして離れ離れだった学校だったのに、
高木君と同じクラスになっていた。

高木君は一番モテるのに、
ちーちゃんしか目に入らない。
そして高木君の彼女という事で、
今までちーちゃんをバカにした目立つ女子達
から憧れられるちーちゃんになっていた。

家に帰ったら、
ちーちゃんのお父さんが

「一緒にちーちゃんのお服を買いに行こう、今ま
でお父さんばかりごめん。これからはちーちゃん
が可愛いと思える服を揃えよう」と言った。

ちーちゃんは、何だこれは?と不思議で仕方が
ない。

ちーちゃんにイジメをした子には、
ちーちゃんにやってたイジメの数千倍な事が本
人に返って来てた。

そして、高木君だけでなく他のイケメン男子か
らも告白されるちーちゃん。

高木君と仲良しの男子達がちーちゃんに告白
して、

高木君が忙しい時にちーちゃんを護るイケメン
男子として活躍している。

即、思ってもないような素晴らしい人生になるのは、本当だった。

捨ててなかった

むーちゃん

「いつも静かな図書館が、今日はちがった。」

図書館に入るなり

あったー!!良かった!!と喜ぶ声、

捨てちゃいけない物だったのよ、良かった!!と泣き声が聞こえる。

図書室が

「捨てた事を後悔した物が、全てある部屋」と書いてあった。

私は喧嘩した友達が写ってる写真をビリビリに破って捨てた後に、それを後悔した事を思い出した。その友達は転校する事をみんなに内緒にしていた。

私と喧嘩した後すぐ、その友達は転校したので、私は内心良かったと思っていた。

数か月後、私に手紙が来た。

喧嘩別れのまま転校したあの子からだった。なぜ喧嘩をふっかけたのか：

仲が良いまま離れると辛いから。

これだけの理由だったと書いてあった。

今でもあなたの幸せを願っていると最後にあった。私はその時わあーわあー泣いた。

そうか!この部屋にその写真があるはずだ!

探し方は

捨てた時の自分を思い出します。

その自分に、今の自分が話しかけます。

ダメ!捨てないで!

本当は捨てたくないはず!

捨てようとすする物を抱きしめてみて。

絶対に離さない!と思つて。

すると:

捨てた物がある棚がひかります。

そこに静かに歩いて行って下さい。

ほら!!

あったあー!!

良かったあ!!

わあーんわあーんと大声で泣いて良いから。

そしてこの部屋に來ると

物を捨てそうな自分に

「捨てるのを待って!」と声かける私になれる。

コトバを守る人

ゆずき

「あれ……なんか、今日の図書館ヘンな感じがするな……ザワザワしているような」

「うん……。やっぱり、J君もコツチの人だ」

「コツチって？」と聞きながら隣のN君を見ると、今まで見たことのない厳しい顔をしている。

ここは、O駅と直結した商業ビルの六階に、半年前にオープンしたばかりの図書館。館内は白色を基調とした明るくシンプルなデザインで、いつもは難解な問題も、ここでならクリアに頭が働き、解けそうな雰囲気なのだが……、今日は違う。誰も話していないのに、なんだか、ザワザワしている。こんな感じは初めてだ。

今日は夏休みの初日、宿題を早々に片付けるため、去年、中学に入学して同じクラスになったN君とここで待ち合わせをしていたのだが……。

「やっぱり今日は、宿題どころではないな」と、彼は図書館を見渡しながら言った。

僕も、N君と同じようにじっと空間を見つめていると、半透明な灰色のモヤモヤしたものが薄っすらと見え始めた。

「えっ、N君、あれっ……？」

「ああ、見えているよ」と、彼は言いながら受付に向かつて歩いていく。いつも笑顔で迎えてくれる受付のSさんも、落ち着かない様子でN君と何か話している。

僕は茫然と立ち尽くしながらじっと図書館の空間を見ていると、段々とモヤモヤの正体ははつきりと見えてきた。それは平仮名や漢字、文字が本から抜け出そうと形をねじり、そして糸を引くように次の文字を引き連れ、文章が煙のように上って行こうとしているのだ。それは図書館中の本棚から立ち上っている。これは一体なに……？ 見てはいけないモノを見ている気がして、ゾワゾワと鳥肌が立つ。

だけど、ほとんどの人は気が付いていないのか、いつものように過ごしている。僕は夢を見ているのか……、現実なのか……、心臓がバクバクするだけで何も考えられない。

「J君、大丈夫？ 行こう」

僕はどこへ行くかも聞かずに、何度も図書館の方を振り返りながら、N君に続いてエスカレーターを下って行く。階が下るにつれ、空気が正常になっていく感じがして、深呼吸をした。三階には人気の店舗が入っていて、来た時と同じように、多くの買い物客で賑わっている。そんな光景を見ると、さっきの図書館の光景は僕の錯覚だ、と思い始めた。

「まずは、隣町のジイちゃんの家へ行く、今日一日つき合ってもらえるかな？」

N君はいつも通りの優しい顔に、でもその奥にある、凜とした眼差しを僕に向けながら言った。

駅前のバス停でバスを待つ間、周囲に誰もいないのを確かめてから、僕は恐る恐る聞いた。

「さつき、文字が本から抜け出そうとしているように見えたんだけど？」

「うん。」

「でも、気付いていない人もいて……、なんか僕の錯覚だよな？」

「見える人と、見えない人がいるんだ。だから見えたJ君にも協力してもらいたいんだ」

「えっ、何が起きているの？」

「言葉が騒いでいる……というか、怒っていると見える」

言葉が騒いでいるって……？ と聞き返そうとした時バスが到着し、僕らは乗り込んだ。後部座席にN君と並んで座ったけど、バスの中でこの話をしてはいけない気がして、僕は外の景色をぼんやり見ながら、図書館の不思議な光景とN君の言ったことを繰り返し考えていた。

僕は測候所前というバス停で降りた。N君は「ここからすぐだよ」と僕に声をかけると、測候所の脇の道を無言で歩いていく。道の両側には木々が生い茂り、木漏れ日がゆらゆらと僕らを導いているようだ。O駅から二十分位の場所なのに、どこか遠いところへ来たように感じる。脇道の行き止まりに建つN君のお祖父さんの家は、コンクリート打ちっ放しのカッコイイ家だった。

玄関のインターフォンを押すと、カチャッと自動で鍵が開く音がした。

「お邪魔します」と言いながらリビングに入ると、N君のお父さんとお母さんが出迎えてくれた。僕らは小学校も一緒だったから、何度か会ったことがある。

「J君も見えたんだね」とN君と同じ眼差しを持つお父さんが言った。

「はい……でも何が何だか……」

「そうだよな。そろそろジイちゃんが戻ってくる時間だし、J君も一緒に行こう」

N君のお母さんは「お昼、用意しておくからね」と言っけキッチンへ、僕ら三人はリビングの窓から庭に出た。

周囲の高い木は測候所のものだろうか、どこまでが庭なのかわからない。芝生の小道の両側には、見たことが無い青い花や、不思議な紫色をした草が茂っている。

背の高いススキのような植物群を抜けると、ツタが絡まるレンガ造りの建物が忽然と現れた。平屋の倉庫のようだが、木々にすっぽりと囲まれていて大きさは分らない。建物の正面に唯一ある重たそうな鉄の扉を、N君のお父さんがゆっくりと開けた。僕は何だか違う世界の入り口のような気がして足が止まった。

N君がいつもの笑顔で「大丈夫だよ」と言っただけで、中へ入って行く。僕は怖さよりも好奇心の方が勝ってN君に続いた。ガシヤンと扉が閉まると、飛行機に乗った時のように耳がモアつとした。

ひんやりとした空気と、平衡感覚が狂うほどの真っ暗な闇とが全身を包み、この世界にひとり取り残されたような恐怖を感じた。

ブオンという鈍い音が聞こえ、しだいに足元の床が明るくなっていく。ぼんやりと。

僕のすぐ隣にN君がいるのが分かって、すごく安心した。と、同時に、あたたかなオレンジ色になった床に、六角形の回廊が地下に向かって何層も何層も続いているのが見えた。オレンジ色の光は、その回廊の壁に取り付けられている電球の色だった。

回廊の中央は、宇宙への入り口のような真っ黒な空洞がぽっかりと、覗き込んだら最後どこまでも落ちていきそうなの……、無限という言葉が頭に浮かんだ。よく見ると回廊の壁は本棚になっている。

「バベルの図書館……？」と、思わずつぶやいた。その声は不可思議な振動をして、自分の声だとは思えなかった。

「ああ、この場所の正式な名前は誰も知らないけれど、僕らも便宜上、バベルの図書館と呼んでいるよ」

N君のお父さんはサラリと、だけど、やっぱり変な声で言った。

六角形の回廊をゆっくりと上がって来る人が見えてきた。ポロシャツにチノパン、いたって普通の服装だけど、卓球のボールを半分にしたような、奇妙な眼鏡をかけている。

「ジイちゃん、どんな感じ？」

N君の声も変だ。

「前回と同じくらいかな」

「交代するよ」と、N君のお父さんは奇妙な眼鏡を受け取り、回廊をゆっくりと下って行った。

僕ら三人はリビングに戻り、N君のお母さんが作ってくれたおにぎりを食べることにしたのだが、当然のことながら、僕はおにぎりどころでは無い。

ボルヘスの小説の「バベルの図書館」が実在している……？ 朝から聞きたいことが溜まっている。

N君は、おにぎりをモグモグしながら僕を紹介した。白髪交じりで、どこことなくベートル

エンに似ているN君のお祖父さんも、モグモグしながら

「驚いただろう、夢ではないのだよ」と。

「あの……何が起きていますのですか？ さっきの場所は？」

「あそこは代々、我が家が管理人をしている図書館なのだよ。全国にある図書館の総本山と言ったところかな。ただ、国立国会図書館とは違う。特殊な機能がある。」

コトバの乱れを教えてくれる、うん……知らせてくれる所なのだよ。

世の中に、誰かを傷つけるコトバ、魂の無いコトバがあふれると、最初にこのバベルの図書館からコトバが消えていこうとする、その情報は全国の図書館へ届き、君が今朝、目撃したようなことが起こる。

おそらく……はつきりと見える人は少ない、多くの人はいつもと雰囲気が違うな、と感じるくらいだろう。普段、コトバを大切にしている人は、今日、図書館で起こっていることに気付いていない」

「あの……これから、どうなるのですか？」

「コトバが無い世界を想像した事があるかな？ 何としても、コトバが消えるのを止めなくてはならない。」

そのためには、コトバについて語り合う。心に

響いた本を誰かに紹介する、朗読する。そして、自分が発するコトバに責任を持つ。こういったことが必要なのだよ」

「えっ……？」

「もしかして、魔法使いが現れて解決してくれると思ったかい？」

「いえ……」と否定しながらも、今日これまでに目にしたことを思えば、魔法使いのほうに合っている気もした……。

「まあ、朗読は呪文に近いかもしれないな。コトバに宿る力、言霊があるからね。」

目にみえるモノがすべてではない」

目にみえるモノがすべてではない……。このフレーズはこれまでも聞いたことがあったけど、今日ほど自分の中にストン、と入ったことはない。

「ジイちゃん、新館では閉館後に、スタッフの人達で朗読会をするって受付のSさんが言っていたよ。それに定期的に、読み聞かせや朗読会を開催する計画も立てるって。」

僕ら、これから、学校の図書室の様子を見に行こうと思う」

「ああ、皆に協力してもらってくれ。その後、旧館の様子も見に行ってくれないか」

「うん。今日は元々、旧館の自習室でJ君と宿題をする予定だったんだ」

N君のお母さんは、玄関で僕におにぎりと麦茶を渡しながら「頑張りましょうね」と言った。それは友達のお母さん、というより同志のような感じがした。

僕はバスを待つ間、トトロが出てきそうなバス停のベンチで、おにぎりを食べながら聞いた。「今日のようなこと、これまでもあったのかな？」

「昔から何度もあったみたいだ。僕がハッキリと見たのは、今日が二回目だけど」

「N君のお祖父さんとお父さんは、バベルの図書館で何をしているの？」

「それはまだ教えてもらえないんだ。でも、いつか管理人を引き継ぎたいと思っているんだ」

中学校の図書室には、読書クラブの二人と顧問のK先生がいた。ここは、空気がザワザワしているだけで、文字の姿は見えない。

「私が紹介するのは、万葉集から、大伴家持の叔母、大伴坂上郎女の

恋ひ恋ひて逢へる時だに　うるはしき　言尽してよ　長くと思はば

私なりに訳すと、恋しくて恋しくて、やっと逢えたのだから優しい言葉をかけてよ、二人の仲がずっと続くように、って感じかな」

「うーん、そんな面と向かって、優しい言葉をかけてなんて言えないなあー」。

恥ずかしいし、相手にひかれそう……」と、もう一人の子が笑いながら言った。

「確かに……」。

でも、遠距離恋愛してるお姉ちゃんが言ったんだけど、彼氏と過ごした時間や、頑張れって言われた言葉が、次に逢う時までのエネルギーになるって」

「あー、それはわかるかも。それと同じ感じなのかな」

そのやり取りを笑顔で聞いていたK先生は「おお、いいね。」

現代はたとえ遠く離れていても、スマホがあれば直ぐ連絡を取り合えるよね。この歌が詠まれた時代はどうだろう？ 当時の視点にたって読んでみる、ということも必要だね」

そう二人に言って、僕らの方にやって来た。

「先生、こんにちは」

「こんにちは。今日は二人だけだけど、明日の部会はみんな来ると思うよ。もともと朗読会の予定だからね」

「そうですか。ここは駅の新館と比べたら、随分落ち着いているようです。これから旧館に行ってみます」

「そうか。なんとか止めよう」

K先生もいつもの国語の先生の顔ではなく、やっぱり同志といった表情で言った。

僕らが図書室を出るとき、

「私が紹介したのは、河野裕子さんの

たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらって行つてはくれぬか

という歌です」

「なんだ、二人とも恋の歌を選んだのかい」

「もお、先生、そういうお年頃なんです」

三人の楽しそうな会話が、夏休みの静かな廊下に響いた。

旧館はO駅を挟んだ反対側、僕の家の方にあり子供の頃からよく来ていた。当初は建て替える予定だったが、有名な建築家が設計した建物で保存の要望が多く、耐震補強工事をして利用していくことになった。新館と比べたら暗い感じだけど、本棚は木製で温かみを感じる。現在は、貸し出し不可の書物の所蔵や、O市とゆかりのある作家の原稿とかも展示されている。そして、新しく自由に使える自習室が設けられたので、研究者や学生の利用が増えたようだ。

ここも今日は、いつもとは違う雰囲気だけど、文字が消えていこうとする光景は見えない。

「なんか……、学校の図書室とここは、ザワザワした感じだけけど？ N君には見えてるの？」

「ううん。たぶん、新館は開館したばかりでまだ朗読会とかしてないから、いちばんハッキリと見えたんだと思う。そのへんのこともまだ、ジイちゃんから教えてもらっていないからよく分からないけど。」

今日は宿題じゃなくて、本の朗読でいい？」

僕らは会話をしてもいい方の自習室に入り、いつものように、それぞれのリュックから本を取り出した。

そう、僕らが友達になったきっかけも本だった。

初めてN君に会ったのは小学校の図書室。クラスは違ったけど僕が図書室に行くたびに、彼はいつも一人で本を読んでいた。時々、話したこともあったけど、去年、中学に入学して同じクラスになってから、二人とも学校の図書以外にお気に入りの小説や、時には美術や天文学といった専門書など、何かしらの本を常に持ち歩いていることを知り、とても仲のいい友達になったのだ。

以前N君が、僕には理解できそうもない心理学や哲学の本を読んでいた時は驚いたけど、今朝から起きていることを思えば納得だ。きっと彼はバベルの図書館の管理人を引き継ぐために、あらゆる分野の本を読むという修行中なのだろう。それは義務ではなく、自ら望んで。

「J君の今日の本は？」

「鷺田清一の『まなぎしの記憶』というエッセイ
なんだけど、植田正治の写真も載っているんだ。

僕のお父さんはカメラマンだから、家にはいろ
いろな写真集がたくさんあって。その中に植田
の写真集があつて。初めて見た時、なんか不思
議だな……つて、夢の世界じゃないけど、日常
の風景のちよつと向こう……みたいに感じて、
記憶に残つてたんだ。

こないだ本屋に行つたら、平置きになつて本
の中に、植田の写真が表紙になつてこの本を
見つけて」

「そういう出会いがあるから、本屋さんとか図
書館つて楽しいよね」

「うん。」

この本は哲学的なエッセイで、書かれてあるこ
とを理解しようとする間、そのページに載つて
いる植田の写真を見ながら考える、なんか、そ
の時間もいいんだ。

この本の中から、

聴かれるほうからすれば、相手がじぶんに関心
があるのかどうかは、その聴き方ですぐにわか
るものである。だからこちらの聴き方しだいで、
愛されていると感じたり、じぶんのことなんか
このひとにとつてはどうでもいいのだと感じた
りもする。正確に、そして繊細に。だからこそ、
対話においてはしばしば、語るほうが先に傷つ

くのである。

僕は話が上手くできなくて、言葉を探している
時、友達の視線が怖い時があるんだ。

ある友達は、僕の言葉を待たずに喋りだしたり、
言いたいことはわかつたから、もういいよ、みた
いな視線を感じたり……。

だから、ここの部分を読んだ時、すごく共感し
たんだ」

「僕も、同じような視線を感じる事があるから、
わかるよ。」

もしかしたら、タイパ世代の僕らはジイちゃん
の世代と比べると、待つ、ということが苦手に
なっているのかもしれないね」

「ああ……、確かに。動画とか、倍速で見ちゃう
かも……」

「ハハハッ、あるね」

「でもN君は、いつも僕の言葉を待っていてく
れるから、とても話しやすいんだ」

「J君は、その時の自分の考えや気持ちを正し
く伝えようと、的確な言葉や表現を探している。
その場限りの、周りに合わせた言葉じゃないか
ら、僕は聴きたいんだ」

N君の落ち着いた喋り方は遺伝かもしれない
けど、僕が照れずに、そして疑うことなく、彼の
言葉をすんなりと受け入れられるのは、これ

まで彼が発してきた言葉には、知識や経験による裏付けがちゃんとあり、そして、その言葉に責任を持ってしているからだろう。

僕は今までも、これからも、の気持ちを込めて「ありがとう」と言った。

「その本読みたいな、貸してくれる？」

N君がそう言ってくれると、僕はいつも嬉しくなる。

「もちろん。N君の今日の本は？」

「茨木のり子の詩集。その中から……、今日これにしよう

賑々しきなかの

言葉が多すぎる

というより

言葉らしきものが多すぎる

というより

言葉と言えるほどのものが無い

この不毛 この荒野

賑々しきなかの亡国のきざし

さびしいなあ

うるさいなあ

顔ひんまがる

時として

たつぷり充電

すつきり放たれた日本語に逢着

身ぶるいしてよろこぶ我が反応を見れば

日々侵されはじめている

顔ひんまがる寂寥の

ゆえなしとはせず

アンテナは

絶えず受信したがっている

深い喜悦を与えてくれる言葉を

砂漠で一杯の水にありついたような

忘れはてていたものを

瞬時に思い出させてくれるような

「なんだか、今起きていることを言ってるみたいだ」

「うん。きつと、この人も見えていたんだよ」

N君は詩集を見つめながら、きつぱりと言った。

使われなくなつて辞書から消えていく言葉もあれば、その時代を表すような新しい言葉も生まれる。そういう変化が悪いんじゃない、言葉を使う僕たちに問題があるんだ。N君はあんなふうに言ってくれたけど、僕が発する言葉に、魂がちゃんとあるだろうか……。

僕らは、明日も会う約束をして自習室を出た。そして二人とも、今朝、新館に本を返却するのを忘れているのに気付いた。N君は「駅ビルの駐輪場に自転車を止めてあるから、J君の本も返却しておくよ」と言って、駅ビルに続く歩道橋の階段を上って行った。

もしかしたらN君は、閉館後の朗読会に参加するつもりなのかもしれないな、そう思って振り返ると、夕方の太陽の光に包まれて歩道橋を渡って行くN君の姿が見えた。

きつと、僕らはこれから先、違う学校へ行くことになっても、遠く離れた場所に住むことになっても、その時どきに相手が必要な言葉を贈り合うだろう、ずっと。だから、言葉が無い世界なんて考えられない。

僕は、夏休みが始まったワクワク感よりも、なにか大きな使命感に駆られて、いつもより速く歩いた。

本文中の参考図書・引用図書

角川書店編『万葉集』角川ソフィア文庫

俵万智『あなたと読む恋の歌百首』文藝春秋

鷲田清一『まなぎしの記憶』角川ソフィア文庫

茨木のり子『茨木のり子詩集』岩波文庫

図書館の戦士たち

葵郁

いつも静かな図書館が、今日はちがった。「だあああああああ！しっっこいんだよこいつ!!」

「五月蠅い悠。手を動かさせ」

「海の能力はチートだからいいよな楽で！」

「悠、休館日とはいえここは図書館なんだ。声のボリュウムには気を使え」

「そんなこと言ってる場合かお前！」

最初に言っておくが、ここは図書館である。

大人の男二人が大声を出しながら走っているも、ここは図書館である。

「おい美憂！あと何体だ!？」

悠さんにそう言われた私は、ぎつと目を滑らせる。ぎゃあぎゃあと言いつつもちゃんと仕事をしていたんだな、と関心しながら、手をメガホンのようにして叫び返した。

「あとぎつと二百体ですー!」

はあ!と、仲良く二人は同時に私の方を向いた。これでもかなり減った方なだけだな。

「ほんつとに楽じゃないぜ!この仕事はよ!」

悠さんが目の前の、黒い『文字』を手に持った鎌で切り裂く。

「まあ、今回は多いな」

「さっさと終わらすぞ、海!」

今二人は、『文字』と、戦っているのである。

今私が見ているものは、そうとしか形容できないものだ。最初に見た時も相当驚いたのだが、

今見てもなんとというか、ゾツとする。

休館日の図書館。目の前をウヨウヨと蠢く文字を、悠さんは鎌で、海さんは手に持った筆で次々と倒していく。

「あ、倒す、じゃないのか」

ぼそつと独り言が漏れてしまったが、二人はお仕事で精一杯のようで聞こえなかったらしい。本当に『文字』の数がどんどん減っていく。すごい。

でもこれは『文字』を倒したり殺したりしているわけではないらしい。

海さん曰く、これは人に害をなさないようにしているに過ぎない、と言うことだった。

ここにいる『文字』たちは、元々どこにいたのかわからないものばかりだ。この本の中から出てきたものもいれば、人の言葉の中や手紙の言葉だったりもするらしい。だがどれがそれなのかはあの二人にも判別することはできない。

たまたま、この図書館に集まってきてしまうだけなのだ。これは。

こうなってしまう理由はまだわかっていない。ある日突然図書館に集まり出した。見える人も数少ないが、これは人に取り付くといろいろ厄介なことになる、らしい。彼らのようにこれが見えるものたちがこうやって休館日に数を減らす。

この二人は、政府からこの『文字』の管理を任されている司書だ。通称『スクレテール』と呼ばれている。他の日は普通に司書としての仕事をしているが、この二人の本来の仕事はこの休館

日に行われる『文字』との戦いである。この世に『文字』が溢れている限り彼らの仕事は終わらない。

ま、私も数週間前に偶然、今と同じような状況に出くわしてなんとなくずるずるいるだけなんだけど。今の私が持っている情報はこんなものだ。

「おい海！これで最後だ！」

その声にはっとして顔を上げる。さすが、仕事が速い。

悠さんの言葉に反応した海さんが腰のポーチから白い本を取り出してその文字に投げつけた。本に当たった『文字』は、シュツ、という音を立ててその本に吸い込まれる。

その本が床に落ちる前に、悠さんがキャッチふう、と私も息を吐く。

「お、終わったああああ！」

「だから静かにしろって言ってんだろ」

そういう海さんもどこかホツとしたような雰囲気が見える。

「今日は多かったですもんね」

と声をかけると、悠さんも近づいてきた。手には白い本。

「美憂もありがとな！」

その本を悠さんから受け取った海さんは私たちからくるりと背を向ける。

「本部に連絡してくる。お疲れ、悠、美憂」

と、海さんはこの図書館の最深部、対外的には『司書室』と呼ばれているところへ行ってしまった。これから『スクレテール』の本部と通信

するのだろうか。

「お疲れ様でした、海さん！」

「おー、お疲れー」

二人でその背中を見送る。悠さんはまだ鎌を持っていたことに今更気づいたようで、気まずそうに懐から本を取り出す。その本はさつき海さんが『文字』に投げつけていたものとはちがって、青い表紙の薄い本だった。

「よっ、と」

その本を鎌にかぎすと、鎌は本のページに吸い込まれるように消えた。

「本当にすごいですよ、それ。今までの戦闘もそうでですけど、まだ私これが本当だって信じられませんもん」

そう言うと、悠さんは微笑んで私の頭を撫でた。中学生だからって舐め過ぎじゃないか、私のこと？

悠さんと二人並んで図書館を出ようと出口へ向かう。仕事は終わりだ。

「これ夢なんじゃないかって毎回思いますよ」

「残念ながら現実だな」

肩をすくめて悠さんは私を見た。

「俺だつてまさか、自分の描いた小説が鎌になると思わなかったしな」

「え!?あれって悠さんの小説なんですか!?!」

驚いてそういうと、悠さんは言っただけでなかつたか、と口を開く。

「俺もあいつも、元々は作家志望だったよ。まさか政府からの招集があつてこんなことするなんて考えてもみなかったさ」

あいつ、というのが海さんであることはすぐに察せられた。図書館の大きな自動ドアが開き、夕暮れに染まった空が見える。

「でもま、俺らにしかできないって言われちゃあね」

「そういういえば、悠さんって何歳ですか」

「え？」

数週間前にあつたばかりの私は、彼らについて知らないことの方が多し。ちよつとした雑談のつもりで口にした質問に、うーん、と数秒考へ込んだ悠さんは私の目を覗き込んでビシッと言った。

「内緒！」

「ええー」

上目遣いで睨むが、悠さんには全く効果が無い。絶対子供だと思つてる、この人。

「つていうか。悠さんはこの仕事が怖くないんですか？」

ずっと聞きたかつたことをずばつと切り込んで言つてみた。作家志望だつたつて言うんだとしたら、この状況ってなかなかきついな。いや、ないだろうか。そう感じた私の思いとは裏腹に、はは、と笑つて悠さんはさっきの本をヒラヒラと振る。鎌が吸い込まれた青い本。

「これを書いた時、俺はまだ中学生だつたんだ。美憂と同じ」

へえ、と曖昧な相槌を打つ。質問の答えになつていないけど、それ以前に内心は驚愕の嵐だ。中学生で？小説を？まあそういう人もいるんだらうが、いぎ目の前にいるとなるとその驚き

は段違いだ。

「まあきつかけはいろいろあって、成り行きで感じてテキストに。でもそっからのめりこんじまってなあ」

紫色に染まった空を仰ぎみて、悠さんはちょっと目を細める。

「ま、結局挫折して。もう二度とこんなことやってたまるかって一回は投げ出した」

「そう、ですか」

結構重い話をこんなに軽い口調で言われたら返し辛い。悠さんが笑顔だから尚更。

「中学生にはありがちだろ？自分の力を過信して調子に乗るってやつ。俺もその一人でさ。絶対に優勝するって信じてたコンクールでズタボロに落とされた」

おおっと。

「それで？どうしたんです？」

私は同情しようと思ってた自分を恥じた。悠さんのそういう姿はどこか吹っ切ったような雰囲気があった。自分から聞いたのだから感情移入する前に話を聞くべきだと感じたのだ。

「いやまあ、もう何も書かなかったし読まなかった。その優勝したやつがすごくてさあ。すっごい文章書くわけ。俺だってあんなの読まされたら否が応でも感動するよ」

「じゃあその人は今は作家ですか？」

知ってる人かな、と思ってそう言った私をみて、悠さんはふふんと鼻を鳴らした。

「いや。きつとそいつは今頃『スクレテール』の本部と通信してるよ」

「え、海さん!？」

びっくりし過ぎて叫んでしまった。人通りが少ない道で助かった、と思うと同時に今聞いた事実が信じられない。

「だからぶっちゃけ、怖いとかそう言う前に、政府からの要請とか限られた人にしかできないとか、全部ぶっ飛ばしてこんなの、やってられるかって思ったよ。あの海がどうして作家の道に進まなかったのかもわからなかったし。そんな奴と組まされてよくわからない仕事に駆り出されるなんて信じられるかって感じだった。もう二度と読まないって決めた本が目の前に高く積み上げられてる気分だったよ」

うわあ、それはやだなあ、とつぶやく。悠さんはおもむろに立ち止まり、また私の方をみた。「でもま、本当は好きなんだろうなあ、この仕事も、海も」

「この仕事は曲がりなりにも自分の好きな本や文章に触れられる。海のことだってそりゃ、多少は恨んだこともあったよ。なんで俺と同じ時代にいるんだって。でも喋ってみたら俺と同じ年のいい奴だし、アイツの書く作品が俺は好きだ。まあ、今は書いてねえみたいだけさ」

いつの間にか私より前に進んでいた悠さんが振り返った。

「だから、話は逸れちまったけど。俺はこの仕事が好きだよ、美憂」

そう言った悠さんに返す言葉が咄嗟には思いつかず、少しの間沈黙する。

「なんていうか」
「ん？と悠さんが私の言葉を促すように首を傾げる。」

「悠さんって、面白いですね」
「なんだそれ!?と叫んで悠さんはまた笑う。本当によく笑う人だ。」

「本書くのも好きなんですか？」
「だってこんなに面白いことないぜ？一つ一つはどうでもいい単語の寄せ集めなのにさ。繋ぎ合わせたらちゃんとした話になるんだ、『文字』って！」

キラキラした瞳でそう言う悠さんは、やっぱりまだ笑っていた。

「悠さんって、あの『文字』のこと敵としてみてないんですね」

「そう言うことになるな。美憂は怖いのか？」

「うーん、まあ」

「そうか」

パラパラと青いその本をめくって、悠さんは微笑んだ。

「俺にとって『文字』は今も昔も友達だからなあ。怖えとか感じたことはねえな」

「友達」

その言葉を繰り返してみる。ともだち。あれが？と驚く自分もいるが、悠さんを見て納得している自分もいる。

「そ。美憂も一回物語書いてみ？きつと驚くぜ。自分の中の文字がちゃんと繋がってくあの感覚、絶対に他じゃ味わえないね」

この時悠さんは、きつと自分が戦っている『文

字』ではなく、いつかの昔の記憶の『文字』を思い浮かべていたのだろう。いや、その二つは彼の中では同じなのかもしれない。どちらにせよ、その顔はどこまでも楽しそうだった。それをみた私もつられて笑う。

「わかりました」

「お！できたから見せろよな」

「いやですよ」

二人、暗闇に染まった道を歩く。もうそろそろ夜が来る。

明日も、彼らの仕事は続くのだ。きつと、この世界から文字がなくなるまで。

この世界から『文字』を愛するものが消えぬ限り。

ある夏、一枚の紙きれ。

美咲雅桜

あれ、本になにかはさまっている。いつもの様に、大学図書館でふらりと棚を見ながら歩いていたら、ある本の天から紙きれがほんの数センチ、頭をのぞかせていた。何だろう？とは思いつながら、僕の右手は迷いなく、その本を取り、該当の頁を開いていた。折り畳まれていた紙きれに書いてあった文字を讀んで「えっ」と、思わずもれた小さな声。きっと誰にも聞こえない僕の声が落ちた。夏休みの図書館。

名前なんてほとんど知られていない、いわゆるFラン大学。そんな学校に入って二回目の夏休み、僕は特にすることもなく大学図書館で日々時間を潰していた。夏の図書館は涼しくて静かだ。静かといっても、遠くから聞こえる部活のかげ声、誰かのちよつとした作業の音なんか心地いいBGMみたいだ。はじめは本当に時間を潰すために足を運んだ。せっかくの夏休み、部活もサークルにも入っていない。バイトざんまいにはしたくない。意味のない連絡を取り合う友達もいない。消去法で考えていたら、図書館に通うことになった。

読書は好きでも嫌いでもなかったからか、少しづつ身体にしみついていった。話題の本を選ぶより短編集とかエッセイの方が僕には読みやすかった。あとはジャケ買いの気分では読みやすかった。あとはジャケ買いの気分では読みやすかった。あとはジャケ買いの気分では読みやすかった。あとはジャケ買いの気分では読みやすかった。

った。知らない世界がそこにはあったからだ。そんな夏に出会った一枚の紙きれと本。本は新潮文庫の太宰治著作『パンドラの匣』という本だった。そでや見返しを見る。これは気がついた人やっていたいたクセで、過去にこの本を借りた人はいたのか貸出表をついチェックしてしまふ。分かるのはその時の返却年月日だけだ。個人情報になりうる事は無い。

その本が以前に貸し出された時の返却日は二年前の十二月だった。在校生……いや卒業していてもおかしくない、それに教員の可能性もある。そもそもその人が紙きれをはきんでいった、という証拠なんてない。できもしない推理はやめて僕は『パンドラの匣』を借りて読むことにした。例の紙きれを葉にしなから。

太宰治の作品をちゃんと読んだのは初めてだ。と思う。うまく言葉にできないが、面白かった。『パンドラの匣』は主人公の男の子が親友に宛てた手紙形式で物語が進んでいく。対してもう一編あった『正義と微笑』は日記形式であった。小説は主人公の目線を主にしていると思うが、この二作はそれがより近いと感じた。

それから小説以外のジャンルにもより手を出す様になった。エッセイ、俳句・短歌、事典、絵本にヤングアダルト、偶然残していた中学・高校の国語の教科書。文学の表現は様々だ。ふと、僕も何かを書いてみたいと思った。

ああ、僕にはあの紙きれがあった。思い立ってからの行動は早かった。原稿用紙、えんぴつ、下敷きを買って家に帰る。ドアを開

けた時に気づいた。えんぴつ削りがない。カッターでできないこともないが少々面倒だ。仕方がない、と思いつながらリビングに向かうと小さな飛行機が目に入った。まるで、この時を待っていたかのように、ほこりをかぶりながらも真っ黒な機体を僕に見せつけていた。

いつからあるのか分からないけれど、僕が物心ついた頃にはあった飛行機型のえんぴつ削り。子供の頃は意味もなく削っていた。削ることが目的だったのかもしれない。飛行機のお腹側で削る構造で、ただひたすらに削っていた。成長するにつれシャーペンやボールペンを使うようになり、今日までテレビの前の置物になっていた。置き物からえんぴつ削りへ、何年かぶりに手に取ると嬉しそうに、離陸するように、テレビ台から離れる。ごみ箱の上でえんぴつを入れる。回す。ガリツザリツジャリツジャリ。なつかしい感覚にほおがゆるむ。

書こうと思ったときから手書きでしか考えていなかった。太宰治をはじめとして、昔の作家は手書きで執筆していた。そういつた文豪たちにあこがれができて僕も手書きにした。形から入ろう、という考えがあったのは僕だけの秘密だ。それに、紙の上に自分の汚い字で書いた方が自身と向き合える気がしたからだ。

書き出しは決まっている。けれど、僕の世界はなんだろう？

感じたことを言葉にするなら、何があてはまるのだろうか？僕を駆り立てるものも分からないが、はじめよう。原稿用紙と図書館で見つけた

紙きれを広げる。もう一度、内容を確認する。「『あれ、本になにかはさまっている。』これを書き出しに使って、あなたの世界を、物語を、文字にして教えてください」

謎解きは図書館の中で

回遊魚

「あれ。何か挟まってる。」

昼下がりの大学図書館。午後の講義が無い日はサークルが始まる夕方まで図書館で本を読むのが習慣になっている。今日もいつもの席に座りバッグから取り出した読み掛けの本を開く。いつも通り午後のルーティンが始まる筈だったのだが、葉を挟めたページを開くと共に見覚えのない紙が挟まっている。

挟まっていたのは手でちぎったとみえる大学ノート切れ端。紙の上部中心に山の絵が円形に7つ並んでおり、その下には見覚えのある丸字でこう文字が続いている。

『追え！奴がふたたびやってきたぞ！』

『黒田さん』ネコ』

『雪野さん』ウサギ』

『牛山さん』？』

再びは漢字ではなく平仮名になっていて、強調するように文字の上に点が振ってある。

「これは……謎解きか？」

謎を解くと直接書かれています。訳ではないが、これが謎解きである事は想像がつく。

というのも、この文字を書いた人物は俺が所属するミステリ研究部の現部長で、彼女の最近のブームは自分で作った謎を部員に解かせる事。つまりこれは、部長からの挑戦状だ。

どのタイミングでこの紙を本に挟んだかは定かではないが、あの部長の事だから俺が見てない隙に挟む事など容易だろう。

本当は気になっていた本の続きをゆっくり読みたい所だが、こんな風に謎を挑まれ逃げるなドミステリ研究部の名が廃ると言うものだ。受けて立とうではないか。

部長の謎と向き合って数分。人物の名前、動物になっていく事がわかった。黒田さんは猫なので黒ネコ、雪野さんはウサギでユキウサギ。もしくはノウサギだろう。

続く牛山さんは牛……と思いたいところだが、これは恐らく引掛。牛の種類なら乳牛、水牛なんかはぱつと浮かぶが、前の文章ではどちらも苗字は動物の種類を表している。この法則を使うとウシ○○か、ヤマ○○の動物になる。

山ならヤマイヌかヤマアラシなんかもそうだが、牛なら何だろう……牛、うし、ウシ……。

山に続く動物が答えの場合複数浮かぶ。答えが絞れない様なものを問題にするだろうか。

紙と睨めっこしていると、左下に小さくヒントが書かれている事に気が付いた。ヒントの文字の下に、逆さまになった文字。紙を逆さまにして読んでみる。

「犬養さん』ワシ」

犬養さんという名前には見覚えがある。何故なら今読んでいる本に出てくる登場人物だからだ。犬養さんはワシなのでイヌワシ。となるとこれは苗字の頭文字の漢字に動物が付く問題だ。

そう考えると、最後の？に入るのはウシ○○○と
いう事になる。

牛、うし、ウシ。ふたたびやってきた誰かだ。
ふたたびやってきた奴を追え……。

ピンとくる男が一人居た。ふたたびやって来た男。
芋づる式に紙の一番上に描かれていた絵の謎
も解けていく。紙の真ん中に山が7つ。中に山
が七。これは作者の名前だ。そう、丁度今読ん
でいるこの本と同じ。そしてこの作者が書いた
本でふたたびやってきた男といえ……。

答えは自ずと見えてくる。
「？に入る動物はカエル。牛カエル……ウシガエル
だ。追えというのは、その本を探せって事か
な。」

俺は席を立ち小説コーナーに向かった。作者
名順に並んだ本棚のな行からカエルが惨劇を
繰り返すあの本を探す。

ふたたびは続編の方という意味だろう。この
ミステリーがヤバイ！最終選考に残り映画化も
されたあの作品の続編。あれだけ綺麗にまとま
った作品から続編を出すなど蛇足になりそう
なものなのに、単体としての面白さを持ちなが
ら続編として無理なく前作繋がり、またも鮮
やかな伏線回収。カエル男の残虐行為の数々と
そこに絡まる人間関係が続編でも尚健在でペ
ージを捲る手が止まらなかつた事を思い出す。
部長がわざわざ続編の方にした意味はわか
ないが、最近読み返していたのを見ていたから
だろうか。

本棚から答えの本を取り出し表紙を捲ると、
今度は二つ折りにされたコピー用紙が挟まって
いた。どうやら謎はまだ続くらしい。俺は紙だ
けを取り出し席に戻る。

今度のは白い紙の右端に黒く塗り潰された木
とそこから桜の花弁が舞うイラストが描かれて
いる。これは影絵だろうか。

続く問題文は『カエル↓ゴルフ↓○○○○↓
ヨーグルト』『すべての答えはしわがれ声の○
○○○が持っている』という二つの文。

先程は先輩の丸字だったがこれは文字が印刷
されている。カエルから始まる文は習字で書い
た様な字体。二文目のすべてのから始まる文は
角張った字体と使い分けてある。

フロントはどちらもパソコンなどに標準で入っ
てるやつだ。見覚えはあるが名前が出てこない。

丸はどちらも同じ赤い色をしており、同じ単
語が入る事を示していると考えれば良いだろう。
今回も左下にはヒントが書かれていて、同じ
様にヒントは逆さま文字になっていた。

目に入ってしまったのに見ないのもなんだか
ズルをしている様な気がする。今回は最初
からヒントを見てみる事にする。

ヒントは一言『殺人鬼↓6』とだけ。ヒントな
らもっと答えが導きやすいものにして欲しいも
のだ。

メモを睨みながら頭をフル回転させる。カエ
ルはこの本に掛けたものだろうが、ゴルフはな
んだらう。カエルからゴルフへ矢印が向いてい
るのだから、この二つに何か繋がりがあるはず。

殺人鬼が6という数字……文字数は5……画面数も違う。大事なのは繋がりが。何故カエルからゴルフに繋がったのか。ヒントの数字にばかり捉われず広い視野で考えてみよう。

一見繋がりが無さそうな単語と単語を繋げていくものといえ……真っ先に浮かぶのはしりとりだ。しりとりは最後の文字を次の単語の頭に持っていくから、カエルの次はルから始まる単語でなければならぬのでゴルフには繋がらない。

俺は小さな声で単語を繰り返してみる。

「カエル……ゴルフ……ヨーグルト……。」

ゴルフとヨーグルト……この二つは日本語も英語も同じ読み方をする。読み方……英語……ここまで来てある可能性が頭を過ぎる。

足早に英和辞典を取りに行きノートにそれぞれの単語の英語訳を書き出した。カエルが *From*、ゴルフは *golf*。日本語で書くと繋がらないが英語に訳すとしりとりになっている。

そして殺人鬼は *killer* で6文字。この数字は英語に訳した時の文字数だ。この事からヒントは文章に英語に直せという事だろう。ここまて来るとあとは簡単だ。ゴルフの最後の文字、Fから始まりヨーグルトの頭文字になるYで終わる単語を辞書で探すだけ。そして答えは他の単語と同じカタカナで4文字に収まる言葉。

「これだ。フェアリー……答えは妖精だ。」

カタカナでも平仮名でも4文字。そもそも単

語を全てカタカナにしたのは英語に訳せというヒントだったのかも知れない。

導き出された答えを赤い丸に当てはめると『しわがれ声の妖精』となる。しわがれ声の妖精が出てくる本……という事だろうか。妖精が出る様なファンタジーをここ最近読んだ記憶もなく、すぐには浮かばない。

さっきの問題では紙のデザインが作者名に繋がっていた。そして、俺が読んだ事のある本だ。中身を知っているからこそ本に辿りつけるようになった。この謎も同じはず。

本を導くのにわかりやすいヒントにするはずだから『しわがれ声の妖精』というのは、主人公無しその本を代表する様なキャラクターの可能性が高い。

そういえば、さっきはこのメモ用紙が作者名になっていた。その線で考えてみよう。

桜の木が一本立っている絵。さっきは山とわかる様に緑色塗られていたが、今回は真っ黒に塗りつぶされ影絵風になっている。わかるのは広葉樹のシルエットと、先の割れた花弁だけ。

「一本の木……桜の木、桜木……桜一。一木。そんな作者居たかな……。」

連想ゲームでこの絵から思い浮かぶ名前を過去に読んでた作者名と照らし合わせながら、棚の上に飾られていた一冊の本に目が留まる。

今月のおすすすめ本と書かれたポップが付いたその本は「字体で見る表現フォント」と書かれている。

字体……フォント……角張ったフォント……。

「あ。ゴシック体……。」

ふと思いついて声が出た。ド忘れしていたフォントの名前。他の文字は明朝体。変えてある角張った文字はゴシック体。

一本の木が表した作者名とも辻褄が合う。本のタイトルをそのまま字体で表していたのだ。

メディア化もされたあの作品。まるで妖精の様な長い金髪を持つ美少女と軍人一家の日本人少年が織りなすファンタジーミステリー小説だ。

俺は席を立ち現代小説コーナーからさ行の作者名を探す。一本の桜の木は作者名を表しており、黒一色の影絵風にされた絵は表紙の影絵を、文字が赤かったのはタイトルの字を表していたのだ。

「これだ。」

幸い誰にも借りられていなかったその本を手に取り表紙を開くと、今度は一枚のカードが挟まっていた。

今度は絵文字の足し算とQRコード。先程までとは違う形に見える。一先ず席に戻りQRコードを読み取ってみることにした。

バッグから取り出した携帯で読み込むと銀色の画面が現れる。

真ん中に「キーワード入力」と表示されており、その下に入力欄と決定ボタンがある。今回の謎は答えをここに入れるということだろう。

最後は自力で解けということか今までであった

ヒントはなかった。

カードに目をやり謎を確認する。問題文はスマートフォンでのデフォルトで入っている絵文字を足し算とイコールで繋いだもの。

四問目だけイコールの先にハテナが付いているので、キーワードはこの四問目の答えという事だろう。

1行目『魚の絵文字＋桜の花の絵文字』魚の絵文字

2行目『木の絵文字＋スイカの絵文字』きのこの絵文字

3行目『ハートの絵文字＋紅葉の絵文字』悲しい顔の絵文字

4行目『糸巻きの絵文字＋雪だるまの絵文字』？

声には出さず繰り返し読んでみる。この絵文字は何かの置き換えだろうか。取り出したノートに絵文字から連想されるものを書いてみた。

上から順に魚と桜の花。魚、さかな、サカナ。桜、さくら、サクラ。ここから導かれる答えも魚。文字に書いてみたり絵にしてみたり。自分の拙い画力でも、魚と桜の花の絵位ならそれとなく描ける。

同じ事を他の答えが出ている三問でも同じ事をしてみた。木の絵、キノコという文字、ハートと紅葉の絵。

足し算なのだから組み合わせろという事だろう。試しに魚の絵のすぐ横に桜の花の絵を描いてみ

たが、特に何にも見えない。位置を変えて魚の真上に花の絵にしてみるが、特に浮かばない。

次の文にある木とスイカを描いてみる。スイカと言えは夏だ。一人暮らしをすると中々季節の果物を食べる事が無いが、今年はバイト先の賄いで食べたっけ。

そういえば、1行目の桜は春の風物詩だ。サクルのみんな花見をした。3行目は紅葉は秋で4行目の雪だるまは冬……これは全て季節を表しているんじゃないだろうか。

問題はこの季節を表している絵文字が何を置き換えたものなのかだが、これはさっき描いた絵の組み合わせがヒントとなった。

絵と絵を合わせて生まれた文字といえは漢字。昔の人がそのものの形や動きを元に作ったときれる文字。その成り立ちに準え、絵文字を漢字に置き換えれば……。

1行目の魚はそのまま魚で、隣の桜が春を表す。魚へんに春で鱈。出てくる答えも魚の名前だからイコールの先は魚の絵文字。

2行目は木が木へんを表し、スイカが夏を表す。木へんに夏で榎。エノキダケでキノコだ。

この漢字の表すエノキはキノコではなくエノキという木の方だが、それは導きやすくする為だろう。

3行目のハートと紅葉。ハートは多分心を表すもの。心をへんになるとりっしんべんが浮かぶが、りっしんべんに秋で出てくる漢字は愀という字。イコールの先の泣いてる絵文字とは合わない。

そうなるこの心は左側に付くのではなく下に置く方。秋の下に心と書いた字は……愁。この泣き顔は愁いた顔、寂しさを表しているのだろう。だから号泣の絵文字ではなく、片目から涙を流す控えめな絵文字になっているんだ。

ここまでわかってしまえば最後の答えは簡単だ。糸巻きの絵文字はそのまま糸。そして冬がつく漢字といえは……この問題の締めくくりに丁度良い。

俺は開いていた銀色の画面の入力欄に答えを入力した。

「終」

一文字だけのその漢字が、なんだか物悲しく思える。これで終わってしまったのか。最初こそ読書の時間を取られてしまったと思ったが、今となっては名残惜しい。

そんな事を思いながら決定と書かれたボタンを押すと画面が切り替わり今度は青い画面に白い文章が現れた。

『ここまでの謎解きご苦労様だった。流石、君ならこれくらい簡単に解いてくれると思っていたよ。それでは最後の問題だ。君のパーティーパーティーの招待状がある本に隠した』

てつきり最後だと思っていた問題の続きがあった事に驚きと出てきた俺のパーティーパーティーというサプライズの嬉しさとが入り混じった不思議な気分になる。

しかし自分のパーティーパーティーだという

のに、こっちの予定はお構いなしか。今日は誕生日ではあるがサークルも任意活動しか無く、部長と約束していた訳でもない。

確かに当日だというのに何の予定は無いが、それを見越して何も言われなかったのだろう自分の交友関係の狭ささえ見透かされているように少々凹む。

『その本を導く為に必要な情報は今まで解いてきた謎に、すべて含まれている。足りない最後のピースは答えの本の中にある。聡明な君の事だからすぐに答えは導く事だろう。』

続く言葉で褒められたのでよしとしよう。俺は単純な男なので、聡明などと言われれば喜んで謎を解いてしまう。

今までの謎のレベルも高くは無かった。本の手掛かりが今しがた解いてきた謎にあるというのはよくわからないが、一つずつ振り返れば良い事。なに、そんなに問題視する事でもない。そう思っていたのだが、次の文章で俺には答えがわかってしまった。

『そう言っても予約時間に間に合わない大変なので、ここでヒントを一つだしておこう。ヒントは君の大好きなあの本だ。』

俺の大好きな本といえばアレしかない。今でこそ月に三冊程しか読めていないが、過去は本の虫とまで呼ばれた俺がこれまでの人生で一番衝撃を受け、周りにおすすすめを聞かれたら必ず名前を出すあの本だ。

部長はヒントを出すのが下手だ。わざとなのか、俺が答えを導けないと思われているのか。答えがわかってしまえば部長が言う「その本を導く為に必要な情報」というのは自ずと見えてくる。真正正銘最後の本を導く為のヒントは今まで解いた問題に散りばめられていて、どの角度から導き出せるのだ。

1 問目の頭文字に動物の名前を付けるという問題。これは頭文字に注目せよというヒント。

2 問目の英語に翻訳して解く問題は、全ての答えを英語に変換せよという意味。そしてヒントに入っていた文字数……これもそのまま使って答えの文字数を数える事の暗示。

3 問目の足し算はそのまま答えを足せという意味だろう。そして問題文での四季では主人公の事を指している。

答えは順に「Flora」「Fairy」「Fishes」となり、頭文字は「F」。これらの文字数を数えると4、5、6で足して15。

3つのFと15という数字。足りないピースは次の本にあるので、ここに1文字……1つ数字が足されて4つのFと16という数字が導かれる。

3 問目にはヒントが多い。四季を表す問題、白い紙から始まり、開かれた銀色の画面、切り替わった最後の問題は青色の画面だった。なんとも洒落ている。

始まって、真実を告げて、そして再びという事だろうか。最後の色はなんだろう。タイトルを覚える程読み込んだ本だ。この色の指す意味もわかる。

そしてこの問題文で強調された「すべて」という文字。これはもう殆ど答えだろう。

この問題から一番わかりやすく導ける答えは頭文字の「すべてがFになる」というところだろうか。

最後の本を探しに行く。持っているから図書館で探した事は無いが同じ作者の別の作品は借りた事があるので、場所は大体覚えていて、すぐに見つけたマ行の棚からその本を取り出して開いた。

挟まっていたのは透明なカード。

「Congratulations」という文に続いて、いつもの居酒屋の名前と予約時間が書かれていた。全くパーティーとは名ばかりで、いつも通りの騒がしい飲み会なのだろう。今から行けば丁度予約時間にピタリだ。部長はここまで読んでいたのだろうか。

俺は頬が緩むのを感じながら本を棚に戻した。席に戻り荷物をまとめる。

ただ暇つぶしにくだけだった図書館が特別な思い出の残る場所が変わったのを感じながら、秋風の吹く夕焼けに向かって歩き出した。

石鹼

保美田まや

いつも静かな図書館が、今日はちがった。ドアを開けたとたん急にあぶくが流れ出てきた。シャボン玉の大きなやつが部屋中に詰まっていた。ぼくを押し出そうとした。負けないぞ。気泡のくせに、想像以上の強い力で押し返してくる。迫るシャボンの大群を、プチプチ破裂させながら前に進んだ。

ようやく部屋に入ると、書棚も、壁も床も、泡で覆われていた。

宙に舞う無数のシャボン玉。透明な球体の表面で、虹色の輪が回る。赤くなったり紫になったり、金色に変わったり……ミラーボールのように光がぎざぎざめきあっている。きれいだ。それに、いいにおい。

部屋のまん中で、女の子がシャイシャイと音を立てて、泡だて器をかき混ぜていた。たくさんの泡は、このボウルから生まれている。

「あなたの、お好みの香りで石鹼をつくりますよ」「石鹼って、つくれるの?」

ぼくが聞くと、まんまる顔のペコちゃんみたいな女の子は、ニつと笑った。

「オイルと苛性ソーダを混ぜて、つくるんです」「ひやあ苛性ソーダって、なに?」

たじろぐぼくに、

「水酸化ナトリウムって、聞いたことがありますか? 取扱い注意の劇薬なんです。石鹼生地までは、むずかしいところもあるので、私がつく

ります。好きな香りを選んでください。」
テーブルの上には、小さな茶色の瓶が並んでいる。

「香りの調合もします。木の枝や花、葉、そして根っこから抽出した植物由来のアロマオイルです」

「ちよつと待って。待って、ここは図書館だから。なんで図書館で、石鹸づくりを？」

すると女の子の声のトーンがあがった。

「だって、図書館で見つけられるんですもの！ たった一個あれば、誰もがしあわせな気持ちになれるもの」

「え？ それ、石鹸のこと？」

首をかしげるぼくに、

「石鹸のつくり方も、図書館で見つけたこと、そのうちの、ひとつです。もっと知りたくなくて、調べて、ためして。そうしたら、もっともっとおもしろくなって、もっとずーっと知りたくなって……」

女の子は棚から本を取り出して、クルリと回って、また、ちがう本を出してきた。何度か回転すると、開いた本たちが、テーブルの上に散らばった。

もう半回転して、ぼくのほうに向き直してから、彼女が言った。

「石鹸って、いいにおい。好き、と思ったら、もっと知りたくなっちゃって、私、アロマの学校に通ったんです。好きになったことって、もっともっと知りたくなります。好きになったら、とことん、とことん、とんとんとことん♪」

「アロマの学校って、あるの？ 新しいにおい

をつくる、とか、そういうのを勉強するの？」

魔法学校みたいだ。マントをまとった子どもたちが、鼻のとがった先生から魔法のクスリの処方教わる学校。楽しそうにステップを踏む女の子を前に、ふと、そんな感じがした。

そこら中を虹色のシャボン玉が舞う図書館なんて、ホントならあり得ない。今日の図書館は、映画で見たマルチバースのメルヘン界なのだ。だったら、踊る魔法使いの女の子に、つきあってみるのもいいかな。

「嗅覚って、脳と直結しているんです」

と、女の子は本を手にして歌うように、説明を始めた。

「それ、またちよつと、ぼくにはむずかしいよ」
思わず我に返った。

「ですよね」と、彼女はステップを止めて、今までより大きくニッコリした。

「さっそく石鹸をつくりましょ！」

アロマオイルの小瓶のふたを開けてみた。ツン、フワリ、ふむふむ……

「あんまり鼻を近づけすぎないで、そうっと風を感じるみたいに嗅いでください」

女の子は、うれしそう。ずっとニコニコしっぱなし。もうちよつと甘い香りのほうがいいかな？ 集中しなくちゃ。目を閉じようとする

「今日は図書館に、なにを探してきたのですか？」
スポイトを手に取った彼女は、ぼくの目をのぞきこんだ。

「えーと。図書館、ひさしぶり、だったんです」

素直に答えるべくが、おかしかった。

レモンのような柑橘の香りと、ニツキみたいな懐かしい香りと……そうか、鼻とアタマの中はつながっている。鼻をフンとすすったその時、不意にたずねられた。

「あこがれていること、ありますか？」
……すーっと、香りの世界へ入っていく。

◇◇◇

縁石を歩きたい。

落ちないように、少しでもはやく。息を止めて。落ちたら負け。枯れ草が倒れていたり、端が欠けて小石まみれになっているところは、ぴよんと跳び越える。落ちたら、負け。負けたら、今日一日うまくいかない。そう決めているから、息をこらして、細心の注意を払って縁石の上を歩く。地上七センチの縁石が、今日の未来を決める。

アタマの中を、いま流行っている歌が流れた。

「わたしを愛せるのは、わたしだけ♪」
うん、きつと、そう。人気ボーカルのハイトーンボイスが、彼の声で耳の奥に響いた。

そんな脳内 “本人の声” 再生に覚醒したのは、もうずいぶん昔のこと。

団地の階段の踊り場で、突然、毎週欠かさずに見ている戦隊ヒーロー番組の主題歌がアタマをよぎった。テレビと同じ声だ、と気づいて耳を澄ますと、伴奏も含めて、最後までちゃんとテレビから流れるそのままの音だった。

でも、そのままの声で聴こえてくるのは、いつも好きな曲だけ。そんなこと当たり前？ ほかの

は、歌詞を知らないから。

ふふん、ふふふん、ひとりのときのBGMは鼻歌がいいね。

背中が陽があたっている。風を感じるのが一番だとは思えけれど、心地いい風は、そんなに吹かない。縁石は、ずっと続くわけではなくて、大きくカーブしたら、造成地の手前で、金網の壁にすいこまれてストップ。それでも、また新しい縁石を見つけたら、のって歩く。

夕方はとくに緊張する。縁石から落ちたら、今日一日が負けになる。夕陽を背にして、背中がぽかぽかしてきたなら、今日のラッキーが二倍になる。

ミカンが蜜柑っていう漢字を持っているのが素敵だ。木へんに甘い。そこに甘い蜜がくっつく。最高においしいそう。と思ったら、「ミカン」というカタカナ表記も愛らしい。みかん、と呼ぶ音だけで楽しくなる。

だから、ぼくは、ぽかぽか、とひらがなで書くんだ。気持ちいい、と思ったとき、アタマの中に浮かぶ文字。

木の廊下。陽のあたる縁側で寝ころがったこと、ある？ ツベツベと黒光りする堅い床があたたまる、肌触りがやさしくなる。勝手気ままに背中を擦りつけてもいいし、眠ってしまったもいい。陽があたっている間じゅうゴロゴロしているの、うれしいね。背中がぽかぽかすると、まどろんでいる猫になれる。縁側で寝ころがったこと、ある？

◇◇◇
そうだった！ 男の子だ。男の子にあこがれてい

る。前から。今も、この瞬間も。

ゲームに熱中するあまり、耳たぶまで真っ赤になつていく男の子。マシーン音を自分で唸りながら走半開きになった口……。おくちしめなさい、と思いつながら、ふきだしてしまふ。

縁石の上を早足で歩く男の子を見ると、立ち止まる。この頃、立ち止まるのがふえた。

男の子たちは、いつだって自分だけのいいことを見つけて、真剣に、ひたすらうつつを抜かしている。

そうだった。図書館には探しものを探しに来たのだ。新しいことなんかいらぬ。発見も、そろそろ、いいかな。だけど、いま、ちよつとだけだけど、収拾がつかなくて。

図書館って、なんて静かなのだろう。

もしかしたら、ぼくは少年ではないのかもしれない。男の子でないのは、たしかだ。

ぼくでも、ないのかも。

バブルだけに、これは夢の、また夢。

なのに、だいぶたつてから、石鹼が届いた。ほんとうに、郵便受けに入っていた。

ハトロロン紙で丁寧にくるまれた、乳白色に、淡いグリーン線の線が入ったかたまり。やっぱり、いいにおいだ。

走り書きのようなメモが添えられていた。

『ヒノキ

ベンゾイン

ジンジャー

・不安や緊張、心配ごと、何かに翻弄されているとき、自分をだんだん取り戻す香り。

・考え過ぎた頭の中を落ちつかせ、自分とゆつくりと向き合う中で、安らぎを感じる香り。

・あなたはあなたでいるだけで大丈夫と、自分に気づかせてくれる香り』

図書館で出会った女の子の、まあいい顔が浮かんだ。処方箋のようなメッセージ。さすが魔法学校に通っただけのことにはある。そう、鼻とアタマの中はつながっている。

固形の石鹼を使うのは、ひさしぶり。水に濡らすと、さらに香気を放った。綿アメみたいな甘やかさと、森の木々のような爽やかさ。ほんの少し、南の国を思わせるスパイス風味も。

日だまりのにおい？ どこまでもやさしい、好きなにおい。

ぬるぬる、ねりねり、くるくる……手の中でころがすと、石鹼の表面がやわらかく溶けた。

肌の上を、泡がすべる、すべすべすべ。すべすべ、すべすべ、なめらかに。

やさしいね。泡ってやさしい。なめらかなところも、いいにおいも、ぜんぶがぜんぶやさしい。石鹼って、やさしい。

やさしくなりたい。あのひとのことを、やさしく包みこんであげたいな。

たったひとつで、誰かをしあわせな気持ちにできるもの……

明日、また図書館に行ってみよう。

ミステリーへのいぎない

渡辺明子

(あれ、本になにかはさまれている。)
A子は読んでいた手を止めて、二つ折りになった紙を取り上げて広げてみた。

「私はこの図書館をよく利用している者です。あなたと私の好きな本が似ていると思います。思わずこの手紙を書いてしまいました。」

A子は思わず読む手を止めて、椅子に座ったまま、こつそりと辺りを見回した。

太い柱が近くにあり、本棚の間なので、本当は見回しても無駄だった。が、驚きで誰かが自分を見つめているのかも、と思ったのだった。紙には続きがあった。

「突然の事で驚かれたと思いますが、怪しい者ではありません。」

A子は、怪しくない訳ないじゃないか、と思いつつ、でも自分宛と決まったわけではないと思いつつ、続きを読んだ。

「ミステリーがお好きな様ですね。読もうと思っていた本を捜していたら、あなたが本棚に戻したのがその本でした。」

その後も、あなたが本棚で足を止め、手に取るのは、私が興味のある本ばかり。一緒に本の話が出来たら……と思う様になりました。」

書いてあった本は、確かにA子を選んでいった本だった。いよいよ、これは自分宛だと思った。ストーリーカーみたいだと思つたが、更に続きがあ

った。

「しかし、人と話すのは苦手なのです。あなたの事を詮索するつもりはありません。本の感想等を共有できたなら、と思いましたが。」

怪しいと思つたら、無視されても仕方ないのですが。」

A子は、はさまれた紙をどうしたものかと考えた。

① 紙を持ち帰る。

② 紙をそのままにしておく。

③ 紙を本にはさんだままにするが、(何かしらの)返答をする。

早く結論を出さなくては、とあせつた。

A子が図書館に来るのは、だいたい日曜日の午前中だ。図書館のあと、買い物をして昼には帰宅するというパターンだった。

大型の本は重いので、借りずに図書館で少しづつ読んでいたのだ。

手紙の主もその習慣を知っていたからこそ、その本に手紙をはさんだにちがいない。

さあ、どうする？

A子には、十代の頃、本屋で痴漢のようなストーリーカーのような体験があった。

夏の事だった。

立ち読みで夢中になっていたら、背後で、後ろ向きで自分の体にぴったりくっついて本を読む若い男がいた。通路が狭くて体が触れているのだと思ひ、位置をずらした。

だが、男も移動して、本を読んでいる(ふりを)して、後ろ向きにぴったりとはりついてくる。

（素足の足が触れ合うなんて、ありえないわ！）

さすがに痴漢だと思ったA子は、気味が悪くなり、本を棚に戻し、本屋から出た。

別の本屋へ着き、再び立ち読みをしようとした。あの男も、その本屋に入ってきて来て、A子と別の通路に入るのが見えた。

（後をつけられていたんだ。）

A子は恐くなって、気付かれない様に、更に別の通路を通過して本屋を出て、家に帰ったのだ。

さあ、どうする？

手紙の主はどんな人間なんだろう。

本当に手紙で本の話をしたいのだろうか。

書いてある通りに信じるか、それとも…。

この一枚の紙で何がわかるだろうか？

紙はコピー用紙みたい。特徴も特にない。

臭いもなし。

文字は、手書きではなかった。筆跡などで判断する術もない。

文章も取り立てて違和感も特徴もない、普通の文章だ。手がかりがない。

さあ、どうしよう？

本当に文学が好きで、でも人と話すのが苦手な人だったら、傷つけたくない。本の話が出来るのは楽しいだろう。

でも、もし違ったら。今でさえ図書館での行動を把握されているのに。

もう時間がなくなってきた。

三つの選択肢のどれを選んだらいいだろう。

A子は決断して、図書館を後にした。

読者の皆様へ

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

A子の決断が①②③のどれだったか決めるのは、皆様です。

とは言うものの、結論がないのはすっきりしないという皆様は、次をお読み下さい。

A子は決断して、「オッカムの剃刀」とつぶやきながら図書館を後にした。

このストーリーでは、小説の中のA子への「いざない」と同時に、読んで下さった皆様への「ミステリーへのいざない」ができていたら、大変嬉しく思います。

結論あり版のA子の決断は②でした。

機会あれば、A子とその後でお目にかかれるかもしれません。

ありがとうございました。

ほどける場所で

やもりん

あれ？何かはさまっている？と気づいたそばからハラハラと白い羽が舞い落ちた。いや、足元にあったのは一枚の紙切れだった。

それは一ヶ月前のこと。忘れもしない：弁論部の県大会で入賞を逃した最悪の日だった。「今年も絶対に入賞だね！」と友人、後輩、顧問の先生、両親からも期待されて挑んだというのに、あんなに練習して自信もあったのに：結果は予選落ち。「なんで？」が頭の中をぐるぐる回る。呆然として涙も出ない。「残念でしたね」という後輩君の声が遠くからぼんやり聞こえる。もう誰の言葉も声もはつきり聞きとれない。一人になりたい：部室を出て図書室に行こうと廊下を歩き出したけれど、クラスの誰かに会ってしまいかもしれない。気づいたら学校を飛び出し自転車をこいでいた。お気に入りの場所、池のほとりにある市立図書館。涼しい木立の中、いつものように私を待っていてくれた。館内は音の無い静かな、それでいて柔らかな空気だ。ほっと安心感に包まれる。深呼吸してかちゅつくりと本棚の間を歩いていく。体中に突き刺さっていた棘がポロポロとこぼれ落ちていく。これは「悲しみ」「悔しさ」という私が私に刺した棘だ。「私ってバカ」小さく呟く。情けない思いが小さな涙になって頬を伝う。「前を向かなくちゃね」と涙を指で拭いながら囲まれた本達に誓う。

さて、何か読んで帰ろうかなと、いつもは選ばないSF小説の棚で立ち止まる。「セントラルパークのドン・グリス』ダジャレみたいなタイトルに口元が緩む。そっと手に取りページをめくっていく。何かある？と思った途端に足元に落ちたのはコンピニのレシートだった。「なーんだ」拾い上げてよく見れば、高校の目の前にあるコンピニだ。なにになに？ハムタマゴサンド・あんばん・おにぎり（おなか）・チリトマトヌードル・ポテチにコーラ!?なに？この量！ちよつとお：買い過ぎでしょーと小声でツッコミを入れたら可笑しくなってきた。ここは図書館！静かにしなくちゃ：我慢したけれど肩を震わせながらククク：と笑ってしまう。笑いながら、いつの間にか涙が頬を伝っていた。えっ!?泣いていたことに気づいたのと同時に背中がポツと温かくなつた。「買い過ぎたのはオレ!」「今日はお疲れさん!」聞き覚えのある低い声、タカシだ。心配して探してくれたんだ：あんなに食べるんだ：もう色んな思いがぐちゃぐちゃに混ざりあつて泣きじやくる私を後ろからギュツと抱きしめてくれた。

ようやく泣けた。思いきり。

あの日からデートは図書館になった。

雨でも暑い日でも心地良い場所。

「そろそろ、そのしおり交換したら?」

笑いながら私の顔をのぞき込む彼に首を振る。

「これは大切なお守りでもあるからね。」

「さあ、何か食べに行こ！大喰いさん。」

いぎないの和紙

瑚灯

「あれ？何かはさまってる！」

紫は違和感に気づいて小さなひとりごとを漏らした。

近未来的なイラストの表紙が気になって手を伸ばした小説の単行本の真ん中あたりから、短冊状の和紙がよきつと顔をのぞかせていたのである。

表紙から感じる本のテイストと似つかわしくなく、その和紙はもともと本に付いている物とは思えなかった。

どういうことなのか気がなった紫は近くの閲覧席に腰掛け、本を開いて和紙を取り出してみた。

これやこの行くも帰るも 別れては知るも知らぬも 中央図書館
SYUHEI

和紙には文字が書かれており、それは有名な百人一首の歌をもじったものだ。

逢坂の関と詠まれていた部分が、紫が滞在している中央図書館に変えられていた。

どこかへ行く人も帰る人も、知ってる人も知らない人も、この中央図書館で巡り会っているという意味だろう。

元の歌の作者は、坊主めぐりでも有名な蝉丸だ。

よく見る挿絵の蝉丸を思い浮かべて紫はクス

ツと笑った。

果たして和紙を仕掛けたSYUHEIは一体どんな人物なんだろうと興味を湧いた。

署名の下には、

本日二〇二四年八月二十二日の午後二時から五時まで喫茶スペースで待ってみるので興味を持ったらこの和紙を持って会いに来てください。

というメモ書きもされていた。

「これ、仕掛けられてすぐなのかな？」

紫は腕時計を確認しながらつぶやいた。

時刻は二時十九分。

本の天からはつきり見えている和紙に気づかない館員はいないだろうから返却時に見逃された可能性はゼロだろう。

そして新刊コーナーに置かれていたこの本は利用者の目に触れ手に取られる機会も多いはずなので、紫が気づく前に他の誰かが気づいていたとしてもおかしくない。

それなのに和紙が残ったままということSYUHEIがこれを残していつからそれほど時間は経っていないのかもしれない。

あるいは、もし先に見た人がいてもみんなスルーしたのか。

あやしいといえばあやしくもあるし、SYUHEIに会ってみようと思った人が誰もいなかったというのも不思議ではなかった。

でも紫は、なんだか素敵なことが起きそうない予感でわくわくが止まらない自分に気づいて

筆跡から嫌な感じがしないどころか、好きな
雰囲気だなど思ったのも彼女にとっては大きか
った。

紫は顔すら忘れてしまったかつての同級生や
教員の筆跡だけはなぜか覚えていたりするほ
ど、普段から筆跡に対する興味が強いのだ。

筆跡の印象からは若さもうかがえ、平日のこ
の時間に図書館にいるということは夏休み中の
学生で同年代かもしれないと予想していた。

勘はGOと言っている。

紫は和紙をもって意気揚々と立ち上がり、本
を棚に戻しながら喫茶スペースに向かうことに
決めた。

喫茶スペースと呼ばれているもののカフェが
併設されているような大がかりなものではなく、
あるのは自動販売機のみで昼食の時間帯以外
はほとんど無人のスペースである。

紫が足を踏み入れた時も、埋まっている席は
ひとつだった。

後ろ姿しか見えないその男性はサムライヘア
でストリート系ファッションに身を包んでいて、
紫が持ついわゆる文学青年のイメージとはかけ
離れていたが、意外性やギャップに弱い彼女に
とってはそれも好印象だった。

この人がSYUHEIだったらいいなと思っ
ながら声をかけた。

「あの、SYUHEIさんですか？」

「そうです！うわ、マジっすか！」
弾かれたように振り向いた青年は、紫がひら

ひらと振っていた和紙と紫に視線を行ったり来
たりさせながら立ち上がった。

紫の目測で一八五センチくらいの身長に人懐
っこい笑顔を乗せている彼は、なんとなく大型
犬を彷彿とさせた。

紫もつられてにこにこしながらSYUHEI
を見つめた。

身長差から紫は上目遣いになり、SYUHEI
Iは気恥ずかしくなったように少し視線をそ
らした。

そしてすぐに視線を戻して言った。

「来てくれる人いないかもって半分以上諦め
てたんでめっちゃうれしっす。あやしい者じ
やないんで、これ」

言い終わるや一礼して紫に差し出したカー
ドは学生証だった。

「えっと、東田修平さん。え。待って、うちの
付属高だ！」

受け取って確認した紫は思わず感嘆の声を
上げた。

「仁品紫です。ゆかりって読みます」

紫も自分の学生証を出して修平に手渡した。
二人の学生証には同じマークがついている。

「おー、すげえ。来年内部進学するつもりな
んでなんか一気に親近感っす」

「どんな人かなってドキドキしてたから、私
も親近感でホッとしたしうれしんです。和歌の
文字から同年代かなとは思ってたけど、和歌を
詠むなんて渋いからまさか年下の人とは思わ
なくて驚きました。あ、座りましょう」

紫が促して向かい合ってソファに座った二人はお互いに興味津々である。

初対面なのに全く気まづくないというのは紫にとつても修平にとつても珍しいことだった。

ほのぼのとした空気の中で修平が口火を切った。

「俺こんなんだけど怖かったりしないっすか？紫さんみたいな落ち着いた雰囲気のお姉さんの周りにはこういうのいなそうですけど」

「たしかに周りにはいないですけど、怖くはないしギャップ萌えですよ。修平くん、和歌を好むタイプに見えないところが逆に良きです。率直に、仲良くなりたいたいと思ってます」

紫は修平の頭の先から足の先まで眺めながらふわつと笑った。

彼女は知るよしもないが、その笑顔は周囲の人達すらあまり見たことがないほどやわらかいものだった。

修平が射抜かれたのも無理からぬことだ。

「そう言ってもらえてよかったです。俺、じいちゃんやんが古書のコレクターで家に書庫があったもんだから、小さい頃から本が大好きだったんです。韻を踏んでるとか言葉遊びの類も好きです。その流れでヒップホップにはまって、ヒップホップのファッションもいじやんって思ってこんな格好してて、俺の中では本が好きなのとヒップホップが好きなのは地続きなんだけど、周りの受け取り方はそうじゃないっていうか。見た目の印象のほうが強いから仕方ないのもわかったやいるんすけどね。ヒップホップが好きは派手な奴って思われて、仲良くなった学校の友達は

なぜか総じて本に興味がないんすよ。外でワチャワチャ遊ぼうぜ！って奴らばかりで。友達と遊ぶのが楽しくないわけじゃないけど、図書館とかしーんとした空間で本に没頭するのも好きで、そういう素の自分でいられる友達も欲しいなって思ってあの本にメッセージを挟んでみたんです。あれに引つかかってくれる人は文学が好きならしかいないって確信もあつたし」

修平は時折頭の団子に触れながら言った。これは彼が照れている時などにする仕草である。

「語っちゃってすみません」

はにかむ修平に、紫は何の問題もないというのを言外に漂わせながら、柔らかく微笑みつつ首を横に振った。

そして、なるほどと深く納得した。

パツと見の印象で相手のキャラクターを予測してしまふのはありがちなことだし、実際紫も最初に修平を見たときには文学青年っぽくないなと感じたのだ。

相手が求める自分のキャラクターに押されて本当の自分が出しづらくなるというのも覚えがあつた。

誰しも少なからず経験することだろう。

「うちは父親が古典文学の研究をしている人で、私も本に囲まれて育ったんです。今は日本文学史を学ぶゼミにいて、和歌にもたくさん触れてきました。そんな私が修平くんが仕掛けたメッセージを見つけたって、なんか陳腐な言い方だけど運命じゃないかなって思っちゃいます。

運命ってフィクションとしては楽しんできたけど、自分で感じたのは初めてです。筆跡も好きだと思っただし、会ってみたら風貌も素敵と思っただし、こうして話しているのも心地が良くて、怖いくらいです。自分でもびっくりするくらいぐんぐん惹かれてるの。出会ったばかりなのに気持ち悪かったらごめんなさい」

紫は真顔で語ったあと、不意に赤面し、誤魔化すようにエヘへと笑った。

それを見た修平も頬を染めた。

「俺も紫さんに惹かれてますよ。最初はかわいいお姉さんでラッキーって感じだったけど、今はかわいだけじゃなくて中身もめっちゃ気になってます。俺に会って話を聞いても引かずに受け入れてくれたのがすごくうれしい」

「そんな風に言ってくれて私もうれしくてテンション上がります。もしよかったら、このまま図書館デートしませんか？周平くんが好きな作家さんとか好きな本のジャンルとかも知りたいです」

「いいっすね。好きな本の話ってその人の内面が出て自己紹介兼ねますもんね。館内ぐるっと回らしましょう！」

どちらともなく立ち上がった二人は、顔の熱が冷めないうま歩き始めた。

二人と入れ替わりに喫茶スペースに入ってきた集団は小学生のグループのようで、楽しそうに自由研究の話をしていたが、すれ違いざまに修平と紫をじろじろ観察していた。

「ねえ、あのお姉さんびっくりするくらいニ

ヤけてたよね」

「ちよっと聞こえちゃうよ！」

子どもたちの話し声とクスクス響く笑い声は当然紫と修平の耳にも入った。

「だって舞い上がってるんだもん」

紫が唇を尖らせて言うのと、それを見下ろした修平が爆笑した。

「紫さん、かわいすぎてヤバいっす」

「じゃあ手つないでもいいですか？」

「じゃあの意味分かんないけど、よろこんで！」

紫が差し出した手を修平が包み込むように握った。

照れつつもうれしき満開の表情を浮かべて手をつないで歩きながら、二人はお互いの好きなジャンルや好きな作家の本を見つけるたびに語り合った。

好きな本が共通しているときには盛り上がり、読んだことのない本を相手が紹介している時は興味深く聞き、とにかく話が尽きることがなく時間の経過を感じなかった。閉館が近づいていることを告げるアナウンスが流れた時には一緒に驚いた。

名残惜しく図書館を出る際に、紫は修平の手を強く握り直した。

「図書館はもともと好きだったけど、今日修平くんと出会えたからもっと好きになりました」

「俺も同じ気持ちです」

修平も紫の手を強く握り返す。

図書館で始まった紫と修平の物語はこれからも未永く続いていく。

梅ちゃんとヒコナちゃんの小田原大冒険

きつどG3

あれ、本になにかはさまっている……。図書館で書棚にあった「橋本治の古事記」を開いたら、本に何か挟まっています。隙間がある頁を開くと、何も挟まっていません。でも頁を閉じるとそこに隙間があります。

「変だなあ」梅ちゃんはまた、その頁を開いて紙をなでてみました。「あつた」頁の真ん中より少し上の辺りに小さな豆粒ほどの何かがあります。「なんかグミみたいだなあ……」

梅ちゃんはその見えないけど、触ることは出来るグニユグニユしたものをしばらく触っていました。「あれ、これ動く」頁の真ん中にあつたふくらみを上に押すと、それは上に動きます。横に押すと横に、下に押すと下に動くのです。

「頁と頁の間じゃなくて紙の間に挟まってるみたい」梅ちゃんはそのふくらみを頁の上の方に押し上げていききました。頁のいちばん上に押し上げると、そのふくらみは頁から飛び出しました。机の上に転がり出たそれは見えません。梅ちゃんは、手探りで机の上をなでてみました。「あつた」今度は見失わないように、梅ちゃんは左手で軽く押えながら右手の人差し指で、その透明なものを押してみました。本当にグミみたいで、推すとへこむのですが、手を離すと元に戻ります。梅ちゃんは机の上でそれを押したり、転がしたりしました。すると、突然それは真つ平らになって、煙とともに小さな着物を着た男が飛び

出して来ました。

梅ちゃんは驚いて、声を上げそうになりました

た「あ、あなた誰？」「私か？私は少彦名命すくなひこなのみこと、一応神様なんだけど、子供たちからは『一寸法師』と呼ばれているな」

「え、一寸法師って、あのお椀の舟に箸の權って歌にある？」

「そう、その一寸法師」

「な、なんで一寸法師がこんな所に？」

「知らん、目が覚めたらここにいて、お前がいた。そうだ、お前の名前は何というのだ？私に名乗らせたのだからお前も名前を言いなさい」

「私？私は梅子、大田原梅子、みんなは私のこと梅ちゃんと呼ぶの。小学二年生。七歳」

「で、ここはどこだ？」

「ここは、小田原駅東口図書館。児童コーナーだよ」

「良く分からん。まぶしいな、天井も壁も床も真つ平らで造り物のようだな。魂がこもっていない」

「あ、周りの人が変に思うところを話しましょう」と隠れて、他の人のいないところで話をしよう

梅ちゃんは一寸法師をつまみ上げて、トートバッグの中に隠しました。

「な、何をするのか。一応神様だぞ、虫をつまむみたい、私を扱うのじゃない」

「あとで、謝るから、ちよっと静かにして」

一寸法師をトートバッグに入れた梅ちゃんは、読んでいた本を棚に戻して「ミナカ」のエスカレーターを降りて、小田原城に向いましたお城なら広くて人もあまりいないし、テーブル付のベ

ンチがいつぱいあって、一寸法師とお話をして
も大丈夫だと思っただからです。

お城の、この間までサルの檻があったところ
の近くで木陰のベンチに座って、梅ちゃんはトート
バッグから一寸法師をつまみ出そうとしました。

「つまみ出すって、なんか感じが悪いな。一寸
法師さん、自分で出てこられる？」

返事がありません。梅ちゃんがトートバッグ
の中をのぞくと、一寸法師は目を閉じて横たわ
っています。

「あら、いやだ。死んじゃったの？」梅ちゃん
は慌てて一寸法師を揺すぶりました。二度、三
度揺ると一寸法師の目が開きました。

「ああ、よく眠った。ここはどこだ？さっきのと
ころよりももっとまぶしいな。でも、地面は土
だし、周りには松の木もある。おお、なんだ。
あの大きな白く輝く建物は」

なんと一寸法師は図書館から小田原城まで
のわずかな時間にぐっすり寝入っていたのです。

「小田原城よ。そしてここは本丸広場」

「木で造ったものではないな。白い壁と屋根を
覆う、黒いものはなんだ？」

「白壁は、たしか漆喰とかいう土をこねて塗っ
たものよ。屋根に乗っているのは瓦で、こねた
土を板のような形にして焼いて堅くしたものよ。
おじさん知らないの？」

「知らん、私の周りには木で造った家しかない」
「ふーん、おじさんの頃の家は全部木で出来て
いたの？」

「さつきから、おじさん、おじさんと失礼な。一

応神様だぞ」

「あら、ごめんなさい。じゃ、何て呼べば良い
の？一寸法師？でも、一寸法師って子どもでし
よ？おじさん、いや神様は子どもじゃないわよね」
「生まれたときは子どもだった。でも、何年経
つても、子どもの姿のままなんだ。うーん、スク
ナヒコナノミコトが本当の名前だからヒコナチ
ヤンと呼んでくれ」

「分かった、ヒコナちゃん。で、なんで本の間に
挟まっていたの？」

「良く分らないのだが、私の周りには仲間の
神々が居並んでいた。もっとみんな固まってい
たが。私も目は開いていたが、体は凝り固まっ
たように動かなかった。それが、何だか急に体
中をもみほぐされて少しずつ体が動くように
なって、気がついたらさっきの真っ平らな家の
中でお前が目の前にいたのだ」

「ふーん、なぜかしら、どうしてこんなことが
起きたの？」

「あのな、今、目の前にお前がいる、私がいる。
それでいいじゃないか。たぶん、説明なんかつ
かないだろうし、説明はたいて面白くないし、
無駄に長い。私は神様だから構わないが、寿命
のある人間がつまらないことに時間を使うのは
もったいない。目の前のことだけに向き合っ
ていけばいいのだ」

「お母さんや、先生は勉強をしないと立派な大
人になれないって言うけど……」

「本当の勉強とはおのやすまる太安万侶のように文字に書い

た物からではなく、稗田阿礼ひえだのあれのように人が直に

話す言葉を聞かないと身につかない。目の前が大事なんだ。あ、とここでこら辺りには小田

原用水という掘り割りがあるのさろ？」

梅ちゃんは不思議に思いました。漆喰や瓦を知らないヒコナちゃんが、なんで小田原用水を知っているのでしょうか？時代がめちやくちや。

「ま、いいわ。説明は大体面白くないんだから」

梅ちゃんはお父さんから小田原用水のことを

聞いていただけでなく、何度か早川の水の取り

入れ口から、用水を辿って掘割や暗渠の脇を歩

いて万町の辺りまで歩いたことがあったのです

「分かった、じゃ、行くわよ。悪いけどまたここ

に入ってくれる？カ・ミ・サ・マ」

「なんか、バカにしてないか？それはいいが、そ

の前にかまぼこ屋に寄って板付きかまぼこを一

つ買ってくれ」

梅ちゃんは少し困りました。小田原のかまぼ

こは安くないのです。もちろんスーパーに行け

ば一つ百円ほどのかまぼこもありますが、地元

名産のものは一番安いものでも大体一つ千円く

らいするのです。

梅ちゃんはちようどお小遣いをもらったばか

りで、二千円を持っていました。でも、本物の

かまぼこを買うと、残りは半分になってしま

います。もらったばかりでいきなり半分になると

この先不安です。

梅ちゃんが戸惑っていると、ヒコナちゃんは

「お金がないのか？」と聞きました。梅ちゃんは

「あるんだけど、他にも買いたいものもあるし：」

「そうか、では」とヒコナちゃんは懐から折りた

たんだ紙を出しました。外側は早瀬干物店包

装紙でしたが、内側には一万円札が入ってい

ました。

「これを使ってくれ。すまんが、かまぼこは籠

清のにしてくれ。かまぼこは梅ちゃんが全部食

べていいよ。私が欲しいのはかまぼこ板だけだ

から」

梅ちゃんとヒコナちゃんは駅の方に戻って籠

清駅前店にかまぼこを買いました。ヒコナちゃ

んがせかすので、梅ちゃんはかまぼこをムシャ

ムシャ食べました。空いていたお腹がいっぱい

になりました。

また、お城の中を抜けて、南町の路地を通

て、早川をさかのぼって、取水口に行きました。

すると、ヒコナちゃんはトートバッグから飛

び出して、「さっき預けたかまぼこ板と、それ

から鉛筆があれば一本貸してくれ」と言いま

した。

今どきの子供は鉛筆ではなく、シャープペン

シルを使うことが多いのですが、梅ちゃんは鉛

筆を持っていたので、ヒコナちゃんの背丈ほど

のまだ新しい鉛筆を貸してあげました。

「なんに使うの？」

「ああ、このかまぼこ板をSUPにして、鉛筆

はパドルにする」

「え？SUPって、あのサーフボードの上に立っ

て乗るやつ？」

「そうだよ」

「一寸法師ってお椀の舟に箸の權じゃないの？」

「ふふふ、時代は変わるんだよ。なにせ、ポップ・ディランがノーベル文学賞をもらう時代だからね……」

「ヒコナちゃんは知ってることと知らないことがバラバラだね」

「うん、二千年以上生き続けているからボケたところもあって、いわゆるまだらボケかな？」

「さあ、さっきのかまぼこ板を出して、川岸に置いてくれないか？」

梅ちゃんがかまぼこ板を水辺に浮かべると、ヒコナちゃんは板に飛び乗りました。鉛筆の權で岸を押して小田原用水に漕ぎ出しました。

急な流れに乗って小田原用水を下って行くヒコナちゃんはどんどん梅子ちゃんから遠ざかっていきます。

「なりわい交流センターの前で、また会おう！それじゃあ！」

梅子ちゃんは、小田原用水に沿ってなりわい交流センターを目指しました。距離がかなりあったので、三十分はかかったでしょう。梅子ちゃんがなりわい交流センターに着くと、物陰から「ここ、ここ」とヒコナちゃんの声が聞こえます。辺りを見回すと植え込みの影にヒコナちゃんがいきました。

驚いたことに、着物が全然濡れても汚れてもいません。一体どうやって排水管みたいな暗渠を抜けて来たのでしょうか？

理由が分かかったとしても、梅ちゃんは自分が

暗渠を潜ることは今後もないと思ったので聞くのを止めました。

「この近くに早瀬ひものスタンドというお店があるらしいので、まずそこへ行こう。この包装紙のアジの干物が道順を教えてくれるのだ。それとSUPの板も預かっておいてね。また使うから」そう言うヒコナちゃんは懐から出した青い包装紙を太陽に掲げました。包装紙に描かれた何匹もいるアジの群がピクピク動きます。

「なるほど、こっちなか」

ヒコナちゃんはそれを見て、どんどん歩いて行きます。少し歩くと動いているアジの向きが変わります。それが道順を教えてくれるようですが、梅ちゃんには仕掛けと言うか仕組みが分かりません。

早瀬干物スタンドは地図が必要な場所ではありませんでした。旧東海道を西に百メートルほど真つすぐ行ったところでした。

「よしよし、次行こう」とヒコナちゃんはお店には寄らずに歩きだしました。間中病院の手前を左に曲がって、次の角をまた左に曲がってかまぼこ通りを東に向かいます。一筋違うけど今来た道を逆戻りです。なりわい交流センターの裏を過ぎてもヒコナちゃんはどんどん進みます。すると左手に籠清の本店がありました。古い木造家屋です。ヒコナちゃんはスタスタ、店の中に入って、身軽にカウンターに飛び上がりました。

「梅ちゃん、さっきのかまぼこ板を出して」「え、ああSUPのボートね」

「違う違う、籠清さんのかまぼこ板だよ」

梅ちゃんが渡したかまぼこ板を小脇に抱えたヒコナちゃんは「ご主人いらっしやるかな？」と店員さんに訊ねました。そして、かまぼこ板を出して「これをご主人にお渡し下され」と言っ

て、さらに何か小声で耳打ちをしました。すると、店員さんは店の奥に下がって行きま

した。しばらくすると立派なお爺さんが出てきました。そしてヒコナちゃんと何か内緒話をしました。

「さあ、次に行くよ」とヒコナちゃんは梅ちゃん

のトートバッグに飛び込んで「真っすぐね」と東

を指さしました。暫く行くと狭い路地でヒコナ

ちゃんが

「そこを左に」と言いました。

路地の先の右側に古い扉がありました。

「ここ、ここ。この喫茶店に入って」そう言われ

て梅ちゃんが扉を開けると、まあびっくり、店

の中には古い時計の文字盤だらけです。他にも、

バイオリンやホルンなど壊れた楽器や古いカメ

ラ、電気のメーター、鍵束などが無造作そうに

飾られていました。でも、梅ちゃんにはそれが

綿密に計算して飾られていることがすぐに分か

りました。扉を開けたものの入るのをためらっ

て梅ちゃんは「ねえねえ、ここは何の？時計屋

さん？」梅ちゃんは思わず声に出してヒコナち

長身細身で髪を撫でつけた清潔感溢れる三十代くらいの男の人が答えました。「さつき、早瀬干物スタンドで教えてもらったのだよ。どこか一休みするのに良い場所はないかって。そうしたら散歩の途中なら『途上園』が良いですよ。ところで今日はチョココレートケーキが美味しうかな？」

「はい、今日は定番のレモンチーズケーキとチョココレートケーキがあります。どちらも今朝作ったものです」

「じゃ、チョココレートケーキと紅茶を二人分。で

いいかな？梅ちゃん」

「え、はい私、ケーキ大好き」

と言ったものの、梅ちゃんは壁にかかった白

い時計の文字盤が気になります。文字盤が白塗

りしたピエロの顔に見えるのです。梅ちゃんは

ピエロが苦手です。

何年前か前、お父さんはピエロが出て来るミス

テリーを読んで、怖い所だけをかいつまんで、

梅ちゃんを怖がらせたからです。

梅ちゃんは今でも怖がっています。梅ちゃんのお

にしました。梅ちゃんが座って席の横に本棚が

ありました。難しそうな本が並ぶ中に高田純

次の「適当聖典」がありました。梅ちゃんのお

父さんの愛読書です。梅ちゃんも何度か手にし

て読みましたが、とてもくだらなくて、読む気

が起きませんでした。それに、梅ちゃんのお父

さんは、毎日テレビの「じゅん散歩」を見て、

番組の話をするんです。番組は正味十分ほどなのにお父さんの話は毎日、小一時間はかかります。多分、お父さんが適当に作った話が半分以上だと思えます。

でも、今日は違います。ピエロの怖い顔を忘れるには高田純次です。あのくだらなさです。梅ちゃんには恐怖を忘れようと「適当経典」を斜め読みして心を落ち着けました。

高田純次を笑っているうちに紅茶とケーキが出てきました。早速、ケーキを食べるとこれが美味しい。お母さんが東京に行つて有名なケーキ屋さんで買ってくるオペラというチョコレートケーキよりもずっと美味しく感じました。ケーキを一口、紅茶を一口、たまりません。

ヒコナちゃんは自分の体と変わらない大きさのケーキを食べるときは、SUPのパドルほどの大きさのフォークを使い、紅茶を飲むときはスプーンに持ち替えて柄杓のようにして飲んでいきます。

ケーキと紅茶をあつという間に平らげた梅ちゃんにはケーキと格闘するヒコナちゃんが食べ終わるのを待ちました。お腹が膨らんだので、もう壁の文字盤は怖くありません。ただの薄汚れた古い文字盤です。

「うーん、壁だけじゃないのね。あっちのテーブルはガラス板の下に文字盤があるし、それとこの文字盤は文字盤の中に小さな文字盤が二つもある。梅ちゃんは暇つぶしに文字盤の数を数えてみました。ノートの際に「正」の字を書きながら間違えないように数えました。念のため

に二度数えてみると全部で二百六十九個ありました。梅ちゃんは「三百六十九か……」と独り言を言いました。

すると、やつとケーキを食べ終えたヒコナちゃんも口にはチョコレートを付けたまま

「え、二百六十九？269、つむぐ？そうか、つむぐか！」

「え、何？どういうこと？」

「いや、さっき籠清で途上園に次のヒントがあるって教えてもらったのだ。そうか文字盤の数か。じゃ、次行こう」支払いを済ませたヒコナちゃんはトートバッグにも入らずに走り出しました。

269に向かう青物町の交差点でヒコナちゃんはまだ夕焼けに見入っています。

秋も深まり日暮れが早くなつて、箱根の山々が夕日に映えています。二子山がよく似た姿を赤く染めていきます。

「どうしたの？」

「ああ、ヒントはこの交差点を通らせるために途上園と269を指定したのだな」

「ヒントって何の？」

「実は私には双子の弟がいて、千五百年ほど前に離れ離れになつてしまつた。ある時、相模の国で山になつてその地の守り神になつたと聞いた。そしてある晩、夢を見た。女の子が来て、その子について行つたら弟の姿を見ることができると夢のお告げがあつた。そして目が覚めると梅ちゃんがいたのだ。」

「そうだったの。あのね、この辺りには双子の山

がいったばいあるの、上双子と下双子、石垣山と石橋山、明神岳と明星岳もそうだわ」

「そうなのか、じゃ、そのどれかが私の弟なのか？」

「待って、双子の山だったらヒコナちゃんも山になっただけなよ。あ、双子の間に一つ「神山」という山があるわ。もしかするとそれがヒコナちゃんの弟じゃないかしら？」

「ここから神山は見えるかい？」

「残念、見えないわ」

「そうか、では明日は神山を目指そう」

「え、明日もヒコナちゃんに付き合うの？」

「いやかい」

「うーん」と梅ちゃんは返事をしませんでした。でも、梅ちゃんはもうそのつもりでした。

小田原駅東口図書館爆音デー

きつど G3

いつも静かな図書館が今日はちがった。ミナカのエスカレーターで小田原駅東口図書館に向うと、階が上がるに連れて音がどんどん大きくなってきた。

最初は何の音なのか分らなかったけれど、だんだんそれが騒音だと分ってきた。いろんな音が混ざっています。

大勢の人の声、男の声、女の声、子どもの声、お年寄りの声、野太い声、甲高い声、歌声、怒鳴り声、お経を唱えるような声、人の声だけではない。楽器の音もある。フルートやリコーダの音色もするし、雅楽で使う箏のような空気を切り裂く音、ギターやチェロのような弓で弦をこするような音もある。鐘のような音はハンドベルの音だろうか。いろんな楽器が揃うとオーケストラのような厚みのある豊かな音になるかと思ったら、指揮者も不在で、選択された楽器にはまとまりもなく、メロデーもあるのかないのか、いやはつきり言えばたらめで大友良英が大人数を集めてノイズをやっているようにしか聞こえない。まさしくノイズ。騒音そのものだった。

エスカレーターが六階に着くと、騒音は一層大きくなった。そして、視線の先にガラス張りの図書館の中が見えてきた。普段なら混雑していても、向こうが見通せないと言うことはなかったが、きょうは一体どう言うことだ。まるで満

員電車の中のように、大勢がひしめいている。人が多くだけではない。本を片手に大声を出して歩き回っているお年寄り、ギターをかき鳴らしながら飛び跳ねている高校生っぽい男の子、長い髪をかき上げながら文庫本の中原中也詩集を朗読している三十歳くらいの男の人……あれが絶滅危惧種の文学青年か……。

呆然としながらも、ここに入ってはいけないうい野生の本能が閃き恵介は踵を返そうとしたが、エスカレーターでは引き返すことが出来ない。恵介、絶体絶命。エスカレーターが終わって六階に着くと、図書館の入口まではほんの二、三メートルしかない。そのまま引き返そうとしたが、エスカレーターのスピードで惰性がついて、恵介は押されるように図書館の入口の前まで来てしまった。

入口にはネオンサインがチカチカ点滅している看板が立ってかけられていた。そこには「第一回小田原駅東口図書館爆音デー」と書いてある。目を疑った。映画館なら聞いたことがあるけど、ここは図書館。一体誰がこんなことを考えたのだらう。それに「第一回」って何？こんな無茶苦茶なイベントに二回目ができると思っているなんて、頭がおかしいと思えない……。こんなことに関わり合うと碌なことはない。巻き込まれないうちにとっとと帰ってしまおうと、回れ右をして下りのエスカレーターの方に向かいかけたとき、ちらっと視界に入った人物を見て恵介は嫌な予感で気分が悪くなった。と、同時に耳馴染みのある声で「恵介、逃げるな。待

っていたんだ」と誰か、いや、誰かじゃない。あれは間違いなくこの図書館の館長の三の丸さんの声に違いない。まずいと恵介は思ったが、あの声を聞くといつも恵介の脚がもつれるのだ。「恵介君、君が来るのを待っていたんだ。絶対来ると思っていた」

「いや、絶対とかじゃなくて、貸出期間が過ぎた本を返しに来ただけなんですよ」

「なんでもいい、とにかくここまで来て図書館に寄らないというのはないだろうか？恵介君」

「いやはや、こうなってしまうと恵介はクモの巣に引っかけかけた蝶のようなものだった。男らしく運命だと諦めて、声の主、三の丸さんの方を振り返った。

「分りました。寄ってきますが、これは一体何の騒ぎなんですか？」

「いや、今、図書館はただ、本を貸出したり、閲覧席で勉強したり、暇つぶしに新聞読みに来る人だけを相手にしているだけではダメなんだ。いろんなイベントをやって、これまで図書館を利用していなかった、新しいお客さん呼び込むために、図書館に宿泊するイベントとかもあるのだよ」

「ああ、聞いたことあります。博物館のナイトツアーみたいなものですね」

「お、さすが恵介君、話が早い」

「で、この馬鹿騒ぎは一体どんなイベントのもりですか？」

「昔はね、本を読むのはみんな音読、つまり今で言えば朗読だったんだよ。確かローマ時代の

貴族が、自分の甥が本を黙読しているのを見て驚いたと書き残している」

「それじゃ、うるさくて周りに迷惑じゃないですか」

「今と昔では環境も習慣も違うんだよ。まず、昔はこんな人に人がいっぱいいなかったし、図書館だつてどこにでもあった訳ではない。本を読む人は少数の貴族か、金持ちで屋敷も大きかったんだ」

「そうか、自分の部屋で声を出している分には人の邪魔にはならないのか」

「ちよつと違うよ。その頃の人は音読を、一種のコミュニケーションツールとして使っていた。文字や本がない頃は知識を広げるためには実際に体験するか、体験した人の話を聞くしかなかったんだ」

「それは面倒ですね。そう言えば『古事記』は稗田阿礼でしたっけ？が耳コピしていた昔の話を、太安万侶が文字起こししたものですね。稗田阿礼は文字の読み書きが出来なかったんでしょうか？」

「どうか？そうかも知れないけれど文字を読むよりは直接話す方が臨場感と言うか、話し手が話す以上の光景、想像力かな浮かんできたんじゃないだろうか？リアリティと言うか」

「で、コミュニケーションツールとしてというのはどういうことなんですか？」

「うちの図書館の人気イベントに『読み聞かせ』があるのは知っているよね？」

「はい。児童コーナーで子どもたちに絵本を紙

芝居風にして読んだりする奴ですよ」

「いや、今は『大人の読み聞かせ』と言って昔の小説とかをその時代を経験したお年寄りに読んで貰つて、当時のことを質問することが出来たり、専門書を専門家の解説付で読む会とかもあるよ。車座になって聞いて、つまらなかつたら帰つてもいいし、途中から参加しても良いんだ。茶の間で家族の団らんでその日に起きたことや、思ったことを雑談するように。黙読だけだと本の内容はその人だけのものじゃないか。声に出して読めば聞きたい人は側で聞けば良いし、聞きたくなければ立ち去れば良い。その頃は読書が団欒であり、会話だったんじゃないかな」

「そうか、確かに音読はコミュニケーションですね。でも、それとこの『ロッキーマホラーショー』をコスプレで馬鹿騒ぎしながら見るようなイベントと、どんな関係があるんですか？」

「うちに限らず、図書館内は基本黙読だろ。都会の雑踏のように人はたくさんいるけど、みんな孤独みたいな。たまには図書館で会話も良いかなと思つて企画したんだけど、ちよつと盛り上がりすぎたかな」

「ちよつとじゃないと思いますけど」

「まあいいから中に入ろう。見ていただけじゃ面白くない」

誘われるままに、恵介は三の丸館長に続いて中に入った。廊下で聞いていても充分うるさかったが、ドアが開くとそれ以上の大音量が飛びこんできて耳から血が出そうだ。たったガラス

一枚でもこれだけ防音になっていたんだとちよつと感心した。ま、これだけうるさければ防音の意味もないけど。

これでは耳元で絶叫しても何も聞こえないだろうなど恵介は思った。すると、三の丸さんが肩を叩いて右手でサインを出した。

指手話だ。指手話は普通のジェスチャーゲームのような手話とは違って、手の指の形でアルファベットの二十六文字を表すハンドサインみたいなものだ。伝達に少し時間が掛かるが、覚えることは普通の手話より少なく済む。恵介は子どもの頃、夏休みにスペインに家族旅行をしたときに、現地の健常者のスペイン人同士が、喧噪の町中で道の向こう側の友人と指手話で会話しているのを見て興味を持って、スペイン語の指手話の本を買ってもらって、日本に戻ってから五十音の手話も覚えたのだ。でも、なんで三の丸さんが知っているのだろうか？

「ケイスケ。スゴイダロ。コンナニモリアガッテ」「ヨク、トナリノホイクエンカラ、クジヨウガキマセンネ」

「キヨウハ、ホイクエンノコドモタチモ、ホボサンモミンナ、コッチニサンカシテイル。ニチヨウビナノデ、カイシャハヤスミ」

そうか、確信犯だったのか、と恵介は思った。三の丸さん、やるときは思い切りが良いから。

「ホンヲ、オンドクスルノハ、ワカルケド。ギターヒイテルノハ、イインデスカ？」

「サイショハ、コトワロウトシタンダケド、『ゾ

ウシヨニ、バンドスコアガアルノデ、ソレヲエンソウスルノハ、オンドクトオナジジャンイデスカ』トイワレテ、トシヨカンニアル、ガクフモミセラレテ、ゲキチン」

「ナルホド、トイウコトハ、フルートトカリコーダーノフメンモアルンデスネ」

「ソウナンダヨ」

「アノ、ジドウシヨコーナーデオオゼイノコドモたちガワメイテイルノハ？」

「アア、アノコタチサツキカラ、イチジカンイジヨウ『ジュゲム』ヲクリカエシゼツキヨウシテイランダ。『ジュゲム』モエホンヤ、ヨミモノデモ、ゾウシヨシテイイルカラ」

「アツチニイル、ケサヲキタオボウサンハ？」

「アレハ、ダイハンニヤキヨウヨンデイルンダ、マサカトオモツタケド、ゾウシヨシテイタ。カシダシキンシナノデ、ヘイカデホコリヲカブツテイタンダケド、ナンデゾウシヨシテイイルノヲシッテイイルノカネ？」

「トシヨカンテ、ホントウニナンデモアルンデスネ」

「ワタシモオドロイテイイル。タメニナルホン、ヤクニタツホン、ベンリナホンナド、ホントウニナイモノガナイカンジ」

「ボクシングノグローブツケテ、ボクサーミタイナカッコウデ、スパーリングシテイイルノハ？」

「シノボクシングダヨ。タイケツホウシキノシノロウドクナンダ。フツウボクサーノカッコマデシナンダケド、トシヨカンデキルトシッテ、モリアガッテコスプレニナツテシマッタ」

「スゴイデスネ」

「シヨカノアイダニ、シャガンデホンヲヨンデイル、オンナノコガイマスネ」

「アレハ、アダナガ『チコチャン』トイウ、カワツタコデ、バクオンノナカデ、ワザトチイサナコエデオンドクシテルンダ」

「カワツタコデスネ。サンノマルサン、ユビシユワダトカツタルインデ、ソトデハナシマセンカ？」

「ソウダネ、ジムシツニイコウ」

事務室に入って、ドアを閉めたら嘘のように静かになった。でも、耳には爆音の残響が残っていて、耳鳴りがジンジンする。しばらくは口でしゃべっても聞こえない。そこで二人は、インスタントコーヒーを飲んで一息ついた。

「ああ、少し聞こえるようになった。すごかったですね。イベントは成功したんですか？」

「うーん、これだけ人が集まったからね。初めて来館した人もたくさんいるし、その人たちが『爆音』ではない普通の日にも来館してくれたらしいんだけど」

「入口の看板に『第一回』と書いてあったんですけど、二回目はいつやるんですか？」

「まだ、具体的には決めていない。少なくとも今期はもう予算がない。やるとしても来期以降だな。出来るとすれば」

「じゃ、あの『第一回』は景気づけ？」

「そう思って間違いはない。見ての通り聞いての如く、次回開催には解決しなければならぬ問題が山積みだけど」

「確かにそうですね。いくらイベントと言って

もいつもの図書館とは極端に変わってしまったし」

「そうだね、いつもは静かな図書館で爆音だからね。でも最近館内を見ていると二、三割の人がイヤインタイプのヘッドフォンを付けて何かを聞いている。若い人ばかりじゃない。年配の人もいる。どうも静けさの中では本を読めない人もいるみたいだ」

「そうですね、さっき言われた『群衆の中の孤独』そのものですね。個人的にはアクリルパネルで仕切られて、ヘッドフォンで何か聞きながら勉強や読書をしている人よりも、読み聞かせで、肉声を聞いて笑ったり、しゃべったりしている子供たちの方が見ていて楽しいです」

「私が子どもの頃の図書館は、絵本や児童書は蔵書されていたけれど、子どもたちにとって図書館でくつろいで本を読む場所ではなかった。親と一緒に行って、隅っこの児童書コーナーで本を選んだら、逃げ出すように図書館を出て、家に帰らないといけない。本を読むのは家に帰ってからで、図書館で読むことが出来なかった」

「そうですね、僕が子どもの頃は子どもに対する配慮も進んで、何より驚いたのは席で飲み物が飲めるようになったことですね。ほんの十年もしない前なのに、そんなことは出来なかった」

「この間、『お城の見えるテラス』でコンビニ弁当を食べている人がいて、さすがにそれはダメですと注意したけれど」

「でも、料理の本のレシピを見て、実際にその

料理を作れるキッチンスタジオとかがあったら楽しいだろうなあ。作った料理で子ども食堂とか開いて」

「良いアイデアだね。他にも日曜大工のワークショップとかも出来る」

「昔の図書館のイメージって、時代劇に出てくる村はずれにあるお寺みたいで、なんか世捨て人か、悪巧みをする人びとが密談したり……」

「そうだね、でも最近の図書館は明るくて広くて、本を読まなくても入ってみたくなる建物が多くなったね。だからこそ、初めて入った人がまた来るような企画、図書館に縁のない人が一度行ってみようかなと思うような企画を用意しなくちゃね」

二人が図書館の未来について話をしていると、閲覧室の音がいつそう騒がしくなってきた。それまででんでんばらばらだった騒音が、うるさいけれどなんだか一つにまとまって聞き取りやすくなってきたようだ。一定のリズムが刻まれている。

事務室のドアをみると、外の音のリズムに合わせて、ドアが波打っている。今にも音圧でドアが内側に開いてしまいそうだ。

「寿限無、寿限無、五劫の擦り切れ……」

これは、さつき児童コーナーで子どもたちが繰り返していた、落語の寿限無の言い立てだ。ツボにはまったときの子どもの集中力と寿限無のパワーは無敵だ。

波打つドアの振幅はだんだん強くなってきて、そして遂には、音圧がドアを打ち負かして、ド

アは内側にふつとんだ。それと同時に種々雑多な大勢の老若男女が事務室に飛びこんで来た。いや、そうではない。閲覧室が超満員になって、そこに全員が唱える寿限無とそれを囃し立てるいろんな楽器の音が混ざった音圧に吹き飛ばされて、人口密度が低い事務室に飛びこんで来たんだ。

グローブを付けたボクサーが、袈裟を着たお坊さんが、「ザ。フー。の。ピート。タウンゼント」というか、モントレーポップフェスティバルのジミ・ヘンドリクスと言うか、楽器を大事にしな一系のギターリストがネックがへし折れたギターと一緒に飛びこんで来た。

恵介たちが事務室にいる間に、コントラバスまで持ち込んだ人がいる。ハーレー・ダビッドソンのローライダーに跨がったヘルズエンジェル風の大男まで風に吹かれて、いや音圧に飛ばされ飛びこんで来た。もう何が何だか分からない。確かに図書館には何でもあるし、出来るだけ多くのいろんな人に来館してほしいけれど、これはちよつと激しすぎる。

力、カオスだ！

ある家族の肖像

比良岡美紀

1

いつも静かな図書館が、その日はちがった。ざわざわしていた。それも不穏なざわざわだった。みんなが何かを気にしている。

図書館に来る人たちは用事があってやってくる。調べものをしたり、新聞を読んだり、借りたい本があるかを確認したり。自分の用事をしている。経過が気になってしまふほどの何か、言ってみれば「事件」が起きていたのだ。菜々美は図書館に入ってすぐ、あれ、と思っ

た。不穏なざわざわが充満していた。何が起きているのだろう。見回すと、みんながカウンターを気にしている。貸出カウンターと返却カウンターがあり、少し離れたところに相談カウンターがある。どんな本を探せばいいか分からないときに相談できるところだ。異変があるのは貸出カウンターだった。

貸出業務担当の職員が、真つ青な表情で何度も頭を下げている。相手は男性……？ そのとき、「班長さんが呼んでるよ！」と大きな声がこぼれました。

男性がハツとして振り返ると、似たような年ごろの女性が何かを伝える。男性は笑顔になり、何度も嬉しそうにうなずいた。そして機嫌良さそうに、女性に腕を支えられながら図書館を

出ていった。

菜々美は唾然として、でも何があったか知りたくて貸出カウンターへ走り、職員に声を掛けた。

「舞依ちゃん」

「菜々美さん？ えっ、今日休みだったんじゃない？」

「何があったの？ ずいぶん頭下げてるみたいだったけど」

「見られちゃいましたか……」

休憩入ります、と叫んで舞依はカウンターを出た。

「コンビニのイーティンでいいですか？」
菜々美はうなずいた。

座席を確保して腰を下ろすと、食事もそこそこに舞依は話し始めた。

「……なんか、私にもよくわからないんです。言ってることが聞こえづらくて、聞き返したら怒鳴られて謝罪を要求されました。だから何が問題なのか分からないまま、すみませんでしたって言うんですけど、謝り方が気に入らないって言われて……」

菜々美は衝撃を受けた。そんなの、ただのクレーマーじゃない？ よっぽどそう言おうと思

ったが、言ったところで何にもならない。「そういえば、あとから女の人が出来たじゃない？ 班長さんが何とかかって言ってるように聞こえたけど……」

「ああ、班長さんが呼んでる、だったかな？ そんな感じのことでしたね」

「どういうこと？」

「さあ……」

舞依は首をかしげる。

「でもあの人のおかげで助かったので、本当に有難かったです。足向けて寝られませんね」
そう言って笑った。

2

郁美はイライラしていた。運転中は冷静でなくてはいけないと分かっていたても、思い出すとイライラがよみがえる。赤信号で停車して、ようやくひと息ついた。

「お父さんたら、いったい何考えてるの……」

叔母から連絡をもらうまで、父が施設を抜け出したことを知らなかった。図書館で職員さんに迷惑をかけたと知って血の気が引いた。これでもう何度目だろう。いつも図書館だ。施設から離れているし、家からも遠い。父がなぜ図書館にこだわるのか、見当もつかなかった。

施設には叔母が送り届けてくれたけれど、郁美は半休を取って駆けつけ、頭を下げて回った。職員はみな、大丈夫ですよ、大事なくてよかったです、と口では言いながら、その顔には迷惑千万と書いてある。こんなことが続くなら退所してもらわないと——。いつかそう言われるのだらうと思いつつ、その日が来るのを少しでも遅らせようと、心を込めて謝罪したのだった。

運転席の窓を叩く音がして顔を上げると、警察官がのぞき込んでいる。あわてて窓を開ける、

と、「大丈夫ですか？ 体調が悪いようでしたら——」

郁美が周囲を見回すと、後ろに長い列ができている。信号は青。またやってしまった……。
「大丈夫です！ すみません！」と叫んで思い切りアクセルを踏んだ。

その夜、郁美は久しぶりに単身赴任中の夫と話した。タブレット越しである。夫は珍しく晩酌しているようだ。こっちは晩酌なんかする気分じゃないのにも思いつながら、父親のことを相談した。

「今回が初めてじゃないの。毎回図書館に行ってるのよ。認知症になる前、足繁く通ってたわけでもないのに。どうということなのか、さっぱり分からない」
夫は顔を赤らめながら言った。

「でも他のところに行かないなら、あちこち探し回らなくていいじゃないか」
「それは、そうだけ……」

そういうことじゃない、と思ったけれど、何と言えど伝えるのか分からない。考えている間に夫は話題を変えた。

「そういうええ、和馬はどうなんだ」

「どうって？」

「学校を休みがちだとこの前聞いたけど、その後——」

「変わりなしよ。学校には行ってない」

「大丈夫なのか」

「何が」

「だからその、進級とか高校進学とか、支障が出るんじゃないのか」

頭にカツと血がのぼる。——私の苦勞も知らないで！

「知らないわよ。明日早いから切るね」

翌朝、和馬が起きてこなかった。学校へ行く行かないに関わらず朝食は一緒に摂っている。郁美は心配になり、和馬の部屋のドアをノックした。

「開いてるよ、入って」

ドアを開けると、和馬はスウェット上下の部屋着に着替え、ベッドに腰掛けていた。中へ入り、和馬の隣に腰を下ろす。

「体調悪いの？」

和馬は首を振る。じゃあなぜ？ そう思う郁美に和馬は言った。

「体調はいいけど、やりたいことがあるんだ。学校には行かない」

郁美をまっすぐに見る。

「おじいちゃんが言ってたっていう班長さんのことが気になって、叔母さんに電話したんだ。今日話をしてくれるっていうから、叔母さんのところに行く。行ってもいいよね？」

郁美は衝撃を受けた。昨晚、夫の和史と話したことを全部聞いていたらしい。

「そんな、和馬は気にしなくていいのよ……」

「気にしてるんじゃないかって気になるんだよ。おじいちゃん、なんでそんなこと言うんだらうって。ねえいいでしょ？」

郁美は困惑した。和馬がなぜ突然そんなことを言い出すのかという戸惑いと、班長さん云々がそんなに重要なのだろうかという疑問と、その他いろいろな感情が混ざり合い、どうすべきかわからなくなっていた。

「お願い。おじいちゃんの件が気になったままじゃ勉強も手につかないし、学校だって行く気になれないんだ」

郁美はじつと和馬を見た。

「おじいちゃんの件が片づいたら、学校へ行けるようになるっていうこと？」

和馬は一瞬視線をそらし、もう一度郁美を見て言った。

「たぶん……。何がどうなったら片づくのかわからないけど、でも、この件に答えが出たら学校に行く」

力強く断言する和馬に目頭が熱くなる。この子だってもがいているんだ……。

「わかった。担任の山崎先生に連絡しておくからね」

「ありがとう」

ホッとしたように和馬が笑った。

3

あの奇妙な「班長さん」事件から一週間が経過していた。菜々美は午前中半休を取り、昼食を済ませて出勤した。近くの大学や企業はこれから昼休みだ。返却や貸出が増えると予想される。少しでも同僚の負担を減らしたかった。「菜々美さん——よかった」

更衣室を出たところで舞依が話しかけてきた。菜々美を見つけて明らかにホッとしている。

「どうしたの。何かあった？」

舞依は声をひそめ、来てるんです、と言った。

「来てるって、誰が？」

「だから、あの人です。『班長さん』の——」

菜々美も声をひそめる。

「本当に？」

舞依は何度もうなずいた。そして菜々美を見たまま、カウンターを指さす。菜々美は緊張し、思わずごくりとつばを飲み込んだ。

深呼吸をしてカウンターの内側をのぞき込む。応対する職員の後ろ姿が見えた。一週間前の舞依のように、頭を下げているのではと危惧したが、顔を上げたまま話している。様子をもっとよく見ようと、事務作業スペースに入る。

配布チラシや館内用のポスターが無雑作に置かれていた。館内ではお静かに、などお願いが書かれたポスターは適宜張り替えをしている。もうそんな時期かと思いつながら、さり気なく貸出カウンターのうかがった。

男性には付き添い者が二人いた。一人は先週「班長さん」云々を叫んだ女性。もう一人は中学生くらいの男の子で、男性を心配そうに見ている。お孫さんだろうか。

二人は男性を中心にして、両側から支えるように立っていた。男性は終始にこやかで、職員に笑顔で「ありがとう」と頭を下げた。それから付き添いの二人と一緒に出口へ向かう。借り

た本は中学生の男の子が持っているようだ。

菜々美は気になって、三人の後を追うように事務作業スペースを出た。その時、女性が声をかけてきた。見ると目に涙を浮かべている。一瞬悩んだが、図書館職員として、困りごとを抱える人を放置してはおけない。

「父がいつもご迷惑をおかけしていたようで、申し訳ありませんでした」

あ、と菜々美は思った。

「もしかして、先ほど本を借りられた方の、ご家族の方、ですか」

「はい、娘です。施設を抜け出してはこの図書館へ来ていたそうで、何度もお手数をおかけしました。本当に申し訳ありません」

「ああ、いえ、仕事ですから、気になさらないでください」

「ありがとうございます。そう言っていただけると少し気持ちが楽になります。中学生の息子が今後は一緒に来ることになると思います。どうぞよろしくお願いします」

やっぱりお孫さんだったんだ、と菜々美は思った。

「こちらこそ、図書館をご利用くださってありがとうございます。お役に立てていたらいいのですが」

「ええ、もちろん。息子も最近よく調べものお世話になっていたようです。この辺りの町並みは息子も気に入って、これからも来たいと言っていました。それに、父と一緒に散歩するのも楽しいって」

「散歩ですか」

「ええ。息子が調べたところでは、昔このあたりに小学校があって、子どもの頃の父が通っていたようなんです。だからこのあたりを歩くと当時のことを思い出すらしく、その話を聞くのが楽しいって……」

女性 はハンカチを取り出し、目のあたりを拭いた。

「すみません、お見苦しいところを……」

失礼します、と女性は頭を下げ、図書館を出ていった。菜々美も頭を下げ、女性を見送る。事務作業スペースへ戻ろうと踵を返したところで、舞依が話しかけてきた。

「息子さん、中学生って言ってましたよね？」

「あ、うん。どうかした？」

「何度か書庫から本を出した覚えがあります。館内閲覧のみと決められている本です。ずいぶん熱心に調べてるなって思ったので、記憶に残ってたんです」

「そう……」

「なんかいいですね。図書館が家族をひとつにする、みたいな感じで」

「利用者さんの事情に立ち入らないのよ」

「分かってます。でもなんか励みになるっていいか……。図書館で働いててよかったなって思いました」

舞依の笑顔で菜々美も温かい気持ちになる。図書館で働いていてよかったと思うのは自分も同じ。そう言ってもよかったのだが、今は勤務中である。

「ほら、利用者さんお待たせしてる。私も手伝うから——」

「はいっ！」

菜々美は舞依とともにカウンターへ向かった。

4

祖父と図書館を訪れた翌週、和馬は久しぶりに登校した。クラスで発表を行うためだ。学校へ行かずにいる間、いろいろなことを調べた。その成果を発表するのが今日だった。

二年前、祖父が認知症になり、家族のことが分からなくなつた。和馬はおじいちゃん子だね、と母に言われるほど祖父のことが好きだったし、ともに過ごした時間も長かった。だからあの日、忘れられないほどショックを受けたのだ——。

あの日、学校から帰ると、祖父が母に馬乗りになり、暴力を振るっていた。驚いて止めに入ると、祖父は恐ろしい形相で叫んだ。

「お前も一緒に死なせてやるぞ！」

死なせる、って……。

意味が分からなかった。じいちゃんが、俺たちを死なせようとしてる？ 実の娘である母さんも？

震えが止まらなくなった。最初は驚き、呆気に取られたけれど、次第に恐ろしさがこみ上げてきた。

嘘だ、じいちゃんがそんな。次の瞬間、いや、と首を振る。自分は今しがた、あの恐ろしい顔

を見たではないか。本気でないとはい切れぬ。しかし次の瞬間には、そんなことはあり得ないと否定する。次第に混乱して何も分からなくなり、自分の部屋に閉じこもった。

気配から、単身赴任中の父が駆けつけたことが分かった。それから少しして、母が部屋のドアをノックして言った。

「ごめんね和馬、もう大丈夫だから」

和馬は叫んだ。心の中で、大きな声を出して。

——何が大丈夫なんだよ！ 全然大丈夫じゃないだろう！

翌日から和馬は学校へ行けなくなった。

和馬は教壇に立って、教室の中を見回す。参観日ではないけれど、保護者の人たちが見守っていた。父と母もいる。母は今にも泣きそうである。和馬は苦笑した。母の隣にいる祖父も、叔母と一緒にニコニコしながら和馬を見ている。紛れもなく、大好きな優しい祖父だった。祖父に語りかけるように、和馬は話しはじめた。

「二年前、祖父が認知症だと分かり、施設に入りました。今でも施設にいます。時々抜け出しには図書館へ行っていたようです。職員の方にはご迷惑をおかけしてしまいました。なぜ図書館へ行くのか理由が分からず、みんな困っていました。でも分かったんです。この町の歴史と関係があることなので、皆さんにも報告したいと思います」

祖父は変わらぬニコニコしている。その笑顔に勇気づけられ、パソコンを操作して地図を表

示させた。

「これは僕たちが住んでいる町の、三年前の様子です。学校はここで、図書館はここにありません」

ポインターを使って図書館を指し示したまま、パソコンを操作する。

「太平洋戦争中、図書館があったところは小学校でした」

地図が切り替わり、どよめきが上がった。和馬は言葉を続けた。

「認知症という何も分からなくなるように言われることが多いですが、いろいろ調べて、失われたい記憶もあると知りました。祖父の場合は、子どもの頃に過ごした小学校の記憶が残っていたようです。それで、施設に入ったあと、小学校に行こうとして抜け出していたのではないかと主治医の先生が教えてくれました」

再びパソコンを操作する。

「祖父が過ごした小学校は、元々あった学校が焼けて、そのあと再建された小さな小屋のようなどころでした」

地図が切り替わり、小学校が小さくなった。「たくさんの子どもたちが疎開して——あつ、疎開というのは、空襲を逃れるため田舎にいる親戚の家へ行くことです」

コホン、と咳払いをする。

「たくさんの子どもたちが疎開して、子ども数がすごく少なくなっていたので、学校はこういう、仮設の小屋になったと書いてありました。この本です。お配りした紙にタイトルが書いて

あります」

和馬は紙を掲げた。

「図書館に行けば、この本を閲覧することができます。町の歴史に興味がある人は、ぜひ行ってみてください」

もう一度、和馬は咳払いをした。

「小学校のことを知ったのは、祖父が図書館へ行って、職員の方に迷惑をかけたことがきっかけでした」

ここで和馬は少し間をあけた。

「でも僕は、原因が分かかってホッとしました。叔母から話を聞いて分かったのですが、祖父は班長さんが好きで、班長さんの話をするとうごく嬉しそうになるんです。班長さんはたぶん、この小さな小学校に祖父が通っていたとき一緒にいた人、じゃないかと思えます。僕は——」

和馬の目から涙がこぼれ、それを学生服の袖で拭った。

「僕は、祖父がどうかなくなってしまったんじゃないかと心配で、心配でたまりませんでした。でも祖父は……、少なくとも班長さんのことを話したり考えたりしているときは、僕が知っている優しい祖父です。僕は、祖父がいつでも優しくいられるように、できるだけ一緒に過ごそうと思います。そのせいでもしかしたら高校に行けなくなるかもしれないけど……」

再び涙を袖で拭う。

「今の僕には、高校に行くよりも祖父と一緒にいることが大事なんです。たくさん心配かけて、それだけじゃなく、期待に応えることもできな

くてすみません。でも本当に感謝しています。ありがとうございます」

頭を下げる和馬を見て、郁美は涙が止まらなかった。夫の和之も涙ぐんでいる。郁美の脳裏に、父と和馬が楽しそうに散歩していた様子がよみがえる。

これからも一緒に図書館へ行って、本を借りて、散歩して、その繰り返しなのだろう。少しでも父が、そして和馬が、幸せに過ごしてほしい。そのためなら何でもしよう。

にこやかに質問に答える和馬を見ながら、郁美は改めてそう決意したのだった。

5 エピローグ

郁美の叔母である真左子は、兄、真太郎の様子を見ながら和馬の話を聞いていた。隣に座った兄は優しく微笑みながらうなずいている。ときどき首をかしげるので、班長さんの弟さんよと囁く。そうすると、真太郎はまた微笑み、立派になったね、班長さんも嬉しいだろうね、と言ってしまうのだった。

班長さん、とは兄が通う小学校で子どもたちをまとめていた人物だ。年は兄たちより上だったと思う。もんぺをはいて、髪は後ろで結んでいたから年の頃は分らない。もちろん化粧などしていないから、十代にも見えたり、二十代にも見えた。戦争が終わる少し前から、戦後もしばらくの間、小学校に寝泊まりして子どもたちの世話をしていたと記憶している。兄は、い

や兄だけではない。自分も含め、子どもたちはみな班長さんが大好きだった。

あるとき、班長さんの姿が見えないことがあって、登校した兄たちは必死に探した。裏山の手前に落ち葉が小山のようになっていて、兄の友達は大変だと思ったそう。まだそんなに葉が散っていないのに、こんもりしているのはおかしいと。

さっそくみんなで落ち葉をかき分けた。もうすぐ地面が見えるかというとき、兄が叫んだ。

「班長さんだ！」

そんな馬鹿な、と誰もが思った。でも最後まで落ち葉を取り除いてしまうと、たしかに班長さんが横たわっていたのだ。みんな口々に叫びながら、班長さんの体をさすったり、肩を叩いたりした。

ときどき学校に来ていた医者がやってきて、班長さんの脈を診た。(そのときは分からなかった。あとから分かったのだ)

そして首を横に振り、死んでる、と言った。兄は医者に食ってかかった。

「嘘だ！ 班長さんが俺たちを残して死ぬわけない！ もっとちゃんと診てくれよ！」

「何度診たって同じだ！ 死んでるんだよ！」

集まった子どもたちは泣き出した。兄も泣きながら班長さんの肩にすがり、いやだ、いやだよ、と叫んだ。大人たちが大勢やってきて兄を班長さんから引き離し、亡きがらはどこかへ運ばれていった。

その様子を見ながら、ひそひそ話をしている

男たちがいた、とあとから兄に聞かされた。班長さんが亡くなって十年以上も経った頃だ。明らかに様子がおかしかったので後をつけ、班長さんに乱暴して殺したと言っているのを聞いたそう。頭に血が上った兄は後先考えずに飛び込んだが、返り討ちにあつたと言っていた。

なぜ今頃？ と尋ねると、なんでもだろうな、と兄は笑い、なんか話したいと思っただよと言った。班長さんが亡くなってずっとふさぎ込んでいた兄の、十数年ぶりの笑顔だった。

兄が郁美に暴力を振るつたと和馬から聞き、あのとときの記憶がよみがえったのだと思った。優しかった班長さんの記憶と、班長さんを死なせた暴力の記憶が、認知症により長年覆い被さっていた蓋——抑制する力——が取り除かれたことで、一気によみがえったのだと。

和馬には何も話していない。できれば話さないまま兄を見送りたい。

「班長さんの弟さんよ」、と真左子は再び兄に囁いた。

秘密の303

鳴原あきら

1.

いつも静かな図書館が、今日はちがった。

三階のホールにあがる階段に、女の子がびつしり並んでいる。みんな行儀よく並んでいるが、ざわめきは絶えない。

何か催し物があったつけ、と思いながら、乾悠美は二階の図書室に入った。

入り口近くで、ボソボソと話している子たちがいる。

「ハヤマアオトが来てるらしいよ」

「まさか上で歌うの？」

「詩の朗読会だって。ファンクラブで申し込んだ整理券もってる子しか、ホールには入れないって」

「こんなに大勢、上の階に入りきれる？」

「二回回しだって。あと整理券もってない子も、今朝、図書館で別に立ち見の整理券配って、三階のホールの外に、ギリギリ詰め込むみたい。もう寒いから、外には並ばせないってことみたい」

「へー、アオトって、こんなに人気あるんだ。おじさんなのに」

「声、小さくして。あの子たちに聞こえるよ」

「ごめん」

「まあ、おじさんだけど、美人だし。それに普通、こんな田舎にこないし。そんなにしょっちゅうライブも行けないでしょ」

「それもそっか。なんか、ここでも聞こえてきそうだけど」

「ドアを閉め切ったらさすがに聞こえないんじゃない？ あとやっぱりみんな、顔を見たいと思うよ」

「ここで待ってたら見られるかな」

「別の入り口から入るんじゃないの」

「だろうね」

悠美は借りた本を返すと、返却棚に面白そうな本がないか探した。何冊か抜いて読書用の席に座る。しかし今日は、ページをめくっても頭に入ってこない。

《希望ちゃんも、あの中にいるかな》

早馬蒼人は、ペイルホースというロックバンドのボーカルだ。結成から十五年が過ぎて、昔ほどの人気はないが、今でも美貌は衰えず、長い髪をなびかせて切なげに歌うので、若いファンも多い。最近は一人で、詩人としても活動している。詩集も出しているから、それを朗読して来たのだろう。一時期、ここ大田原に住んでいたことがあるらしいから、その縁で呼ばれたのかもかもしれない。

悠美のいとこの加納希望も、早馬蒼人の大ファンだ。小学六年生の時にハマって、中学でファンクラブに入り、一人でライブに行こうとして、母親に怒られていた。「中学生が夜、一人でいくものじゃありません」それはまあ。「一年に一回しかライブないんだよ。一人がだめなら悠美ちゃんに行く」わあ、まきこまないで。嫌いじゃないけどよく知らないのに。「悠美ちゃんもまだ高校生よ。私と一緒にいいなら、許可しなくもないけど」それでもいい。行きたい。「希望がそんなに面白いとは知らなかった。チケット代は払えるの」「払う。なんならお母さんのぶんも。コンビニで払えるから」「いいわ。今回は私が払うから。それにしてもアイドルじやなくて、終末思想のおっさんバンドを好きになるとはね」「ペイルホースは怖い歌ばかり歌ってるわけじゃないよ。切ない歌とかいろいろあるんだから」

ペイルホース——青ぎめた馬、というのは、ヨハネの黙示録に出てくる死の象徴らしいが、普通にボーカルの名前を英語にしただけらしい。バンドでは「アオト」とカタカナ名にしているが、早馬蒼人は本名だ。親の願いがよくわからない。三階で歓声が上がった。アオトが登場したようだ。

《終わったら出てくるかな》

なんの根拠もなく、希望がいる気がしていた。二回目しなら二度目の朗読会かもしれないし、

ファンクラブの抽選にもれて諦めているかもしれないが、図書館でも整理券を配ったなら、来ている可能性はある。

《いたら……話す？ 話さない方がいい？ それとも、もう知ってる？》

普通のいとこ同士がどれぐらい仲がいいかわからないが、悠美と希望の家は近所で、小学校の頃は同じ学校だったので、昔はけっこう行き来があった。しかし三歳の年齢差があるので、悠美が高校にあがる頃には、月に一度会うか合わないかになった。それも用事のある時だけ。

中学に上がってすぐ、希望がこんなことを言い出した。

「悠美ちゃん、やっぱり美容師になるつもり？」

「そうね」

腕一本で食べられる仕事につきたかった。自分のやりたい事の中で一番早く自立できるのは、美容師だと思っていたから、昔からそう言っていた。

「だったら、私の髪で練習しない？」

「え？」

「ファンクラブの会費以外にも、音源を買ったり本を買ったりしてるから、お小遣い、ちょっと足りなくて」

「カット代を回したいってこと？」

「そういうこと。悠美ちゃんはいつもロングだから、ショートは切りたくない？」

「そんなことないよ」

「私、くせっ毛だから、ちょっとでも長くすると、外はねしちゃうんだ。だからうまく伸ばせなくて、一ヶ月とか一ヶ月半で切らないとだめでも、今行ってる美容室、おばあちゃん先生だから、安いけど、可愛く切ってくれないんだよ。校則の範囲内で可愛くしたいんだけど、悠美ちゃんには難しい？」

そう煽られては断りにくい。

「私が失敗したらどうするの？」

「校則の範囲内で失敗とかある？刈り上げとかにしないでしょ？普通の美容室だって失敗はあるし。それに私、悠美ちゃんになら、何をされても平気だよ」

そこまで信頼されても困るが、まあいいか。

「あと、もし切ってくれるなら、もう一つお願い「なに？」

「うちの親には言わないで。できれば誰にも」

「家で切るのに完全に内緒にはできないと思うけど、自分からは言わないようにするよ」

「ありがとう。悠美ちゃんが約束してくれるなら安心」

「なんの約束にもなっていないけどね。まあ明る

いうちは、親も兄貴も帰ってこないから大丈夫かな」

「なんかお礼しなきゃね」

「別にいいよ、練習で切るなら。身内なんだし」

「嬉しい。よろしくね！」

そんなわけで、定期的に希望の髪を切っていたのだが、ふと気づくとここ三ヶ月切ほど会っていない。伸ばすことにしたのだろうか。

悠美はスマホを取り出し、希望にメッセージを送った。

「図書館にいる？」

「どうして」

「アオトの朗読会やってるから」

「そうらしいね」

返事は早いけど、反応が変だ。

「抽選外れちゃったの」

「もともと申し込んでない。ファンクラブもやめたし」

「そうなんだ」

「悠美ちゃんは図書館にいるの」

「うん。たぶん、もうしばらくは」

「朗読会のこと、知らせてくれてありがとう。忙しいからまたね」

「どういうこと？ 何かあった？」

早馬蒼人の変な噂を聞いた記憶はない。最近、子どもがうまれて、夫婦仲も悪くないんじゃないのかなかったっけ？

希望の髪を切るとき、悠美はアプリでFMラジオを流していた。

動画サイトだと好き嫌いもあるだろうし、無難なトーク番組と音楽の方が美容室っぽいかなと思った。

でも、厭なニュースが流れてくることもある。

結婚したアイドルがファンにストーカーされて、怪我をさせられたとか。

「私、よくわからないんだよね」

無言で切られていた希望が、ぼそりと呟いた。

「自分の好きなアイドルとかアーティストが結婚すると、裏切り者とかいって怒り狂う人たちがいるけど、あれ、なんなのかなって」

「希望ちゃんはどう思うの？」

「ファンだったら、自分の推しが幸せになったら、祝福するよね」

「普通はそうだろうね」

「自分が結婚できると思ってたのかな。でも、恋人でもないのに、裏切ったって言われてもさ。恋人になりたいならストーカーはだめでしょ。」

努力の方法が間違ってる。近づきたいなら、どうしたらいいか考えなきゃ。少なくとも、嫌われることをしちやだめだよ」

「その通りだけど、努力したら必ず、好きな人につきあえるわけじゃないよ」

「そばにいることぐらいはできるんじゃないの？」

「それは、ね……はい、鏡。こんな感じでどう？」

「うん。ありがとう。そんな短くしてないのに、重くならないし、はねないし、ブラシで一瞬でまとまるし、悠美ちゃんのカット、最高」

「ほめても何も出ないよ」

「いいよ出さなくて。そういえばおやつもってきたんだ、食べる？」

「希望ちゃんの手作りはちよっと」

「今日は違うよ。月のうさぎ。悠美ちゃん好きでしょ」

「うん。じゃ、片づけたらお茶にするね」

「ありがとう！」

……あの話をした頃、もう蒼人は結婚してた気がする。むしろ遅すぎるぐらいだったし、ファンじゃなくなっただけのは、別の理由だと思うんだけど……。

2.

あれ、本になにか挟まってる。

加納希望がいとこの家に遊びに行くと、早馬蒼人の第一詩集が机の上にあった。図書館のシールがついているので、借りてきた本だろう。興味を持ってくれたんだ、と思った。今は希望のためにキッチンでお茶をいれている。一瞬迷ったが、しおり代わりにしては大きめの紙がはみ出していたので、思わず手に取ってしまった。綺麗な字で、詩が書かれている。

魂は 己がための朋友を選ぶ――

しかる後――扉を鎖す

かの魂にとっては 畏れ多いこの世の大勢は――

既に 存在 しない――

最早動かされぬ――高貴な馬車に気づこうとも――
――待っているのに――

この卑しい門扉の前に――

揺るぎもしない――たとえ皇帝が跪こうとも――

この門の外敷に――

魂とはこういうものだ――私は溢れんばかりの
世の人々から――

ただひとり を 望もう――

しかる後――心配りの栓をかたく締めよう――
宝石へと消化する魂。

「なんだろう、これ」

「303」

「えっ」

振り向くと悠美がいた。お茶を乗せたお盆をもって。

早馬蒼人に「303」という歌がある。歌詞の中に303という数字はでてこない。本人はどうして303か説明しないし、解説している人も見たことがない。希望は「好きな歌なんだけど、謎なんだよね」と彼女に話したことがあった。でも、これって？

悠美は二人分のお茶とお菓子を低いテーブルへ置くと、

「昔、アメリカにエミリー・ディキンソンっていう詩人がいてね、彼女が書いた303っていう詩がこれ。題名っていうか、作品番号だけ。モーツァルトの曲についてるケツヘル番号みたい」

「わぎわぎ手書きでうつしたの」

「自分で訳したから」

「悠美ちゃんってそんなに英語できるの」

「趣味で詩集ぐらいは読むよ。で、これが早馬

蒼人の303だよね」

いわない

誰にもいわない

王族が頭を下げようと

神様が命じようと

いわない

絶対に 誰にも

たとえ貴女がすべて知っていても

いわない

百年後でも いわない

このくちびるに禁じている

殺されても 絶対に

悠美は詩集のページと自分の書いた紙を見比べる。

「やっぱりだいぶ違うね。これとは関係ないかな。むしろこの詩のタイトルは『いわない』だよね」

詩集をめくりながら呟く。

「この303もそうだけど、早馬蒼人って片思いの歌でも、けんか売ってるみたいで面白いね。アオトなんて顔だけでしょ、とかいう人は、ちやんと聴いたことがないんだね。歌もうまいのに」

悠美ちゃんはわかってる。303が片思いの歌だって。

つまり、私の気持ちも、見抜かれてる——？

「悠美ちゃんて本当に、大学に行くつもり、ないの」

彼女の兄は県内の国立大学に行っている。兄と同じ高校に行っていて、成績も悪くないのに進学しないのか。こんなに物知りで、英語もさらっとできるのに。

「行かない。高校出たら専門学校って決めてるから。東京の学校でも通えるしね」

「そうなんだ」

通えるし、という言葉に安堵していると、悠美のスマホの着信音が鳴った。

ごめんね、と言いながら部屋を出て行く。

「はい。なに？ え、六時からの回？ 確かにみたいていったけど、今から？ いま人が来てるんだけど。今回はおごりだよ、当然」

希望はピンときた。悠美は最近、一緒に映画をみにいく友達ができたと言っていた。私も行きたい、とはいえない。希望は映画館が苦手で、二時間ぐらいの長さだと、間違いなく寝てしまう。悠美はそれを知っているので誘わない。希望も、社会人の男と映画に行くという悠美に、くつついていきたくない。

まあ、悠美ちゃんは頭がいいし、つまらない

相手だってわかったら、すぐ次に行くよね。たぶんね。

電話が終わったタイミングで、希望は大きな声を出した。

「お邪魔みたいだからお茶だけ飲んで帰るね」

「ごめんね」

「気にしないで。でも、悠美ちゃんの書いたその詩、よかったらくれる？」

「いいけど、私が書いた詩じゃないからね？」

「わかってる」

希望はバッグに入れておいたノートに悠美の詩をはさんだ。

いいんだ。彼女が「ただひとり」を望もう〜という気持ちを知ってるなら、私は、それだけ――。

休みの日、希望が自分で焼いたホットケーキをつついてみると、洗濯物を干し終えた母が台所へきて、スマホを見つめたため息をついた。

「悠美ちゃんはすごいわねえ」

「今さら？」

「美容師の学校の奨学金がもらえるんですけど。学費全額免除っていうから、条件は相当厳しかったんじゃない？今は奨学金なんて名ばかりで、ヤミ金と変わらないようなものも多いのに。きょうだいそろって、優秀なのね」

「優秀でなくて悪うござんしたね」

「どこでそういう言葉づかいを覚えてくるの」

「お母さんの見てる時代劇」

「それはごめんなさいね。それにしても、学生寮も無料ですって。助かるわね」

「すみませんね本当に」

「あら、希望が大学に行けるくらいのお金は、おじいちゃんが積み立ててるから大丈夫よ。可愛い内孫が進路で困らないように」

「おじいちゃんが偉いだけの話だった」

「まあ、学生のうちは自宅から通えるところにして欲しいけどね。悠美ちゃんはともかく、希望じゃちよつと、心配だから」

「心配な娘で申し訳ない」

軽く流したが、希望は母の言葉を聞き逃してはいなかった。学生寮も無料、ということとは、高校を卒業したら家から通わないってことだ。あんなにスペックが高いのに、ことあるごとに兄さんと比べられてたもんな。家を出るには充分な理由だ。

「どうしたの、希望？ お腹でもいたいの」

「食べ過ぎたかも。いろいろお腹いっぱい」

希望は残りを冷蔵庫にしまいこんだ。

自分の気持ちもしまいこんだ。

蒼人のファンクラブもやめたし、もうタダで髪を切ってもらわなくてもいいんだ。私に内緒で、どこへでもいっちゃえばいいよ、本当に。

早馬蒼人の第一詩集は、ペイルホースの代表的な曲以外にも、切ない詩や鋭い詩がたくさんあった。買って良かったと思った。音楽と違っているさいと怒られることもないし、詩なので枕元に置いて、ちよつとだけ読んでから寝ることもできる。

第二詩集が出た時も迷わず買った。のだが。

「……なにこれ？」

信じられなかった。ふつうっぽい恋歌。ありきたりな平和を願う歌。こんなもの、わざわざ蒼人が書かなくてもいいじゃないか、という詩ばかり載っている。新曲も試聴してみたが、うすっぺらな言葉が並んでいた。

《そっか。蒼人は本当に幸せになっちゃったんだ》

好きな人と結ばれて、新しい家族ができて。自分は幸せの絶頂にいますって全世界にアピール中なんだ。それじゃ、もう、誰にも言えない片思いの歌なんて、つくる気もしないよね。もちろん幸せは悪いことじゃないけど、蒼人が歌ってきた孤独と意地は消えてしまった。これからは蒼人の歌を口ずさんでも、慰められることはないんだ。

おめでどう、蒼人。そして、きよなら。

こつちから連絡しないと、悠美ちゃんは連絡をくれなくなつた。忙しいらしい。でも、そろそろ髪を切つて欲しいな、とメッセージを入れると「いいよ。いつがいい？」って返事をくれる。それだけでいいと思つた。でも、結局私には知らせずに家を出て行くし、私がいても別の人と映画に行くし、いづれは離れなきゃいけないんだ。つていうか、もう会いたくないな。会つたら言われるんだろうし。おまえなんて、いらないつて。だって私は悠美ちゃんに望まれる、「ただひとり」の人じゃないから。

悠美ちゃんと同じ高校に行こうと思つてたけど、やめようかな。成績ギリギリだし。親とか先生になんか言われるかな。まあ、もう少し受験が近づいてからでもいいか。近所に新しいカツトハウスができたから、髪はそこで切ろう。悠美ちゃんの時間を盗むのは、もう、やめるんだ。

「図書館にいる？」

突然、メッセージが飛んできた。短く返す。

「どうして」

「いま、アオトの朗読会やってるから」

「そうらしいね」

「抽選外れちゃつたの？」

「もともと申し込んでない。ファンクラブもや

めっちゃったし」

「そうなんだ」

「悠美ちゃんは図書館にいるの」

「うん。たぶん、もうしばらくは」

「朗読会のこと、知らせてくれてありがとう。忙しいからまたね」

「そうか。悠美ちゃんは図書館にいるんだ。例によってランダムに、十冊ぐらい積んで読めるだけ読んでるか、推してる作家の本を順番に並べてるか、とにかくしばらくはいるんだろうな。もう進路も決まってるし、時間があるから。」

「じゃあ、私は？」

「勉強に手が着かないのはいいとして（よくはない）、なんかモヤモヤしたまま、残りの何ヶ月かを過ごす？」

「はつきり言われた方がよくない？」

「今から自転車で行くとして、二十分あれば着くよね？」

「会えるかどうかわからないけど。」

「またね、って言ったし、悠美ちゃんは私が行くとは思ってないはず。」

「でも悠美ちゃん、蒼人が好きなのじゃないのに、ちゃんと知らせてくれたんだよね。二番めの詩集も読んでないんだろうし。読んでたら、」

「私が好きじゃなくなった理由もすぐわかったろうし。だって、悠美ちゃんは、頭がいいから。」

「よし。驚かせることに決めた。行くぞ。」

「いつもは静かな図書館に、今日は女の子がたくさん並んでいた。二回目の朗読会を聴くつもりの子たちだ。あんな新曲でも、ぜんぜん気にしない子たち。」

「整理券は終了しましたが、フライヤーはまだ余裕があります。ご希望の方はどうぞ」

「いや要らないよ。別に蒼人の顔が好きだったわけじゃないから。男だけど、ちよつと濃いめの美人で、悠美ちゃんにうっすら似てないこともないけど。」

「希望ちゃん？」

「バックバックにパンパンに本を詰めた悠美ちゃんが出てきた。」

「うん。急に、返さないといけない本があったのを思い出して」

「そうなんだ」

「悠美ちゃんは朗読会の案内を手にしてた。」

「あのね、私……」

「希望はそれを遮った。」

「私は悠美ちゃんが家を出る話なら、もう知ってるからしなくていいよ。他になにか、いうこ」

とある？」

「ある。これみて」

渡されたフライヤーを見た。蒼人の手書き文字が印刷されている。

大田原市の皆様へ

僕の曲に303というタイトルの曲がありません。アメリカのある詩人の詩が好きでつけました。それは誰にも言わなかったのですが、大田原市のファンの方から「これですか？」とお手紙をいただいたことがあります。正解です。その人に会いたくて今日は来ました。303を好きなあなたの上に、幸せが降り注ぐよう、心から願っています。

悠美ちゃんは声を低くした。

「希望ちゃん。私、一ヶ月にいったペンぐらいは帰ってくるよ。悪いけど、千円カットのお店で切ったその髪より、私の方が可愛くできる」

ああ、そうだった。

ずっとそばにいられなくなたって。一番じゃないっていい。

そんなこと、どうでもよかった。

「知ってるよ、そんなこと」

だって、とつくに、私の上には、幸せが降り注いでた――。

夏美が試した夏への扉

櫻井由一

「あれ、本になにかはさまっている。」
初めて訪れた図書館の読書スペースの机の上、陽だまりの中にその本はありました。

それは「猫が見つめる先の扉に大きな人間の目玉が覗くSF小説」でした。
それはとどころ汚れており、お世辞にも図書館で貸し出す状態の本とは思えませんが、何か汚れに嫌悪感を感じず、どこか懐かしさを覚えます。

「両親が好きだった小説：」そう思いながら手を伸ばし読み始めました。

SF好きの両親が好きなのも頷ける：私は夢中になってページを進めます。

物語が後半に差し掛かったところで「それ」が挟まっているのに気付きました。

古い写真が一枚：よく目を凝らして見て私は言葉を失い立ち尽くすより他ありません。

「その本、気になりました？」

不意に背後から声を掛けられビクツとして振り返り向くと、「虹ヶ丘図書館司書・東条」と書かれた名札をさげた穏やかな笑顔の女性が立っていました。

私は慌てて本を机に置き直し、しどろもどろに「ええ：ああ、はい」と言うのがやっと。

写真の驚きが隠せない私をよそに、彼女は後ろを振り向いて「お探しの本、こっちにありましたー」と小声で手を振っています。

手を振られた男女が手を振り返し急ぎ足でこちらへ向かって来ました。

「あー本当だ！絶対この図書館にはある筈だと思ってたんです：ヒサちゃん！ほらあったよ!!」ヒサちゃんと呼ばれた男性は目を細めながら「この本、探してたんです：ここで出会えるなんて思わなかったなあ！」と喜びを顔にしている様子。

女性が私に気付き、窺うような顔で「もしかして、あなたもその本を？」

私は慌てて「あ、いえ私は：」と否定をするも、東条さんは私に向き直り「じゃあこの本を最初に手に取ったあなたが先に借りて、その次にこちらのお二人に：うん！そうしましょう!!」と私や二人の意思とは無関係に話を進めてしまったのです。

東条さんのその言葉を受けて男性が「じゃあ僕は返却期限の再来週借りに来ます」と少し残念そうな笑顔で答えました。

東条さんはにっこり笑い、私に「それで大丈夫ですか？」と尋ねるので「あ、はい：」と曖昧な返事をしてしまいました。

「そうと決まれば貸し出しカードを作りましょう！こちらのカウンターへどうぞ！」と、私と男女二人組は促されるままカウンターへ案内され、用意された椅子に男性と並んで座りました。渡された用紙に必要事項を書いていると、後ろで様子を窺っていた女性が小声で私に話しかけました：

「夏美さんって可愛い名前ね！」

名前を褒められた私が赤面したのは言うまでもないので、返す言葉が出ずに居ると隣からやはり小声で「春ちゃん！他人の書いてるものを盗み見るなんてデリカシーに欠けるよ！」と男性に嗜められると、春ちゃんと呼ばれた女性は「ごめんなさいね！」と言って肩をすくめました。

「じゃあ再来週宜しくお願いしますね！」ヒサちゃんと呼ばれた男性は右手を軽く上げ、春ちゃんと呼ばれた女性は「再来週、またバツタリ会えたりして：」と悪戯っぽく笑い、私はぎこちない笑顔で会釈をし、図書館の前で別れました。

二人に背を向けて歩き出した私は気付いているのです：あの二人は若い頃の両親である事を。足を止めて恐る恐る振り返ると、もう二人の姿はなく、替わりに宵の明星が私を見ていました。

川瀬久志 川瀬春子：この二人の事を話さなきゃいけないね：

二十年前の夏、私はその日両親に連れてって貰う予定だった花火大会が大雨で中止になり、すっかりスネて居たのです。

父と母は私の機嫌をとろうと「なっちゃんが大好きなオムライスを食べに行こう！」と宥めてくれたのですが、意地っ張りの私は言うことを聞かず：

やがて母は呆れて「じゃあお留守番してなさい!!」と、同居する祖母に私を預けて出掛けて行き

ました。
祖母との晩御飯：私は怒られたことよりも自分の意地っ張りが嫌になりシクシク泣き始めました。
その様子を見た祖母は私に寄り添いハンカチで流れる涙を拭きながら「父ちゃんと母ちゃんに後でごめんなさいしようね」と優しく語りかけたのです。
でも私が「ごめんなさい」を両親に伝える日は永遠にやって来ませんでした：
大雨の影響で土砂崩れが起き、両親を乗せた車が巻き込まれたのです。
二次被害を警戒しつつの救助作業：二日後、無理矢理雲を追いやり太陽が覗いた午後、両親は発見されました：両親の所持品から見つかったのは少しの金銭、そしてあのSF小説と写真：
夏祭りに連れてってもらい浴衣を着てはしゃいでる私の写真を両親どちらともなく肌身離さず持ち歩いていたのかと思うと、悲しくて堪らなくなりました。
泥で汚れた小説と私の写真：仏壇に置かれていましたが、それが目に入る度に私は辛くなり泣き出すので祖母が片付けたと記憶しています。
両親代わりに私を育ててくれた祖母は十七年前に他界し、私は父方の叔母に引き取られ今日まで生きて来ました。
翌日のお昼、私は社食でお昼をとっていました。「どうしたの？」

同僚の夕子の声で我に返りました。
「今日は朝からボクッとしてるじゃない：なんかあった？」その声のトーンは本気で私を心配してるようでした。
そりゃそうでしょう、山菜そばのゼンマイを箸でつまんだまま遠くを見て放心してるなんて：誰だって頭のネジがはずれたと思います。
ちよつと冷めたゼンマイを口に放り、咀嚼しながら「私、疲れてるのかなあ：」なんてボンヤリと考えていたところを夕子に「あんた疲れてるんじゃない？」と指摘されたもんだから咽せました。
「夕子はさ、幽霊とかそういうオカルト的なのって信じるほう？」
私がかんな質問をしたもんだからいよいよ夕子の笑顔は引き攣ります、それでも平静を保とうとカレーを口に運ぶけど：夕子、動揺して味分らないんじゃないかしら：
恐らく味覚の感じぬカレーをお冷で流し込み、一息ついてから私の目を見て話始めました：
「そう言うのって私怖いから信じたくないけど：肉親の幽霊とかなら出て来てもおかしくないかもね：」
「じゃあ：肉親だから出て来たのかな：」呟くように喋る私に夕子は「イタコさんのトコに行ってみたら？」
「夕子知ってる？イタコさんに呼ばれた霊は大抵みんなの事が心配だ、みんな仲良く暮らして欲しい」って言うのよ」

帰宅して部屋の電気を点けると、テーブルの上
に昨日借りて来たSF小説と挟まっていた写真、
叔母からの手紙がちよこたんと其処にありまし
て、私は此処にポツリと立ち尽くして本を見下
ろしているのですが、今私が見てる現実は本当
に起きてる事なのかと混乱が隠せなくなりま
す：そして挟まっていた写真の中の私は屈託の
ない笑顔で私を見つめるのです：

小さい湯船に体を沈め、故郷のことを考えてま
した。
私の生まれた北会津村はこの時期雪に埋もれ
ます。

しんしんと降り注ぐ不愉快極まりない白い雪
の中を歩くのが煩わしく、今年も帰省はしない
のだろうなと思いつつも、叔母からの「たま
には帰って来なさい」という手紙の文面が頭に
浮かび、悩んだのち、長湯でのぼせるのでした。
冷たい布団に入り、天井を見つめながらぼんや
りと考えてみます：

あの小説と写真、祖母が亡くなり叔母の家に
引き取られた時に実家も取り壊され、所在が
分からなくなつた筈なのに、なんでもの図書館に
あつたのだろうか：そして何故死んだ両親が若
返つて現れたのだろうか：

解決しない不思議な出来事を考えてると、疲
れたのかそのまま眠りの世界へ滑り落ちて行き
ました。

夢を見ました。

吹雪く北会津の駅から実家に向かう道の途中

に扉が立て掛けてあるのです。

その扉の元には一匹の猫が居て、まるで私を待
っているかのようには鳴いていません。

近付いても逃げないどころか、足元にまとわり
つく綿毛の甘ったれクリーチャーは「その扉を
開けてみせろ」と言わんばかりに私を見つめる
のです：叔母の家に居る愛犬ハピもこれくらい
懐いてくれたら故郷に帰る煩わしさも軽減さ
れるのにな。

何の気無しにドアノブに手をかけ、それをぐる
りと回すと、扉の向こうには信じられない事に
眩しい日差しと新緑の装いをした木々が風に
揺れる夏の景色なのです。

その先に私は見たのです：図書館で会った父と
母が。

私の足は無意識のうちに扉の向こうへ運び、両
親を追いかけられるのですが、猫が足元でまとわり
ついて思うように進めません：やっぱり私は犬
が好きだと痛感したのはここだけの話。

両親は私に背を向けて歩いていきます：

「お父さん！お母さん！」叫ぶ私を振り返る事
もなく、その先に新たに現れた扉を開いて消え
て行きました。

私とその扉を開けると、大雨の中土砂を慎重に
取り除きながら救助活動を行うレスキュー隊
の姿と、その先非常線の前で祖母に手をひかれ
ながら泣きじゃくる五歳の私が居ました。

茫然とその光景を眺めてる後ろであの猫が鳴
いたので振り返ると、先程までの夏は消えて無
くなり、辺りは冷たい冬になっていました：

足が布団から出ており、寒さで目覚めた朝五時：私は会社を午後から早退し、あの図書館に向かう事にしました。

何故、私の写真が図書館の本：しかも両親が大好きだった小説に挟まっていたのか：答えを知りたくて私の足は図書館へと向かうのです。

私は日が傾き始めた頃に図書館に到着、一日お会いした東条さんを探しました。

東条さんは館内奥の陽の当たる窓辺に居て懐中時計を見つめていました：

「あ、あの：一昨日小説を借りた者ですが：」声の上擦りそうになるのを抑えて何とか話しかけたところ、東条さんはニコリと微笑み「来ると思っていました：ちようど小会議室が空いてるので、そこで話しましょうね」

会議室の机に、私は借りた小説と挟まっていた私の写真を置きました。

「この写真は五歳の時の私です：初めて着せて貰った浴衣に大喜びした事を今でも覚えてます」

東条さんは写真を手に取り、目を細めます。

「とっても可愛らしい写真、当時から美人さんだったのですね！」なんて褒められるもんだから私の顔は赤べこより赤面してたのではないでしょうか。

東条さんは写真を置き、静かに話し始めました：

「信じられないかもしれないですけど、この本と写真：そしてこの図書館は過去と今を行き

来してるんです：なのでこの小説を巡るあなたと一昨日の男女の事は：あの男女、あなたのご両親だったんですよ」

私は笑いのセンスを試されてるのでしようか、取り敢えずツッコむのがマナーなのか考えあぐねているうちに「信じられないのは無理もない話です：でも本当の事なんです、夕暮れの一時的この図書館内は過去に飛ぶ為、過去の人間と現代の人間が交差します」と、東条さんは真剣な眼差しで訴えかけます：私は少しでも落ち着こうと出された珈琲を一口飲み、大きく息を吐きました。

本当に図書館が時間旅行を：漫画やアニメでしか見た事のないものが起きていたとは俄かに信じ難い事ですが、私の在館中に図書館が本当に時間を飛んだなら：若き日の両親に会った事は説明がつきます。

「実はこの小説、二〇〇五年にあなたのお祖母様が図書館に寄贈して下さったのです：孫がこの本を見ると両親を思い出し泣き出すとの事で。だいぶ泥が付着してましたけど本にも魂が宿ってますし、この本は半世紀以上前の貴重なSF小説でしたから：出来る限り綺麗な状態に戻そうと：泥で汚れたページを修復してる時に写真が挟まってるのを発見したんです：それで写真をお返ししようと思ってたのですが、未来の本の貸出簿をみたら二〇二四年十一月十三日にあなたがこの本を借りに来るのが分かったので、あなたにこの写真を渡そうと、本を陽が差して目立つ机の上に置いてたんです」

祖母が図書館に本を寄贈していたとは思いませんでした：何せ遺品ですし。

でもそれだけ私が当時傷付いていたのを祖母が心配したのでしようね：

東条さんは続けます：

「そして一昨日：そう、あなたが小説を手を取っていた時です。その時この図書館は一九九八年に居ました」

東条さんはポケットから懐中時計を取り出し私に見せてくれました：時計ではなく、替わりに西暦が並んでいます。

「それから間もなく私のところへ若い男女が、猫が見つめる先に人の目がある半世紀以上前のSF小説を探している“と言うのです：私は瞬時に“夏美さんのご両親だわ！”と直感しました：どの年代にこの図書館が飛ぶか不規則とは言え、でもまさか偶然にもあなたのご両親が現れるなんて」

きつとこの小説が私と両親を導いたのでは：と東条さんは言います：

秋の日は釣瓶落としとはよく言ったもので、窓の外は既に夕暮れを告げる薄暗さがじんわりと広がります。

「私、両親にたった一言“ごめんなさい”が言いたかったんです：」

静寂の中、私の淡々とした言葉が響き、一筋の涙がいつの間にか大河のように頬を伝うのです。「あの時素直に謝る事が出来たら両親は死なずに済んだのに：私が：」

嗚咽と声にならない声で私は両親への懺悔を

吐露し、東条さんはそんな私を抱きしめてくれました。

泣き止んでからと言うもの、東条さんに伴われて小会議室を出たのは良かったのですが、泣き疲れたせいか体に力が入らず、暫しフロアのソファで休ませて貰う事にしました：人前であるのに泣いたのって初めてかもなあ：ぼんやりと考えてるうちに意識が遠のき、寝落ちしてしまつたようです：

目が覚めると誰かが優しく頭を撫でてくれています：フロアは消灯され真っ暗：ええ！何これ！？頭がパニックになっていると、「あっ！起きたみたい」優しい女性の声私の頭の上から降って来ました：どうやらこの人が私の頭を撫でてくれてたらしい。

咄嗟に上体を起こし、声の主を見ると一昨日の春ちゃん：いや、若き日の母でした。

母の後ろからヒサちゃんと呼ばれてた若き日の父も顔を覗かせ笑ってます「ぐっすりだったね」とパニックになりながらも、どうにか気持ちを落ち着かせ「どうしてここに居るんですか？」と尋ねてみたものの、閉館しても寝てた私が言うなつて話ですが。

春ちゃんは少し考えながら「うーん：私たちも気が付いたらここに居たからよく分からないんだけど：でも、夏美ちゃんにまた会いたかったからちよつと嬉しいかも」と、戸惑いながらも嬉しそう。

「一昨日、図書館の前で別れたらう？あれから

春ちゃんが言っていたんだよ”あの子、何だか他人に思えない“って：僕もまあ似たような感じだけど”

二人の言葉を聞いて、考えるより先に声が出てました：「お父さん！お母さん！」

当然ながら二人はキョトンとし、「寝ぼけてる？」とクスクス笑いますが、私の言葉は止まりませんでした：

「信じてもらえないかもだけど、私は二人の子供なの！二人は私が五歳になるまで育ててくれたの!!」

二人にあの写真を見せるとヒサちゃんはそれを手に取りしげしげと眺めます。

「信じてあげたいけど：ちよつと信じ難いかなあ：五歳まで：ってその後はどうしたの？」

私は口ごもってしまいました：なんて言えば良いのか：

「変な夢でも見たのかもしれないね：今夜は帰ってお風呂に入ってゆっくり休んだ方がいいな：」ヒサちゃんが困ったように笑います。

私の目頭にまた熱いものを感じながら、努めて冷静に打ち明けました。

「私が五歳の夏、連れてってくれる筈だった花火大会が雨で中止になってスネてたの：二人が代わりにオムライスを食べに行こうって言うてくれたのに私は意地を張って“行かない”ってワガママを言ったのよ：そんな私に呆れて二人は私を祖母に預けて食事に出掛けたわ：その帰り道、土砂崩れに巻き込まれて：」

静まり返るフロアで冷たく重い空気が私たちを

包みます：二人は私の話を信じてくれるだろうか：例え信じたとしても私は二人になんて謝れば良いのか分かりません：絞り出す声でやつと私はあの時言えなかった言葉を伝えたのです：「ごめんなさい」と。

長い沈黙の後、最初に口を開いたのはヒサちゃんでした：でもそれは私の望んだ言葉ではありません：「悪いけど僕には信じられない」と。

「そんな非現実な事が起きるなんて有り得ない」と思わないかい？その上僕たちが事故に遭って命を落とすなんて：不謹慎じゃないか」

語気を強めたヒサちゃんの言葉に私は俯くしかありません：私はただ、あの時言えなかった言葉を両親に言っただけになりたかっただけなの？

いや、そんな筈ない！私はもう一度二人に会いたかった！「ごめんなさい」の後に「大好き」って言いたかった：仲直りして、来年の花火大会は浴衣着せて貰って三人で出掛けたい：そうやって続いて行く未来を今も夢見てる。

不意にまた春ちゃんが頭を撫でてくれたので私はビククリしました：見ると春ちゃんは怒るどころか笑ってます：それは子供の頃に見た母の眼差しでした。

「辛い思いを抱えて今日まで生きて来たのね：よく頑張ったね、夏美ちゃん：」

呆気にとられるヒサちゃんに「ヒサちゃん：私は夏美ちゃんを信じるわ。この子の目がね、嘘を言ってると思えないし：信じなきゃって：

それにSF好きの私たちが時間旅行を疑うなんて滑稽だと思わない？」
ヒサちゃんも頭を掻きつつも呟くように「確かにそれはそうだけど」と完全に困りきっています。
そんなヒサちゃんも私の頭を撫でてくれた時、私はまた大粒の涙を流し、父と母は「大人になっても泣き虫な子供だねえ」と呆れ笑ってました。

「私が五歳になった夏の花火大会の日は、何が何でも家に居てね！約束だからね!!」
私は二人に釘を刺しておきました：未来はどうなるか分からないけど、どうか時の神様：私のワガママを聞いてね！
だってこの物語は、私のものなんだから。

気が付くと私は自分の部屋で目が覚めました：何だか温かい夢を見ていたようで、寝起きなのに気分がいいのです。
さて、そろそろ着替えなきゃ：久し振りの帰省、叔母さんにはガミガミ言われそうだなあ：なんて思いながらも故郷に帰るといのは幾つになっても嬉しいものです。
夕方前に北会津村の最寄り駅に着き、雪の舞う中を三十分かけて歩き、久し振りの実家の扉を開くと、叔母さんがドタドタと玄関に出て来て涙を浮かべ「おかえりなさい」と：
叔母さんも歳かなあ：涙もろくなつて：内心クスクスと笑った自分でしたが、恥ずかしい事にその直後涙を流すとは：

居間の襖が開かれて：現れたのは少しシワが出た父と母：
伝う涙を拭く事も忘れ「なんで」と呟くと、父と母は顔を合わせて微笑みました。
「なんでって：なっちゃんも二十六年前に忠告してくれたじゃないか、五歳の花火大会は家に居ろ」って：だからこうして父さんも母さんも生きて来られた：まだなっちゃんの歴史は改変されたばかりだから混乱してるかもしれないけど」
母は私を強く抱きしめて「父さんと母さんを助けに来てくれて有り難う」と涙を流してきます：我が家はみんな泣き虫だなあってぼんやりと。
父は私の頭を撫でて言いました「聞かせてくれ、なっちゃんは今日までどんな人生を歩んで来たのかを」
もしあなたが誰かを失った時：いや、友達と喧嘩した時だっていいし、お母さんに叱られた時でもいい：時間を旅する虹ヶ丘図書館を探してみたいのです：そしてその図書館を見つけたら遠慮なく入って下さい：司書の東条さんがあなたに会いたい人に会わせてくれる筈ですから。
そして諦めず何度でも凍える冬から希望の夏へ通じる扉を試して下さい：その時は東条さんがあなたの肩を持つ。

檜の葉の君

迎ラミン

1

あれ？ 本に何かはさまっている。

おだわら 小田原城を望むテラスに入ったところで、すぐに気づいた。ページをめくり、違和感を感じたあたりを開く。

「あ」

思った通りだ。本のなかほどに、フィルムケースに入った小さなカードがはさまったままになっている。きつと葉がわりに使ったんだろう。ちよと隠れる高さだから、スタッフの人も気づかないまま棚に戻ってしまったのかもしれない。うん？

カードを手を取ったところで、僕は首を傾げた。裏面に知っているロゴがある。電話会社を示す三文字のアルファベットも。

「テレホンカード、だっけ」

ふたたび声が出てしまい、慌てて周囲を見回す。さいわいテラスには、自分以外誰の姿もなかった。十一月に入って、暗くなるのもさらに早くなってきたからだろうか。

気を取り直して、カードを詳しく調べてみる。たしかテレホンカードというのは、公衆電話専用のプリペイドカードだったはずだ。スマホや携帯なんてものがない時代には大活躍していたのだと南足柄みなみあしがらに住んでるじいちゃんが言ってい

たっけ。

てことは、お年寄りの忘れ物かな。

ちよと心配になってきた。というののも、カードがずいぶんと大事にされているもののように感じたからである。ケースに入っているのもそうだし、残度数を示す穴も空いていない。表面にプリントされた植物の写真だって、新品みたにくつきりしている。

でも、だったらなんで葉に？

眉根を寄せて、思わず考え込んだ直後。

「あっ！」

またもや声を出してしまった。よく見れば表面の写真が、馴染み深いものだったからだ。

何かの木を接写した写真は、枝の先端から伸びる三枚の葉に焦点を合わせている。真ん中の一枚と、その根元から左右対称に広がる小ぶりな二枚。

うちの校章！？

近くのハイテールに本を置き、制服の襟を引っ張って自分のものと見比べてみる。本当にそっくりだ。つまりこれは、檜の葉の写真。

三つ又の矛みたいに並ぶ檜の葉は、僕――

真崎和人が通う、まさきかずと 県立坂之上さかのうえ高校の校章に瓜二つの形をしているのだった。

2

図書館に来たのは、歴史総合の授業で出た課題のためである。内容はアイヌの文化について調べ、レポートを提出するというもの。

高校一年なのにレポート提出なんて、なんだか大学生みたいだけど、「サカ高」こと我らが坂之上高校では珍しくもなんともない。何せ神奈川県が指定する『学力向上進学重点校』であり、『スーパーサイエンス・ハイスクール』なのだから。……といってもそれらがどう凄いのか、少なくとも僕自身はよくわかっていないのはここの話。

ともあれ、そうしたなかでの月曜日。

所属するサッカー部の練習がオフということもあって、僕はレポートのためにさっそく、お馴染みの小田原駅東口図書館を訪れたのだった。

おだわらえきひがしぐち

卒業生の人、とか？

カードを手にしたまま、僕はもう一度首を捻った。校章そのものたる榎の葉がプリントされたデザインで、しかも大切に扱われている様子のテレホンカード。ならば持ち主は、サカ高に思い入れがある年配の方じゃないだろうか。それこそOBだったりOGだったり。

でも、そうすると本との釣り合いがなあ……。カードも置いて、うぐんと腕を組んだとき。

「あら、珍しい。テレカの忘れ物？」

背後から突然、呼びかけられた。

「はい!？」

「ああ、ごめんね。君一人だったから、つい声かけちゃった」

びっくりして振り向くと、眼鏡姿の若い女性が笑顔で片手を挙げている。緑色のエプロンと、

左胸には山野辺やまのべと書いてある名札。よく見る司書のお姉さんだ。

「い、いえ」

「それ、忘れ物？」

もう一度尋ねながら、隣にきた山野辺さんがテレホンカードを覗き込む。ふわりと柑橘系のいい香りがして、しかも一瞬だけど、二の腕にエプロンの胸元が触れたような感じも……。いや、気のせいだ。絶つっつ対に気のせいだ。

完全に固まってしまった僕は「ひゃ、ひゃい、本に挟まっていらつしやいました」と、おかしな日本語で答えることしかできなかった。山野辺さんはといえ、まったく気にした様子もなく、「葉がわりのテレカかあ。……ってこれ、サカ高の校章そっくりじゃない。こんなのあるんだ」などと、至近距離のままテレホンカードを手に取りぶつぶつ言っている。

「で、挟まったのが『イナंकフル』のムック本、と」

「あ、はい」

「真崎君は、アイヌについて調べる用事があったの？」

『イナंकフル』というのは、今から百年近く前の北海道や大陸を舞台に、「アイヌ人が残した秘宝探し」を描いた大人気冒険漫画のタイトルである。もうすぐ映画も公開されるみたいだけど、おそらくはそれもあって館内の『ティーンズエリア』には、アイヌの関連本を集めた企画棚がしばらく前から設置されている。

企画棚の存在を覚えていた僕は、だからこそこの図書館に足を運び、まずはとっつきやすそうな本から、という理由で『イナシクル』を特集したムック本を手に取ったのだった。

「はい。授業でレポートを書く課題が——」

さり気なく一歩遠ざかって落ち着きを取り戻した僕は、そこではたと言葉を止めた。

「あれ？　なんで僕の名前を？」

「ふっふっふ。常連さんの名前くらい覚えちゃうわよ、真崎和人君。サカ高の一年よね。私は

山野^{やまの}辺^べ佳^{かな}南。こう見えて同じくサカ高出身なの

つまり君の先輩でもあるから、心配しないで」

こう見えて、なんて言われてもコメントに困ってしまふ。それはさておき、とりあえず僕の方も心配などはしていなかった。じつは似たような感じで、年上のお姉さんにグイグイ来られることが多いからだ。年子の姉が一学年上について、その友だちに「和人君、可愛い！」「私の弟にしちやいたい！」などと、冗談半分（のはずだ）によくからかわれるのである。

「ちよっとしたミステリーね。若者にはあまり馴染みがないはずのテレカが、なぜか『イナシクル』のムック本に挟まっていた。手がかりはサカ高の校章そっくりの、榎の葉の写真。そして第一発見者は常連の和人君、と」

細い顎に手を当てた山野辺さんが、先ほどの僕と同じように考え始める。どうでもいいけど、勝手に下の名前で呼び始めちゃうところも姉ちゃんの友だちによく似ている。ていうか、物

騒な事件でもないのに「第一発見者」って。

「本のどのへんに挟まったの？」

「あ、真ん中へんです。たしか六十何ページかのあたりに」

「ふーん」

今度は本を手に取り、伝えたあたりをたしかめる山野辺さん。だが数秒後には、何かを納得したような顔になった。

「ああ、そっか。なるほど」

黒縁眼鏡をくいっと持ち上げて、一人で勝手に頷いている。

そうして彼女は、とんでもないことを頼んできた。

「よし、和人君。犯人……じゃなかった、このテレカの持ち主捜しをお願いできる？」

「はあ……って、ええっ!？」

「テレカの持ち主——『榎の葉の君』は、多分サカ高にいるはずだから」

いろんな意味で「なんですですか!」とつつこみたかったけど、マイペースな山野辺さんがそれより早く続けてしまふ。

「格好いいじゃない、高校生名探偵。あ、でも悪の組織に捕まって、子どもになっちゃ薬を飲まされないうう気をつけてね」

「いや、そもそもこれ、単なる忘れ物ですよ。だったら山野辺さんが——」

勝手なコメントをスルーしつつ、僕としてはしごく真つ当な反論をするしかない。というか一体何を言い出すんだ。山野辺さんて、中身はこんなに自由な人だったのか。

しかし返ってきた答えもまた、マイペースすぎるものだった。

「佳南」

「はい？」

「私も下の名前で呼んでるんだし、佳南さん、って名前で呼んで。ほれ、ほれほれ」

「……………」

「アラサーの独り身は寂しいのよ。せめて可愛い男の子に、名前で呼んで欲しいじゃない」

……大丈夫か、この人。

もはや呆れるしかない僕に向かって山野辺さん、もとい、佳南さんが楽しそうに笑みを深くする。

「すぐに見つかると思うわよ、”榎の葉の君”というわけで調査をよろしく！ 真実はいつも一つ！」

突きつけられた人差しのせいで、反射的に身体が動いてしまう。

つまりあの国民的探偵アニメが好きなんです、ね、というまったく関係ない感想とともに、僕はこくりと頷いてしまっていた。

3

「あ、和人君だ！」

「元氣？」

校舎一階の食堂へ入ると、いつものように華やかな挨拶が飛んできた。萌奈美姉ちゃんと仲良しの、トモさんとヒロミさんだ。すぐあとには「どうしたの？」という姉ちゃん本人の声も。

トモさんとヒロミさんに「こんにちは。すみません、昼休みに」と挨拶を返してから、僕は姉ちゃんに用件を伝えた。

「姉ちゃん、昨日のあれなんだけど——」

「あ、ごめん！ メッセするの忘れてた！ 朝訊いたら、やっぱり青葉ちゃんのみたい。図書館で預かってくれてるっていうのも言っといたから」

「本当！？ 良かった！ ありがとう」
昨夜図書館から帰った僕は、まずは同じサカ高生である萌奈美姉ちゃんに、佳南さんが言うところの”榎の葉の君”について心当たりがないか尋ねてみたのだった。

理由は二つ。”榎の葉の君”が女子だったら、うろうろ嗅ぎ回るのは、さすがに不審者すぎるというところ。そしてもう一つは、姉ちゃんの顔の広さに期待してだ。

二年生で女子バスケット部に所属している萌奈美姉ちゃんは、一見すました感じだけど、じつはとても面倒見がいい人なのだ。チームでは副キャプテンを任せられてるそうだし、文化祭や体育祭でも、大事な役どころの係を立派に務め上げたのを知っている。

そんな姉ちゃんだから、

——榎の葉のテレカ？ あ！ ひよっとしたら青葉ちゃんのかも。あの子が持っているの、何度か見たことある気がする。二―八の榮^{はなびらぎ} 青葉ちゃん。めっちゃ綺麗な子だよ。

と、すぐに一人の名前を挙げてくれた。そう

して本人にも確認してくれたところ、まさにドンピシャだったらしい。

「大事なものだから、青葉ちゃんも焦ってたっぽいよ。今日の放課後にでも、さっそく図書館に寄ってみるって」

「良かった。ありがとう」

もう一度繰り返し返した僕は、トモさんとヒロミさんにも頭を下げてから、軽やかに食堂をあとにした。

教室に戻った僕は、そこでクラスメイトから意外な言葉を聞かされた。

「あ、和人。さっき二年のハナブサさんて人が、おまえのこと探しに来たぞ。『ノン・アンドロイド』の《ナンバー2》っぽい、すげえ美人の」ゲームオタクの彼が口にしたキャラはまったく知らなかったけど、席に着いてスマホで検索したらすぐに出てきた。

ショートボブっていうんだろうか、ふわっとした髪に黒いカチューシャ。同じ色のバンドナミたいなものでなぜか両目を覆っているけど、それでもたしかに美人だとわかる。口もとのほくろもチャーミングだ。……って、ゲームの主人公だから当たり前だろうけど。

栄青葉さん、か。

わざわざお礼を言いに来てくれた（のだろう）先輩の名を胸の内でも繰り返してから、僕は遅い昼食に取りかかった。

4

幸運にも、栄さんとはわずか数時間後に会うことができた。いや、正直に白状すると、そうなるといいな、というささやかな期待とともに行動した結果なのだけ。

場所はもちろん、東口図書館である。

午後から雨が降ってきたため、サッカー部の練習が室内での筋トレだけで終わった僕は、帰りがけにいそいそと図書館へ向かったのだ。例のレポートを少しでも進めようという、ちゃんとした目的もある。

とりあえずいつものテラス席か、もしくは閲覧席が空いているか確認しようと、入って右手に進んだ直後。

「あ」

昨日のように、思わず声が漏れてしまった。視線の先で山野辺さん、じやなかつた佳南さんがにこにこ手を振っている。通路脇にある多目的スペースの出入り口から、ひよっこり半身を乗り出して。

笑顔と手招きに導かれ、僕もそちらへと向かう。でも多目的スペースって、申し込み制だったような。

「安心して。今の時間は、なんの予約も入っていないから」

心を読んだかのように小声で教えてくれた佳南さんが、どうぞとばかりに身体を開く。促されるまま室内に入った僕は、そこでまたもや「あ」とつぶやく羽目になった。図書館なのに声

を出してばっかりだ。

長机と椅子の間に、サカ高の制服を着た女の子が立っている。

ふわつとした髪。黒いカチューシャ。左の口もとを飾る小さなほくろ。

「真崎和人君だよ。萌奈美ちゃんの弟の。サカ高です。テレカ、見つけてくれてありがとう。」

「あわよくば会えないかな、と期待していた。『めつちや綺麗』で『すげえ美人』な先輩は、そう言って笑顔でお辞儀してくれた。」

こちらにも簡単に自己紹介させてもらったあと、佳南さんに勧められた僕らは、長机を挟む形で席に着いた。栄さんの隣に佳南さんも並んで座ったので、美人姉妹に面接されているみたいでなんだか落ち着かないのは内緒である。

「二人は、これが初対面なの？」

「はい。でも姉ちゃんが友だちだったんです。僕、年子の姉もサカ高で。テレホンカードのことも、姉ちゃんが栄さんに伝えてくれました。」

なぜか意外そうな顔をしている佳南さんに、僕は正直に答えた。逆にこちらからも確認しておく。

「佳南さんは、あれが栄さんのだって、すぐにわかったんですよ。」

「うん。青葉ちゃんも常連さんだしね。テレカを持ってるのは、見たことなかったけど。」

「え？ じゃあなんで——」
「私のルーツとか名前の由来を、佳南さんは知ってるから。私、中国の血が八分の一だけ入っ

てるんだ。」

ぼかんとしたところで、栄さん本人が説明を変わってくれた。最初にも思ったけど、涼やかな声が整ったルックスにぴったりだ。

「曾おばあちゃんが中国人なの。青葉っていう名前も、ある植物の中国名が由来。息子に当たるおじいちゃんが、シャオイェ・チングアン——『小』きな『葉』っぱの『青』い『岡』って書く木からつけてくれて。」

流暢な発音に感心しつつ、「あ！ その植物って」と僕もすぐに察することができた。

「うん、樫の木。花言葉は勇気とか力、長寿。ちなみにうちは、おじいちゃんと両親もサカ高の卒業生。だから私も子どもの頃から刷り込まれて、サカ高を受験したってわけ。ふふ。」

クール・ビューティな見た目とは裏腹に、栄さんは結構明るい性格のようだ。優しい笑みを絶やさないし、しっかりとこちらの目を見ながら話してくれる。

「曾おばあちゃん、日本の兵隊だった曾おじいちゃん、日中戦争で知り合ったんです。戦後に無事結婚できたけど、遠距離恋愛中も彼がくれたお守りをずっと大事にしてたって聞いたわ。樫の葉の押し葉が入ったお守りを。」

「へえ。」

日中戦争というのはたしか一九四〇年頃に起きた、文字通り日本と中国との戦争だ。授業で習ったばかりだからよく覚えている。それもあって、僕は栄さんの語るエピソードにますます興味を抱かされた。

「私も知らなかつたんだけど、当時は櫛の木が貴重品だったみたい。軍需用品とか、船とか車両とかに優先的に回されて」

「ああ……」
太平洋戦争で、金属類が徴収されたみたいなものだろう。

「けど、そんななかでも曾おじいさんは、曾おばあさんのために貴重な櫛の葉で守りを作られたんですね。花言葉もわかつたうえで」

「うん！」
ぱつと顔を輝かせてくれる栄さん。それだけで家族のエピソードや自分の名前に、誇りと愛着を持っていることが伝わってくる。

「このテレカは、私が生まれたときにおじいちゃんが作ってくれたんだ。両親が大切にしていただけじゃなくて、自分や息子夫婦が素晴らしい時間を過ごした母校の校章でもある、櫛の葉を写真に撮って。曾おばあちゃんのお守りも、うちの校章とよく似た三つ又の葉っぱだったそうだから」

「素敵なお話ですね」

「ありがとうございます。だから曾おばあちゃんと同じで、私もこれをお守りしてみたいにしているの。しょっちゅう触ったり眺めたりして居るから、つい葉がわりに使ったりもしちゃうんだけど」

いつの間にか僕らの前には、あの櫛の葉のテレホンカードが置かれている。話しながら、栄さんが取り出したのだろう。

「そういうルールもあって、青葉ちゃんは日中戦争のシーンが出てくるエンタメ本も、よく読

んでくれてるのよ」

タイムリングを見計らって補足する佳南さんの言葉で、僕はもう何度目かもわからない「あつ！」という声を漏らした。

「じゃあ、カードが挟まっていた『イナシクル』本のページは……」

「うん。主人公の少尉が日中戦争で、現地の女給さんと仲良くなる場所を取り上げたページ」

どこか恥ずかしそうに栄さんが頷く。たしかに原作漫画でもそんなシーンがあった。大人っぽい人だけど、女子高生らしく微笑ましい恋愛シーンは好きなのだろう。ましてや大切な家族のエピソードと似ているなら尚更だ。そのエピソードから生まれた愛用の葉を、ページに挟みたくなる気持ちだっただけで十二分にわかる。

「でも本に夢中になった青葉ちゃんは、大事なテレカを挟んだまま返却しちゃった。申し訳ないことに、私たちもそれに気づかず棚に戻す。そうしたら和人君が発見した、ってわけ」

「なるほど。けど佳南さんは、櫛の葉がプリントされていて、しかも日中戦争のページに挟まれてたってことから、栄さんのものじゃないかってすぐにわかつたんですね」

「うん。青葉ちゃんとは仲良しで、たまにプライベートな話なんかもするしね」

子どももみたいにVサインを出しながら、佳南さんがまとめてくれる。

ところが、唐突に彼女はその手を下ろし、「ていうか、和人君」とわざとらしくこちらを睨ん

できた。

「な、なんですか」

「お姉ちゃんの助けを借りて一気に解決、ってのはずるいでしょ。さっそく青葉ちゃんがカード取りに来たもんだから、君に言われてかと思っただじゃない。どんだけ凄い推理したんだろうって期待しちゃったわよ」

ああ。だからさっき、僕と栄さんが初対面だと知って意外な顔をしていたのか。

「せっかく私、和人君が『バーロー！』とか言っ
て、赤い蝶ネクタイのマイクで謎解きする場面も想像したのにさ」

「……勝手に変な想像しないでください。僕は見た目も頭脳も、普通の高校生です」

やれやれ、と呆れながらも無意識のうちに会話を合わせてしまった。ハツと口に手を当てるも、笑いを堪えるようにして栄さんが同じポーズを取っている。恥ずかしい……。

というか栄さんも、佳南さんがたびたびネタとして挙げる探偵アニメを知っているようだ。やっぱり中身は明るくて可愛らしい、それこそ普通の女の子なのかも。

頬を緩めたまま、ごめんね、と頭を下げられる姿に見とれていると、佳南さんがまたしてもとんでもないことを言い出した。

「和人君には、裏技を使った罰をあたえなきゃね」「はあ!?」

なんでですか。毎度毎度、自由すぎる司書さんだ。

しかし提案された罰ゲームを、僕はすんなり

受け入れてしまう羽目になる。なぜなら、「罰として、君も青葉ちゃんを名前で呼ぶことよし、決定！」

という無茶振りに、当の本人が「あ、私は全然構わないです。むしろその方が嬉しいかも」なんて、例によって優しい笑顔で答えてくれたから。

「んじゃ、手始めにさっそく呼んでみなさいな。ほれ、ほれほれ」

煽る佳南さんはさておき、自分自身まで期待を込めた目を向けてくるのはどうしてですか。萌奈美姉ちゃんの弟だからって、あなたまで僕をからかうんですか。まったくもう。

耳まで熱くなりながらも、僕は勇気を持って呼びかけてみた。

チャーミングな先輩に。ひよんなことから知り合えた「櫛の葉の君」に。

「あ、青葉さん。あの、あらためてよろしくお願
いします！」

「こちらこそ。和人君」

え？ と伏せていた顔を上げると、桜色の唇が、左下のほくろごといたずらっぽくほころんでいた。

僕と青葉さん、佳南さんはこの一件をきっか
けに、図書館や周辺で起こるささやかな事件を
皆で解決していくこととなる。けどそれはまた、
別の話。

年下の君

迎ラミン

1

いつも静かな図書館が、今日はちがった。といつても、マナーを守らず騒ぐ人がいたとかじゃない。沢山の明るい声が飛び交ったのは、閉め切った多目的スペース内だけの話だ。

十一月最初の土曜日。いつも通っている

おだわらえきひがしぐち

小田原駅東口図書館で開催された、『POPづくりワークショップ』なるイベントに私も参加したのだった。

「こんばんは。来月こんなイベントやるんだけど、よかつたら青葉ちゃんもどう？」

あおば

仲良しの司書、山野辺佳南さんやまのべかなからメッセージをもらったのは、ひと月ほど前のこと。添付のPDFファイルには、

「好きな本を『推し』てみよう！ 児童書作家によるPOPづくりワークショップ」

というタイトルとともにワークショップの概要、そして講師役の作家さんによるPOPの作例が載っていた。地元・小田原在住の人気作家さんが、自身の趣味でもあるPOP製作を通じて、読書の魅力を伝えてくれるイベントらしい。《楽しそう！ ぜひ参加させてください！》

予定表を確認した後、すぐ返信させてもらった。いいタイミングだし、佳南さんにはカミング

アウトしちやおうかな……。

スマホ片手に、笑ってそんなことも考えながら。

何を隠そう私——はなぶき 栄青葉は、投稿サイトで

そこそこ人気を博しているアマチュア小説家だつたりする。ここだけの話、出版社から書籍化のオファーが来た経験だつてある。残念ながらちよつと怪しい会社だつたので、丁重にお断りしたけれど。

口もとのほくろや、少しだけ切れ長の目（これは自分でも気に入っている）から受ける印象のせいだろうか、通っている「サカ高」こと県立坂之上高校さかのうえでは、

「青葉ちゃんて、クール・ビューティって感じだよね。スーツとかヒールとか超似合いそう」などと言われたりもする私だが、中身はラノベも漫画もアニメも大好き、自分で小説まで書いてしまう、要はオタクなのである。

申し訳ないけど、イメージ壊しまくりよね。

ふたたび笑ってしまい、小さく肩をすくめる。今さら素をさらけ出すつもりはないし、幸か不幸か、正体（？）を気にかけてくれるような恋人もいないので、なんにせよ私の高校生活はいたって平和なものだ。自分で言うのもなんだけど、進学校たるサカ高の生徒らしく勉強も頑張っているの、成績だつて悪くない。

というわけで、週末くらいは好きなことをしても罰が当たらないだろうと、私は意気揚々と、図書館での『POPづくりワークショップ』に参加したのだった。

ワークシヨップは予想通り楽しく、私の創作意欲も大いに刺激される結果となった。終了後、上機嫌のままティーンズエリアへと向かい、少し前から設置されている《アイヌについて学んでみよう》という企画棚を探る。『アイヌ人が残した秘宝探し』を描いた大人気漫画、『イナंकクル』がもうすぐ実写映画化されるので、それに合わせてだろう。たまたまだけど、私も次の小説は北海道を舞台にしようと考えていたからとても助かる。

あとは……これかな。

読みやすそうな短編小説集と、あとは『イナंकクル』自体を特集したムック本を借りることにした。荷物にもなってしまうので、とりあえずは二冊でOK。どうせここには、しょっちゅう通わせてもらっているのだし。

タイミングを逃して（というかやっぱり恥ずかしくて）結局、佳南さんには小説を書いていゝる事実を明かせなかつたけど、ともあれ私は明るい気持ちで図書館をあとにした。

2

家に帰った私は、すぐさま自室に引きこもり、まずはムック本の方を一気に読破してしまった。写真やイラストが豊富で、しかも私自身、アニメ版も含めて『イナंकクル』をしつかり履修済みというのもある。ただ、じつは別の理由こそ大きい。

それは、ストーリー全体のなかで大好きなエピソードが存在すること。

目次によれば、該当のエピソードはこの本でも取り上げられていた。だからこそ、早くそこを読みたくて、ページをめくる手が早まったのだ。

《おいこら、何してやがる》

《？ 閉嘴！ 小日本！》

《ああ？》

《滚蛋！》

《てめえこそ失せろだ、この野郎！ 彼女が嫌がってんだろうが！》

件のエピソードはイナंकクルの主人公、日本

こすぎ

兵の小杉少尉が、言葉の意味を察しつつ中国人と喧嘩するシーンから始まる。ときは一九三七年。日中戦争で大陸へ赴任していた彼が、はじめて入った茶館でチンピラに絡まれる女給さんを発見、助けようと立ち上がったの結果である。

持ち前の正義感と腕っ節の強さで、すぐさまチンピラを撃退する小杉少尉。

《大丈夫だったか？ わりいな、店で騒ぎを起こしちゃまって……って、日本語じゃ伝わらねえか》

苦笑する少尉に、だが女給さんは可愛らしい笑顔で返す。

《いえ、凄くありがとうございます。私、日本語わかります。ちよっぴりだけ》

はにかみながら語る彼女——翠蘭すいらんという名の

女給さんは、かつて店に通っていた日本人学者から、片言の日本語を教わった経験があるのだという。

その日以来、少しずつ心を通わせてゆく小杉少尉と翠蘭。しかし少尉は日中戦争、太平洋戦争と従軍が続き、さらにはひよんな偶然から「アイヌ人の秘宝探し」にも巻き込まれてしまつて、なかなか彼女と再会することが叶わない。一方の翠蘭にも、アイヌとの浅からぬ因縁が発覚し……。

というのが、『イナシクル』における二人のストーリーだ。さいわい最後はハッピーエンドとなるのだが、この出逢いの場面が私としては一番印象的だし、胸がきゅんとする。

ベタだけど、やっぱりこういうのがいいわよね。うんうん、と頷きながら、机の傍らに置いてあった一枚のカードを私は手にした。いつも持ち歩いて、ときには本の葉がわりにも使っている大切なカードを。

「曾おじいちゃんも曾おばあちゃんも、こんなだったのかな」

透明のフィルムケース越しに、カードの表側をあらためて見つめる。そこには私たちが通うサカ高の校章と瓜二つの、三つ又に分かれた櫨の葉の写真がプリントされている。今どき珍しいテレカ、すなわちテレホンカードであるこれは、私の出生祝いにと祖父がわざわざ作ってくれたものだ。

そのおじいちゃんの時点で、中身も外見も完全に日本人だけ。

和食も相撲も、そして日本の皇族も大好きな祖父の顔を思い浮かべ、くすりと笑ってしまう。曾おじいちゃんと曾おばあちゃんとの一人息子たる、おじいちゃん。あの人が中国とのハーブだなんて、言われなければ絶対にわからないだろう。

そう。つまり私にも、中国の血が八分の一だけ入っている。

日本の兵隊だった曾祖父と中国人の曾祖母は、まさに『イナシクル』のように日中戦争がきっかけで出逢い、結婚したのだとか。佳南さんにだけは明かしたことがあるが、彼女の反応は、「うわ、リアル小杉少尉と翠蘭ちゃんじゃない！ 格好いい！ てことは青葉ちゃんも、アイヌ料理とか好きだったりするの？」。チタタプとして「ヒンナヒンナ！ しちゃう？」

なんていう、ある意味「らしい」ものだった。優秀な司書さんだし美人でスタイルも良いのだが、どうにもマイペースですつとぼけたところがある人なのだ。

いずれにせよそんなわけで、私は『イナシクル』の作品自体はもちろん、何より小杉少尉と翠蘭の出逢いのエピソードが大好きなのである。

小説の方も翌日には読み終えてしまったので、週明けの月曜、私は二冊の本を図書館の返却ポストに投函してから学校へ向かった。ちよつと遠回りすれば通学路の途中になるし、せっかくの企画棚の本だから、万が一待っている人がいたら申し訳ないと思っただけ。

あれ？ となったのは帰宅後、土日と休んだ小説の投稿を再開しようとしたときだった。「やば……」

手元に出した資料本には、沢山の付箋とともに紙の葉も挟んである。その葉から連想してパスケースを確認したところ――。

案の定、ない。いつも定期券の裏側に差し込んである、大切な榎の葉のテレカが見当たらない。

「やばい、やばい」

自分を落ち着かせるようにつぶやきながら、必死に記憶を探る。

「……あっ！」

すぐにわかった。図書館で借りた二冊の本だ。もっと言うなら、多分『イナシクル』のムック本。あれにテレカを挟んだまま、返却してしまった。いつものごとく葉がわりに使った流れで。

身近で大切なものだからこそ、私はあのテレカを気がつけば取り出して、手で触れて、ずっとページに挟んでしまう。ふたたび本を開いたとき、榎の葉の写真が見られて嬉しいというのもあった。

ただし今回はどちらの本も一気読みだったので、中断箇所を目安としてテレカを挟んだのではない。大好きなエピソードを取り上げたページだったからだ。すなわち、曾おじいちゃんや曾おばあちゃんを想起させてくれる、小杉少尉と翠蘭の出逢いのエピソード。そこを取り上げたページ。

やっっちゃった……。

とにもかくにも、明日の放課後にでもまた図書館に行って訊いてみよう。などと考えていたら、意外なところから確定情報がもたらされた。

3

「青葉ちゃん」

「あ、萌奈美ちゃん。おはよう」

翌朝。教室に入っただけで、別のクラスの真崎萌奈美^{もなみ}ちゃんがわざわざ会いに来てくれた。

いつも思うのだけど、私なんかより萌奈美ちゃんの方が、よっぽどスーツ姿とかが似合いそうな気がする。長い髪を束ねて姿勢良く歩く姿は格好いいし、頼りがいのある性格で性別問わず人気もある。委員会活動でちょっと一緒にやったことがあるだけの私とも、こうして仲良くなってくれる。女子バスケット部では副キャプテンを務めているそうだけど、それも大いに納得の友人なのだ。

そんな萌奈美ちゃんが、いつものようにからりとした笑顔で尋ねてきた。

「ね、変なこと訊くけど、青葉ちゃんて榎の葉がプリントされたテレカ、持ってなかったっけ。うちの校章そっくりの葉っぱのやつ」

「えっ!？」

「去年図書委員で一緒になったとき、何度か見た気がするから。違ったらごめんね」

「ううん、違わない！ しかもちょうど今、それを探してて——」

目を丸くすると、萌奈美ちゃんは「良かった！」と手を叩いてくれた。

「やっぱり青葉ちゃんのだったんだ。じつは昨日、弟が東口図書館で偶然見つけたみたいで」
萌奈美ちゃんいわく、彼女の年子の弟でやはりサカ高に通っている和人君が、本に挟まったままになっていたあのテレカを、まさに偶然発見してくれたらしい。

「山野辺さんて司書さんに、預けたって言ったよ」

「本当!? どうもありがとう！ 大事なカードだから、ちよつと焦ってたの」

「どういたしまして。ていうか、お礼なら弟に言っておいて。たしかクラスは——一だったかな」

「うん！ 和人君、ね。昼休みにでも行ってみる。でも萌奈美ちゃんも、わざわざありがとう」
「気にしないで。不肖の弟によるしく。あの子、美人に弱いから青葉ちゃん見たら固まっちゃうかもだけど」

おかしそうに笑って、萌奈美ちゃんはお馴染みの颯爽とした足取りで、自分の教室へ戻っていった。

昼休みに一年一組の教室を訪問したものの、残念ながら真崎和人君は不在だった。とはいえ同じ学校に通っているのだし、遠からず会えるだろう。彼への感謝の気持ちも忘れないようにしつつ、私は放課後、掃除当番を終えてから東

口図書館へと急いだ。

「おっ！ さっそく来たんだ」

図書館に着くと、多目的スペースにいた佳南さんがすぐに気づいてくれた。今はなんの予約も入っていないようで、「ちよつといい？」と手招きしてくれる。私も素直に応じて、ガラス扉を閉じてなかに入る。

「はい、忘れ物。青葉ちゃんのだよね。『イナシクル』の本に挟まってたみたいよ」

「あ、そうです！ ちよつどこれを取りにきて。ありがとうございます」

こちらから問うまでもなく、エプロンのポケットから例のテレカを出してくれたので少々びっくりした。佳南さんはいえ、なんでもないことのように、

「ごめんね、メッセしようかとも思ったんだけど、青葉ちゃんならいつでも会えると思って。それに、なんだか面白い展開にもなってたし」

「面白い展開？」

「うん。可愛い男の子だったでしょ。彼もうちの常連さんなの」

「あ！」

可愛い男の子、という言葉に思わず声がでる。まだ会えてはいないけど。

「その子って、真崎和人君ですよ？ うちの一年生の」

「イエス。目がくりつとして可愛い和人君。二、三年後にはなかなかのイケメンになると、お姉さんは睨んでるわ」

毎度ながらの勝手なコメントもだけど、どうやら佳南さんは、このすつとぼけたキャラのまま和人君にも接しているらしい。続けて、とんでもないことまで語り始めた。

「サカ高の校章そっくりの写真がプリントされたテレカ、なんてちよつとミステリーなアイテムじゃない。だから私、彼に探偵役を頼んだんだ。持ち主の『櫻の葉の君』は学校にいるはずだから、上手いこと見つけてみなさいなって。きつと青葉ちゃんのだろうってすぐわかったし」「え?」

「腕時計型の麻醉銃とか、エンジンがついたスケボーとか使いながら、青葉ちゃんのもとに辿り着いてくれたら楽しいでしょ」

「……………」

本当に、どこまでも残念な美人司書さんだ。もはや確認する気もおきないが、今ネタに出した国民的探偵アニメの決め台詞、「真実はいつも一つ!」なんかもノリノリで口にして、和人君を巻き込んだのに違いない。テレカが私のものだってすぐに気づいてくれたのは、さすがとしか言いようがないけれど。

「ちよつと、呆れた顔しないでよ。だって和人君、可愛いんだもん。青葉ちゃんと同じでサカ高の後輩でもあるし」

「はあ」

言葉の通り、じつは佳南さんもサカ高のOGなのである。というか、女子高生時代からこんなだったのだろうか。

やれやれと苦笑していると、何かの気配を察

したのか、振り返った佳南さんがガラス扉を開けた。「来ると思った」と笑って半身を乗り出し、私に対してと同じように手招きもしている。そうして現われたのは噂していた男の子、当人だった。顔を見てすぐにわかった。なるほど、たしかに可愛い子だ。

お姉さんぶつた感想を反省しながら、慌てて姿勢を正す。笑顔とともに心からの感謝を伝えたかったから。

「真崎和人君だよ。萌奈美ちゃんの弟の。栄青葉です。テレカ、見つけてくれてありがとう」

4

和人君とたがいに自己紹介したあと、私たちは席に着き、佳南さんも含めてそれぞれがどんな状況だったのかを伝え合った。

「二人は、これが初対面なの?」

意外そうな佳南さんの反応に、姉の萌奈美ちゃんと私が友人ということや、彼女経由でテレカの在処を伝えてくれたことを、和人君がてきぱきと説明してくれる。

「佳南さんは、あのテレホンカードが栄さんのだって、すぐにわかったんですよね」

「うん。青葉ちゃんも常連さんだしね。テレカを持ってるのは、見たことなかったけど」

「え? じゃあなんで——」

目を丸くする彼に、今度は私から説明させてもらった。

「私のルーツとか名前の由来を、佳南さんは知ってるから。私、中国の血が八分の一だけ入ってるんだ」

そう。佳南さんには、私の名前についても話したことがある。「青葉」という、みずからも気に入っている名前由来を。

「曾おばあちゃんが中国人なの。青葉っていう名前も、ある植物の中国名が由来。息子に当たるおじいちゃんが、シャオイエ・チングァン——『小』さな『葉』っぱの『青』い『岡』って書く木からつけてくれた」

「あ！ その植物って」

「うん、榎の木。花言葉は勇気とか力、長寿。ちなみにうちは、おじいちゃんと両親もサカ高の卒業生。だから私も子どもの頃から刷り込まれて、サカ高を受験したってわけ。ふふ」

さらに私は、曾おじいちゃんと曾おばあちゃんが『イナシクル』のカップルと同じように日中戦争で出会ったことや、二人のさらに詳しいエピソードも語らせてもらった。

これも佳南さんにだけは伝えてある話だけど、曾おじいちゃんやんは当時貴重品だった榎の木をなるとか手に入れて、葉を押し葉にしてお守りを作ったのだという。サカ高の校章そっくりの、三つ又の榎の葉で。もちろん曾おばあちゃんへのプレゼントとして。

加えて二人の息子であるおじいちゃんや、そのまた息子夫婦もサカ高出身ということ、榎という植物は我が家にとって大きな縁があるものとなっている。だからこそおじいちゃんや、

榎の中国名にちなんで、私に「青葉」とつけてくれたのだそう。出生祝いに、母校の校章そっくりな葉をプリントしたテレカまで作って。

『イナシクル』の出会いの場面を取り上げたペーじ。そこに挟まれていた榎の葉のテレカ。これらの情報から佳南さんは、私の忘れ物だとすぐに察してくれたのだろう。

一方で私は、頭の片隅でまったく関係ないことを考え始めてもいた。

私、どうしてこんなに一所懸命話してるんだろう。本当は自分のこと、誰かに聞いてもらいたかったのかな。物語を考えるだけじゃなくて、自分自身が物語の登場人物みたいになってみたかったのかな。

さらには、和人君は嫌じゃないかな。こんなに自分の話ばかりする先輩で。

しかし彼は、ぱっちりした目を輝かせて興味津々で聞き続けてくれていた。「素敵なお話です」なんて相づちも打ってくれながら。

素敵、なんて言葉がさらっと口に出せる十五、六歳の男の子、そうそういないんじゃないだろうか。でも似合ってるかも。無邪気な笑顔に向き合っているうち、自分の顔がほころんでくるのを自覚する。

ああ、なんか楽しい。和人君と、もっとお話ししたいなあ。

そこでようやく、内心でハツとなった。「和人

君「……。いくら友だちの弟だからって馴れ馴れしすぎる。でもこのままだと、本人にも直接そう呼んじやいそう。いいのかな。佳南さんもそうだから、許してくれるかな……。なんだか顔が熱くなってきたように感じたとき。

いいタイミングで佳南さんが、わざとらしく彼を睨んでくれた。

「ていうか、和人君」

「な、なんですか」

「お姉ちゃんの助けを借りて一気に解決、ってのはずるいでしょ。さっそく青葉ちゃんがカード取りに来たもんだから、君に言われてかと思っただけじゃない。どんだけ凄い推理したんだろうって期待しちゃったわよ」

なるほど。だからさっき、私たちが初対面だと知って意外そうにしていたのか。

「せっかく私、和人君が『バーロー！』とか言つて、赤い蝶ネクタイのマイクで謎解きする場面も想像したのにさ」

「……勝手に変な想像しないでください。僕は見た目も頭脳も、普通の高校生です」

例の探偵アニメをネタに、漫才めいた会話をかわす二人を見て、思わず吹き出しそうになった。なんだかんだで波長がぴったりなのかも。笑っちゃってごめんね、とさり気なく和人君

に頭を下げたところで、佳南さんがますます勝手な、けど私にとってはありがたい宣言を口にする。

「和人君には、裏技を使った罰をあたえなきや

ね」

「はあ!?」

あ、びっくりした顔も可愛い。

「罰として、君も青葉ちゃんを名前で呼ぶことよし、決定！」

ナイスです、佳南さん！ これさいわいとかかり、私も乗っからせてもらうことにした。

「あ、私は全然構わないです。むしろその方が嬉しいかも」

「んじゃ、手始めにさっそく呼んでみなさいな。ほれ、ほれほれ」

調子に乗りまくっている佳南さんの隣で、私自身もさり気なく、期待を込めた視線を送っておく。結果、年上の女性二人がかりのプレッシャーに耐えられなかったのか、頬を赤くしつつも和人君は呼びかけてくれた。「あ、青葉さん」と。

「あの、あらためてよろしくお願いします！」

「こちらこそ。和人君」

どうか自然に聞こえますように。

祈りながら、私もにつこりと答えてみせた。私と和人君、佳南さんはこの一件をきっかけに、図書館や周辺で起こるささやかな事件を皆で解決していくこととなる。けどそれはまた、別の話。

解けない謎には林檎をおひとつ

遠山彼方

あれ、本になにかはさまっている。

首をかしげながらつまみあげたその紙——ルーズリーフの切れ端には、『G31 マキム』という謎の文字が書いてあった。

そもそも、なんでこの俺が図書館で本なんか読んでいるのかというと、話は一時間半ほど前にさかのぼる。

「あのね、島崎くん。行きたい高校の目途すら立っていないの、もう島崎くんだけなんだよ」

担任の馬場綾音先生（通称馬場ちゃん）にため息を吐かれて、口をとがらせるフリをした。

「ういっす」

「『ういっす』じゃない。もう秋なわけ。私立だと進路が決まってる人もいるの。『私立か公立か』とか、『近場か遠くか』とか、せめて判断基準を決めてほしいんだけど——」

「自分みたいなのを入れてくれるなら、どの高校でもいいと思ってるんで」

「もう、それじゃ困るんだよ」

馬場ちゃんは大きに頭を抱える。馬場ちゃんが机に飾っている柴犬のフィギュアが、振動でこてんとこけた。

「じゃあ、島崎くんには宿題を出します。学校案内を読んで、ちょっとでも気になると思った高校を明日までに最低三校リストアップして来なさい。そのあと先生と面談です」

最終的に馬場ちゃんは、上目遣いで俺をにらんでそう言った。

『呼び出し、どうだった？』

帰宅してスマホをのぞくと、友人の藤村からメッセージが入っていた。

俺はしばらく首をひねったあと、トトトとスマホを操作する。

『馬場ちゃんがかわいかった』

『お前はバカか』

秒で返事が来て、俺は吹き出した。藤村のツッコミは容赦なくって好きだ。

呆れた顔をした猫のスタンプを送ってきたあと、藤村は話を続けた。

『どうせ進路のことだろ。馬場ちゃん一年目なんだから、若い女の先生困らせるなよ』

『今のご時世、女とか関係ないだろ。困った馬場ちゃんがかわいってだけで』

『困らせて喜んでるとかガキだぞ。で、馬場ちゃんはなんて？』

『学校案内？ みたいなのを読んで、明日までに行きたい高校を三校リストアップしてこいって。そのあと面談』

『ふーん。じゃあいよいよ真面目に考えなきゃじゃん』

『マジメ、ねえ……』

スマホの画面を見つめて、俺は腕を組む。正直、適当に聞いたことがある高校をリストアップしてあげばいいと思ってたのに。例えば、藤村の第一志望の小田高とか（ま、馬場ちゃんに

「その成績じゃ無理」って言われるのがオチなんだけど。」

すると、藤村からリンクが送られてくる。それは『首都圏高校受験案内』という本の商品ページだった。

『せめて一日くらい本気で悩んでみれば？　こういう本、駅前の図書館にあるから』

『ま、どうせ島崎は図書館なんて行ったことないんだらうけど。どーせ』

そんなこんなで、それから三十分後。

珍しく藤村の言いつけを守った俺は、駅前の図書館にやってきた。

……正確には、「藤村の言い回しにイラツとした俺は」かもしれないけど。

数年前にできたばかりのこの図書館は、駅の横にある商業施設「ミナカ小田原」の六階にある。

ふだん本なんかめつたに読まない俺は、初めて足を踏み入れたわけだけど……。木と緑が印象的で、新しくってキレイで、「いいところだな」とシンプルに思った。

カウンターのお姉さんに話しかけて、藤村が教えてくれた本の商品ページを見せる。するとお姉さんは、パソコンでさくさくっと調べて、本の背表紙に貼ってあるラベルの読み方を解説しながら棚まで案内してくれた。俺みたいなのにも、お姉さんは優しくかった。

「『首都圏高校受験案内』……はい、これね。ご予約ください」

そう言って手渡してくれたのは、やたら分厚

い辞書みたいな本だった。

ためしに開くと、細かい字で色んな高校の紹介が書いてある。うげ、俺、こんなの読んでたら絶対眠くなる自信がある。

早くも眠気と吐き気に襲われながら、ひとまず索引で知ってる高校を探す。

えっと、じゃあ、とりあえず小田高かな（馬場ちゃんに「絶対無理」って言われるオチなのはわかりきってるんだけど）。

そう思ってパラパラとめくると、ちょうど、小田高のページでひっかかりを感じた。そうして見つけたのが——あの、謎の『GWR ケンヤ』と書かれたメモだった。

……なんだ、これ。なんかの暗号か？

メモをつまんで首をひねる。なんの数字かもわからなければ、そのあとのカタカナも、とても日本語とは言い難い。

一瞬、定期テストの記号回答を書き記したカニンングパーパーかと思っただけど、「ザ」とか「グ」は、さすがに選択肢にないか……。

とにかく、誰かが葉がわりにしてそのまま忘れていったんだろ。そう思って、俺はそのメモをもう一度本に挿し直そうとした。そのときだった。

「GWR、GWR……うーん、もっと先かなあ……」
そうブツブツとつぶやいて俺の背後を通る、小学五、六年くらいの男の子がいた。

思わず、彼をじっと見つめる。すると彼は、
「な、なに？　お兄ちゃん」

「あ、ごめん。えっと……その番号、なに？」

「さうして」

小声で尋ねると、彼はひょうひょうとした顔で答えた。

「本についてる番号だよ。今お兄ちゃんが読んでいる本にもついてるでしょ」

そう言われて、手に持っていた鈍器をひっくり返す。すると、背表紙には小さく「B・C・D」の文字と書かれたラベルが貼りつけてあった。あっ、さつきスタツフのお姉さんに教わった、これか。

俺は少し悩んで、それから、その少年に向けておぼろげと口を開いた。

「あのさ……俺も、さつきの本を探してるんだ。よかったら一緒に探してくれない？」

「あ、あった！『B・C・D』！」

少年は、嬉しそうにその絵本を手取る。

「『B・C・D』は、なんてことない、ラベルの「B・C・D」の下に書かれた文字のことだった。」

「はい、お兄ちゃん」と手渡された本、それは、『マザーグース』の本だった。なるほど、「『B・C・D』」はマザーグースのことだったのか……。

「じゃあ、ぼくは他の本を探していくから。まだ探したい本があったら、入り口にある図書館の地図を見るといいよ。じゃあ、またね」

立ち去る少年に「ありがとう」とお礼を言っ

て、本をパラリとめくる。すると、さつきと同じようにルーズリーフの切れ端がはさみであるのを見つけた。書いてあるのは、『B・C・D』の「B・C・D」の文字。あと、文字の隣にはなぜかイラストも入っている。これ、

なんだろう。リップクリーム……？

なんだか少しドキドキしながら、メモを引き抜いて『マザーグース』を棚に戻した。もはや受験案内なんてそっちのけで、少年に教わった館内地図を見る。足早に「B・C・D」の棚に移動する……が、思った以上に「B・C・D」の本が多い。この辺りは小説みたいだけど、もしかして、小説の背表紙にはみんな「B・C・D」の文字がついてるんじゃないかと思うくらいだ。あと、最初の「B・C・D」のものもよくわからない。いったいなんの記号なんだろう。

腕を組みながら棚の間をウロウロしていると、ふと、表紙が見えるようにディスプレイされた小ぶりの本が目についた。あれはたしか、文庫本って言うんだよね……。

その瞬間、俺はひらめいた。その本を手にとって、背表紙を確かめる。『B・C・D』……やっぱりそうだ、「B・C・D」は文庫本の「B・C・D」だ！

たしか文庫本がまとめて並んでいた棚があったことを思い出し、そちらに戻る。『B・C・D』はきつと、作者の名字だから、たちつ、つ、つ、つ……。あっ、この辺り、『B・C・D』だ。

でも、いったいどの本だろう。最後の最後で行き詰まっていると、妙なイラストが一緒に描かれていたのを思い出した。

リップクリームだと思っていたけれど、よく見たら、ふたを取った先端が少しとがっている。そうするとこれは、化粧品の口紅……？

そう思いながら並んでいる本の背表紙をじっくり見ていくと、とある一冊の本に釘づけにな

った。筒井康隆って人が書いた、『残像に口紅を』。……これだ！

急いで手にとって表紙をめくる。するとそこには、やっぱり、同じブルーグリーンがはさまっていた。

もう間違いない。これ、葉でも、カンニングペーパーでもない。この切れ端は、この本をめくった人たちをなにかに誘導する、暗号みたいなものなんだ。こうなるともう、男としてはワクワクせずにはいられない。……あ、いや、女子もそうかもしれないけど。

今度は『BORDER』の『ムチャ』の文字と、フライパンや鍋の絵。おっ、近いぞ。そう思って一度『残像に口紅を』を棚に戻そうとした。

……あれ？ そういえば、この幸が薄そうなの男の絵が描かれた表紙、どこかで見た気がする。「最近『ムチャ』で流行ってるんだよね」って、誰かから聞いたような……。

ふとそう思ったけど、俺の目はもう、次の『ムチャ』を探すのに夢中だった。

棚が近くだったおかげで、『ムチャ』はすぐに見つかった。吉本ばななの『キッチン』。そう言えど、ちょっと前に国語の授業で、馬場ちゃん「これ、好きなんだよ」ってかわいく笑って紹介してた気がする。……卒業する前には、読んでみるか。どんな話かは一切知らないけど。次は『831.7』と、山よりも大きい巨人みたいなイラスト。なかなか見つからないと思ったら、まさかの英語の本だった。そのタイトルは

『ガリバー旅行記』。……回りくどいな、日本語の絵本ならもっと早く見つかったのに。英語、勉強しろってことか？

ガリバーにはさまってたメモには、『BORDER』と、縦長の長方形の図。その長方形は、半分よりちょっと上の一部だけ、帯状に黒く塗られている。「この図なんだろ。しかもBの次はDってなんだ、さすがにわかんねえ」と思って、とうとうグーグルで「図書館 D な」と調べた。どうやら、「レファレンス本」「参考図書」といって、貸出が出来ず図書館内では読めない本らしい。館内地図に参考図書コーナーというのがあったので向かうと、『BORDER』のラベルをつけた『数学小辞典』という本を見つけた。

あ、なるほど、さっきの一部が黒い長方形は、この本の背表紙を表してたのか。てか、今度は数学かよ、どんだけ勉強好きなんだよ。そう思いながら表紙をめくると、今度は『BORDER』というメモが挟まっていた。

ここまで本を追ってきて、さすがの俺でも疑問が生じてくる。

これ、一体、「誰が」「なんのために」やってるんだらう。

集めたメモは、これで五枚になる。せいぜい三冊くらいで終わるかなと思っただけ。

こんな手がこんでいるのなら、もしかしたら、これは誰かが特定の人に向けて考えたゲームなのかもしれない。それを途中で俺が『首都

圏高校受験案内』を開いてしまったがために、ぶった切ってしまったとしたら……。い、今は、考えるのをやめておこう。メモを全部引っこ抜いてきてしまったせいで、もう、後戻りはできないんだから。

今度の頭文字は「ズ」。俺はもう、サクサクつとスマホに訊く。「ズ」は、郷土資料の「ズ」らしい。辺りを見回すと、ちょうどトイレの横に郷土資料のコーナーがあった。

『ズグー・グー・グー』は、『北村透谷詩集』という本だった。ここにあるってことは、小田原出身の文豪かなにかなんだろうか。

表紙をめくると、ぱらりと、小さな紙きれが床に落ちる。慌てて拾い上げると、それは、今までのルーズリーフの切れ端とは違うものだった。「書庫資料出納票」……なんだこりゃ。

手のひらよりも小さいその紙は、なにかの表のようだった。「資料名」の欄には「名著初版本復刻 珠玉選 4」、「資料番号」には「500437652」と謎の数字がそれぞれ手書きで書かれている。

俺、なんか間違えたかな。そう思ってさっきの『数学小辞典』に挟まれていたメモをよく見てみたけど、やっぱり、次を指し示しているのはこの『北村透谷詩集』以外ありえなかった。『北村透谷詩集』の中も、何度もくまなく探してみたけれど、はさまっていたのはこの小さな紙切れ一枚だけ。

詰んだか、これ。なんなんだ、この紙。しばらく紙切れをにらみながら頭を抱える。

ていうかこの、角ばってるんだか丸いんだかよ。くわかんない字、なーんか見覚えがあるような……。諦めるしか、ないのか。でもなんだか、この妙に親しみのある文字が、俺を簡単にそうさせてはくれなかった。

……とうとう、使うか。奥の手を。

少し負けた気持ちになりながら、その紙切れを手に入り口のカウンターに向かう。さっき俺にラベルの見方を教えてくれたお姉さんに、その紙を見せて声をかけた。

「あのお、これ……」

もごもごと俺が言うと、お姉さんはにこりと笑う。

「あつ、閉架図書の見覧ですね。では、こちらにお名前とお電話番号をお願いします」

「えっ、あ、はい」

なにがなんだかよくわからないまま、俺はその紙に名前と連絡先を書いた。「少々お待ちください」と言ったお姉さんは、しばらくして戻ってくる。

「こちらです。お戻しやお貸し出しの際にはまたお声かけくださいね」

お姉さんが俺に差し出したのは、厚さ十センチはありそうな、謎の箱だった。

え、なにこれ。お姉さん、こんなの渡されても困るんですけど！

そう言いたくなかった気持ちをぐっとこらえて、俺はひとまず「アリガトウゴザイマス」とその箱を受け取った。

なんだこれ、これも本なの？ おそるおそる

その箱の中身を取り出すと、まるで古文書のよ
うな古めかしい表紙の本が三冊。

えっと、『破戒』、『落梅集』、あと……。

最後の一冊・大きな蝶のイラストが印象的な
本を手にとって、俺はハツとした。

その本のタイトルは、『若菜集』。そして、作
者は「島崎藤村」……。

俺は迷わず『若菜集』を選んで、パラパラとめ
くっていった。すると、本の半ばくらいに、赤い
折り紙がはさんであることに気づく。なんだこ
れ。この形、リング……？

よく見ると、なにか裏に書いてあるように文
字が透けている。破らないように気をつけて折
り紙を開くと、またも見覚えのあるあの文字が、
そこに踊っていた。

『クリアおめでとう！ お城の見えるテラスに
て待つ』

なーるほど。結局、このゲームは、全部アイツ
に仕組まれたものだったわけだ。

ま、そりやそうか。だって俺をあおってここに
呼びよせたのは、アイツなんだから。

まったく、暇かよ。受験生だろ一応。しかも
小田高なんて、難しいとこ志望の。

すっかり見慣れた館内図を見ると、「お城の
見えるテラス」は、この図書館のいちばん西側
にあった。

その名の通り小田原城がよく見える休憩スペ
ースの、一番左奥のイス。

そこに、最近伸ばしているという髪を二つに

まとめた、「アイツ」の後ろ姿があった。

「おい、藤村」

俺が小声で話しかけると、彼女——藤村若菜
は、ゆっくりと振りかえる。

「……ずいぶんと時間がかったじゃん、島崎い」
横顔でもわかるくらいのしたり顔が、なんか
腹立つ。

俺は空いていた隣のイスに座って、あきれ顔
で藤村を見た。

「なにやってんだよ、俺で遊びやがって」
「むしろ遊んであげたんだよ。楽しかっただろ？」

うっ。……それは、まあ、多少はワクワクした
かもしれないけど。

なにも言い返せないでいると、藤村はお得意
の皮肉めいた口調で口を開いた。

「なんか、不憫でならなくてねえ。一生懸命馬
場ちゃんの気を引こうとしてる島崎が」

「ハア？ だる。別にそこまでじゃないから」
「ほんととかー？ ま、わたしの名字のせいだ、馬

場ちゃんに『島崎藤村』なんてコンビにされち
やって、多少は責任感してるからさ。色々鬱屈
とした受験生に、少しでも息抜きをご提供でき
ればと思ひまして」

「なんか、腹立つな……。てか、途中であのメ
モを他の誰かが見つけてたらどうするつもりだ
ったんだよ」

「そのときはそのときだな。ここに島崎が来な
くって、代わりにこれがその人の手に渡ってた
ってだけ。はい」

藤村は、その白く細い腕を、俺のほうにゆ

つとのばしてきた。

「……リンゴジュース？」

「歩き回って疲れたろ？ あげる」

「……ありがと」

リンゴジュースの小さなペットボトルを受け取ると、藤村はやけに安心したような表情で笑った。……そんなに俺に渡したかったのか、これ。その自販機で買っただけのやつだろうに。

「なー、さっきからなんでリンゴ？ 藤村、そんなに好きだったっけ」

「まあ、普通？ 馬場ちゃんの授業を卒業までちやーんと聞いてたら、そのうちわかるかもな。教科書に載ってたし」

「はあ……？ てか、結局藤村のせいで馬場ちゃんの宿題進まなかったんだけど」

「志望校を考えるってやつ？」

「それ。もう面倒だから、『小田高』って書いて出しておこうかな」

やぶれかぶれにそう言うと、藤村はちよっと驚いたような表情で俺を見た。

「えっ。……うん、いいと思う。うん、それがいいよ、うんうん」

「いや、なに納得してんだよ。冗談だよ、冗談。俺が小田高はさすがに無理——」

「島崎がそう思い込んでるだけだろ。島崎、授業中寝てる割にはテストの点悪くないんだし、才能はあると思う。今から死ぬ気で頑張ればなんとかなるって」

「他人事だと思って、適当に言いやがって」

「『適当』だよ。適するに、当たる。心強い言葉

だろ？」

そんな言い回しが絶妙に藤村らしくって、俺はもう、言い返すのをやめた。

「さ、そうと決まったらもう一回『首都圏高校受験案内』を見に行くぞ。あと、滑り止めになりそうな私立も考えなくっちゃ」

藤村は勢いよく立ち上がると、俺の腕をぐいと引っ張る。

「えー、疲れたからジュース飲ませてよ」

「なんだ、まだ飲んでなかったのか。『命短しなんとやら』って言うだろ、早く早く！」

「物騒だな、オイ」

なんだこいつ、急にやたら元気だな。俺が同じ高校に行こうとしてるの、そんなに嬉しいのかな。

……………

……まさか、な。だって、藤村だし。ざわつく心を無理矢理落ち着かせて、藤村がくれたペットボトルのふたを開けた。そのまま、喉の奥に流し込む。

果汁十パーセントの割に、そのリンゴジュースは、なんだか妙に甘く感じた。

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の實に
人こひ初めしはじめなり

(島崎藤村著『若菜集』七・一四〇「初戀」より一部抜粋)

ミライアルオトメ

遠山彼方

いつも静かな図書館が、今日はちがった。歌が、きこえるのだ。女の子の歌が。

朝から降り続く雨は、結局、陽が落ちた今でも降り止むことはなかった。天気の良いか、お盆という時期的なものか。今夜の図書館はやたら空いていて、自習席は居座り放題だった。

窓をつたって落ちていく雫を眺めて、わたしは、はあっと小さくため息をつく。

帰りたくない。帰ってもどうせ、名前と顔が一致しないような親戚のおじさんおばさんが、ひいじいちゃん長寿祝いを名目にどんちゃん騒ぎしてるだけだから。……ったく、これだから片田舎のお盆は。こっちは受験生だっていうのに。

わたしがどの高校に行きたいか、とか。わたしの夢はなにか、とか。特に興味もないくせに、わたしの未来を酒のつまみになんてしないでほしい。

そのとき、スマホが短く振動した。お母さんからの「帰って来なさい」だろうと思いつつ、口を解除すると、メッセージの送り主は、クラスメイトの男子・島崎だった。

『夏休みの宿題の範囲表、もらってソッコーなくしたっぽい。写真送って』

それ、今さら言うんかい。八月も明日から後半だつてのに。

いまだに志望校も決めてない島崎らしいマイペースっぷりに、つい苦笑いをする。

『今出先。あとで送る』

『えー。今、馬場ちゃん元気かと思って、国語だけはやる気出してたのに』

その文面を見た瞬間、うわついていた気持ちに釘を刺された気分になった。

馬場ちゃんは、うちの担任で、国語の先生。二十三歳独身のふわふわ系お姉さん。

……そして、島崎の、好きな人。

冷静に考えれば、中学生から先生への恋なんて無謀に決まっている。島崎の恋はどうせ報われない。ほんと、お前はばかだよ。ばか島崎。島崎のばか。ばかばか。ばあーか。

返信もしないままスマホをリュックに投げ入れて、数学の問題集を開いた。すぐ帰るのもシヤクだから、あと三問、証明の問題を解いて帰ろう。そう思った、そのときだった。

——あれ？ 誰か、歌ってる？

十代くらいの女の子の歌声が耳に入って、思わず辺りを見回す。だけど、わたし以外、そんなことをしている人は一人もいなかった。

……ま、そのうち、司書さんが注意してくれるだろう。

そう思って無視しようとしたけど、その歌は、一向に止む気配がない。集中できないわたしは、

自習席を立って、その歌声の主を探すことにした。

たぶん音源は、向こうのテラス席のほう。向かう間、数人にすれ違ったけれど、みんな気にするそぶりもなかった。司書のお姉さんでさえひょうひょうとした顔だ。なんだか狐につままれたような気分になりながら、ガラス張りのテラス席を覗く。

そこにはただ一人、紺のセーラー服を着たおさげ髪の女の子が、眼下に広がる夜の街を観客席にするようにしてのびやかに歌声を響かせていた。おいおい、まじか。ステージじゃなくて図書館だぞ、ここ。

歌っているのは、わたしの知らない歌。なんだか「早春賦」とか「朧月夜」みたいな、音楽の授業で習うような歌に似ている。

「きよおーはあ、ふたあたびいー、こおぬもおのをおく……」

たぶん何番かを歌い終えただろうキリの良いところで、思い切って口を開いた。

「あの」

彼女が、くるりと振り返る。背景の暗闇との対比のせいかな、白い肌がやけに印象的だった。

「ここ、図書館だけど。歌っちゃダメだと思う」
見る限りわたしと同じ中学生っぽいので、タメ語で声をかけてみる。

するとその子は、「ああ」と小さくつぶやいた。「そうね、ごめんさい。ここ、この前は向こうで音楽会をやっていたから。うるさくしてもいいものだと思って」

そんなわけないだろ。世間知らずのお嬢様か。呆れていると、彼女は急にふふっと笑いだした。

「あなた、よく聞こえたわね。私の歌声」
「はあ？ 当たり前だ、あんな大きな声で歌ってたら。」

「ちよつと待って」と呼びとめられた。

「ねえ、少し座っていいかない？ 私、あなたとお話しがしたいわ」

「いや、わたしは別に……」
「そんなこと言わずに！ さき、座って座って！」

なんて強引なんだ、この子。

断れない性格のわたしは、しぶしぶ、彼女の隣のイスに腰かけた。ああ、こんなことになるなら、やつぱり早く帰ればよかった。

「あなた、いくつ？」
そう聞かれて、ぶっきらぼうにボソッと答える。

「十五」

「ふふ、あなたも未来あるおとめね。名前は？」
「……ワカナ」

「あら、ミスワカナと同じ名前！ 私、あの人の歌好きだったわ。改名しちゃって、子どもながらにちよつとシヨックだったわね」

「誰それ」

「ええー、知らないの!? ラジオによく出てた女の漫才師よ。アコーデオンの音にのせて歌うの」

「ふうん……」

「そんな、聞いたこともない漫才師と一緒にしないでほしいんだけど……。早くも逃げたい気持ちだが、だんだん斜め座りになる体に表れてしまう。」

「そんなわたしの様子なんて歯牙にもかけないで、その子は楽しそうに話を続けた。」

「あつ、私ったら、人に聞いておいて名乗ってないじゃない。私、飯田梅。小田高女の三年生」

「……小田高？ えっ、高校生？ しかも小田高ってことは、頭いいってことじゃん。」

「あ、わかった。勉強し過ぎて変になっちゃったから、あんな大きな声で歌ってたんだ。それを司書さんも知ってたから、あえて注意しなかったんだ。わたしもこうならないようにしないと。」

「憐憫の目を向けていると、彼女——ウメは、続けてペラペラと自分のことを話す。」

「家族は、父と母と祖父と、兄が二人、姉が一人、妹が二人に弟が二人」

「大家族じゃん、珍しい。ま、うちもじいちゃんたち居るし、よそよりは大家族だけど。ウメの場合、弟や妹だから、教育費で両親に迷惑かけないよう、勉強頑張りすぎてるんだな。きつと。」

「で、住んでるところは青物町ね」

「青物町って……聞いたことあるけど、それ、どこだっけ。て、いうか。」

「……そんなこと、矢継ぎ早に教えられても」

「ぼそっとつぶやくと、彼女はハツとしたような顔になった。」

「たしかにそうね！ やっぱり盛り上がるのは、恋のお話よね！」

「えっ。いや、ちがくて——」

「ワカナは、好きな方、いる？」

「へっ」

「その言葉に、ぐっと心が揺さぶられる。なんで、こんな初対面の高校生なんかになんか聞こえなくっちゃいけないんだ。」

「……ウメは、どうなの」

「ムツとして質問を返すと、ウメは「待ってました」と言わんばかりに微笑んだ。ああ、聞いてほしかっただけね。」

「私はねー、お隣の家のセイさんが大好きなのさ。歳は私より二歳上で、男前で凛々しくて優しく、『梅は歌が上手だね』っていつもほめてくれて、あつ、今は遠くにいるのだけれど……」

「ふうん、東京？」

「違うわ。南のほうで、お船に乗ってるって聞いた」

「船乗り？ 遠くってことは、マグロ漁師とか……？」

「マグロ漁船の甲板に仁王立ちしているイケメンを想像して、「セイさんも若いのに大変なんだな」と思った。」

「セイさん、本と歴史が好きな人でね。本がいっぱいあって、あんなにきれいなお城が見えるここにいれば、いつかセイさんが来てくれるんじゃないかと思って。だからここで、セイさんが好きな歌を歌いながら彼を待っていたの」

「……？ そんなことしなくても、連絡先とか知らないの？」

「できないわよお、連絡なんて。待つことしかできないの、私は」

「……なんかよくわかんないけど、案外、奥ゆかしいんだね。ウメ」

「しかたがないのよ。ああ、無事に帰って来られたかしら。それだけが気がかりだわ」

「そんな、大げさな話なのか……？」

まあ、マグロ漁船、お給料高いつていうもんな。きつと危険がつきものなんだろう。

自分を納得させていると、ウメはボソリとひとりごとのようにつぶやいた。

「あの人が、今、誰を好きでもいいの。幸せでいてくれるのなら」

……なんだ。なんか、ちょっと切ない感じなのか。ウメの言葉を聞いていると、きゅつと、わたしまで胸が痛んだ。

思いがけず、ポロリと言葉がこぼれる。「……ほんのちよつとだけ、似てるかも。わたしの恋も、どうせ叶いっこないから」

ウメは、勢いよくわたしのほうを向いた。「なぜ？ ワカナはどうしてそう思うの」

「だって、その人はわたしのこと、好きじゃないって分かってるもん」

「どういうこと？」

「他に好きな人がいるんだよ。わたしとはただの友達で、周りからも漫才コンビみたいって言われてる」

「漫才？ あっ、やっぱりあなたって、ミスワカナを目指して……？」

「そんなわけないでしょうが」

「それで、その人、今も近くにいらっしやるの？」
近く……？

そう聞かれて、わたしは戸惑う。

まあ、夏休みが終わればまた毎日のように顔を合わせるようになるし、なんなら、スマホでいつでも簡単に連絡は取れるけど。「近く」って、どういう基準なんだろう……。

首をひねっていると、ウメは優しい顔で口を開いた。

「もしすぐに会える距離にいらっしやるのなら、その時間を大切になさいね。『命短し、恋せよおとめ』よ」

「なにそれ」

「『ゴンドラの唄』の歌詞よ。大好きな歌なの」

「し、知らない……」

「あら。なら特別に、今度はあなたに向けて、もう一度歌ってあげる。セイさんじゃない人に向けて歌うことなんてめったにないから貴重よ」

ウメはすつと立って、めいっばい息を吸い込む。えっ。ちよつと。

「だ、だからっ、図書館で歌っちゃダメなんだってばっ——」

あわててウメの肩をつかんでやめさせようとした、そのとき。

わたしの手はウメの体をすりぬけて、空を切ったのだった。

……えっ。
呆然とするわたしの耳に、澄んだウメの歌声が届く。

『いのち短し、戀(こい)せよ、少女(おとめ)、朱き唇、褪(あ)せぬ間に、熱き血液(ちしお)の冷えぬ間に、明日の月日のないものを。』

その歌声は、なんだか、心の奥深くにすうっと入り込んで。

なんだかよくわからないけれど、頬をつうつとひとすじだけ、涙がつたうのだけはわかった。なんで。なんでこんな気分になるんだろう。こんな歌、知らないのに。

ふと、ウメを見る。ウメはわたしを見て、にこりと笑った。

「話し相手、なつてくれてありがとう。さあて、今年もそろそろ帰らなくっちゃ」

「今年も」って、どういうこと。「帰る」って、どこに。

聞きたいことがいっぱいありすぎて、なかなか言葉が出てこない。

ただ……。

わたしが、ウメに触れられないこと。

ウメの歌声が、どうやらわたし以外に聞こえていないこと。

ウメの言葉に感じた、数々の違和感。特に、船に乗っているセイさんのこと。

あと、今日がお盆で、それに加えて今日は――。

それらが、ウメが何者か、じわりじわりと伝えてきていた。

「ワカナのこと、心から応援しているわ。思いを伝えられないまま……なんて、私みたいになっ

てはだめよ」

私みたい……なんて。縁起でもないこと言わないでよ、ばか。

「ウ、ウメは……」なんとか、言葉を絞り出す。「ウメは、なんで……どうして……。だって、あなただって、『未来あるおとめ』だったでしょう……？」

「しかたないのよ。国に命をささげるような、そういう時代だったんだから。でも――」

ウメは、ぎゅつと唇をかみしめたあと、悲しげに笑った。

「なんで、よりによって、戦争が終わった日に死んでしまったんでしょね」

そう言い残して、ウメは、わたしの前からすうっと、まるで最初からいなかったかのように消えた。

あまりにも今起こった出来事が信じられなくて、その場から動けなくなる。不思議なことに、「怖い」という感覚はなかった。ただただ、頭がぼうつとするような。

あれは、もしかして夢だったのかな。もしくは、勉強疲れが見せた幻？

それでも、ウメの歌声は、未だにわたしの体の中に響いていて……。

――違う。夢でも幻でもない。ウメは、たしかにいた。いたんだ。

とつさにリユックからスマホを取り出して、グーグルを開いた。

まず調べたいのは、『ゴンドラの唄』。大正時

代に発表されて、その後も昭和にかけて人々に長く愛され続けた歌謡曲……らしい。

次に『ミスワカナ』で検索すると出てくるのは、戦前から戦後にかけて活躍した女流漫才師。戦時中に芸名の「ミス」が敵性語——つまり、敵国の言葉だという理由で、一時「玉松ワカナ」に改名させられていたみたいだった。

わたしが聞き間違いだと思っただけで勝手に「小田高一」と勘違いしたのは、本当は「小田高女」。正式名称は「小田原高等女学校」で、昭和初期、今の中学生と高校生の歳の女の子たちが通う学校だったらしい。終戦間もなく、名前が「小田原女子高等学校」になって、「小田原城内高等学校」になって、結局今は小田高に併合されたようだ。図書館にあった『小田原城内高等学校 建学百年の歩み』という本を開くと、ウメと同じセーラー服を着た女の子の、古い写真が載っていた。

そして、震える手で、わたしはその文字を検索窓に打ちこむ。

『小田原 青物町 太平洋戦争』

それは、今から八十四年前の今日。昭和二十年八月十五日。

前日に日本がポツダム宣言を受諾し、お昼には敗戦を告げる玉音放送が流れた、まさにその間の、真夜中のこと。

基地に帰る一機のB-29が、余った爆弾を捨てただけの、米軍の記録にもない無差別の攻撃。それは当時の小田原の市街部——万年町や幸町、そして青物町の家々を、四百戸以上も焼き

尽くした……。

図書館にも、いくつかその「小田原空襲」について書かれた本があった。命からがら生き残った人々のインタビューでは、皆さんそろって、同じような言葉を口にしていた。

『どうして、終戦の日にあんな目に遭わなくちゃいけなかったんだ』

『日本がもつと早く降伏していれば、こんなことにはならなかったのに』

わたしはそこまで読むと、本をぎゅっと抱きしめて、図書館の天井を仰いだ。

と、そのとき。

スマホが長く振動する。画面を開くと、今度こそ発信者は「お母さん」だった。

わたしはあわてて、さっきのテラス席にかけこむ。相変わらず、そこには誰もいなかった。

「も、もしもし」

「若菜、何時だと思ってるの！ 今どこ！ ご飯食べないつもり？」

「ごめんなさい……」

「まったく、勉強するのはいいけど、ほどほどにしなさいよ。今日はせっかく誠一郎おじいちゃんのお祝いも兼ねてみんな集まってるのに」

「は、はい。今、帰りま——」

そのとき、頭の中で、バチツと火花がはじけたような気がした。

ひいじいちゃんの名前、「誠一郎」って……。
「お母さん！ 誠一郎ひいじいちゃんって、たし

か戦争に行つたつて言つてたよね？」

「えっ、どうしたの急に」

「だよね！」

「あ、うん。たしかそのはずだけど。軍艦に乗つて、なに、『めしたき兵』つて言うの？ とにかくなんか、コックの見習いみたいなのをしてたつて聞いた」

「船……。あ、あと、ひいじいちゃんつて昔、青物町つてところに住んでたかな？」

「青物町つて、今の浜町とかだよ。たしか子ども頃はあの辺りに住んでたけど、戦争から帰つてきたら空襲で一帯が焼けちゃつて、何も残つてなかつたつて言つてたかなあ。その空襲に巻き込まれて亡くなつた隣の家の子が初恋の相手だつたんだつて、昔、『おめーにならよかんべえよ』つて言いながらこつそり話してくれた気が——」

「それ！ それだ！」

「なにがよ」

「あ、いや、あとで話す。とにかくすぐ帰る、ごめん！」

「あつ、ちよつと——」

わたしは通話を切つて、テラスをキョロキョロと見回した。だけど、あの子はやつぱりもういなくなつて。

ああ、もうちよつと早く気づいていれば。もどかしくなりながら、わたしは急いで帰り支度を始める。

……まだ、本人に聞いてみないとわかんないけど……ウメ、わたししたぶん、「セイさん」のこと知

つてるよ。もしかしたら、わたしにセイさんの血が受け継がれているから、わたしだけにはウメの歌が聞こえたのかもしれないよ。

——ねえ、ウメ。セイさん、ちゃんと、ちゃんと小田原に帰つてきてるよ。たしかに、優しく、本と歴史と歌が好きで……まあ、少しはイケメンかもね。

来年の八月十五日、この場所で。

セイさんのことと一緒に、わたしはウメに、いい報告ができるんだろうか。

ウメの後輩として紺の制服を着て、「いい恋をしてる」つて、胸を張つて堂々と言えるんだらうか。

それは、わからない。わからないけれど——。ウメやひいじいちゃんが作つた歴史の、その先。

いまを生きる「おとめ」の未来に淡い期待を抱きながら、わたしはアイツに、ひとつ、メッセージを送つた。

『宿題の表、やつぱ写真なんて送つてやんない。コピーやるから、明日図書館集合』

ショートストーリー募集にあたり、小田原にゆかりのある作家のみなさまにご協力いただきました。この場をお借りて御礼申し上げます。

迎ラミン

小田原高校出身。小説家。『白黒パレード〜ようこそ、テーマパークの裏側へ!〜』（マインナビ出版／二〇一八年）で「第三回お仕事小説コン」（小説家になろう×マインナビ出版）優秀賞を受賞しデビュー。『保健室のヨーゴとコーチ』（光文社／二〇一九年）では小田原市を舞台にした作品を書く。働く人々が様々な困難や謎に直面しながらも奮闘する、「お仕事小説」ジャンル等を中心に執筆中。

遠山彼方

小田原市出身。第三回ポプラ社ピュアラブ小説大賞（ポプラ社主催）を受賞し「渡会くんの放課後恋愛心理学」で二〇二一年に小説家デビュー。児童文庫を中心に精力的に執筆中。第十二回集英社みらい文庫大賞で大賞受賞、二〇二三年四月〜六月朝日小学生新聞にて『学園ミリオネア100万円ゲーム』を連載。ショートストーリー募集企画における書き出し文を提供。

こちらに掲載されている物語は、小田原市立小田原駅東口図書館で二〇二四年七月から三ヶ月間募集した、図書館を舞台にしたショートストーリーの作品です。

※注意

掲載されている作品の著作権は著作者本人に帰属しています。
本冊子の転売はおやめください。
冊子配布終了後も、小田原市立小田原駅東口図書館にて閲覧ができません。

小田原市立小田原駅東口図書館
図書館シヨートストーリ作品集

発行日 二〇二四年十一月十八日

発行 小田原市立小田原駅東口図書館

住所 神奈川県小田原市栄町一―一―五

ミナカ小田原六階

電話 〇四六五―二〇―五五七七